

793
Ka144k
(2)



00270372



1793 Ka 144 ka (2)

一般資料

花道古書集成

第一卷第五期

華道革新研究會編輯



大日本華道會發行

花道古書集成

第一卷 第一期

華道沿革研究会編輯



大日本華道會發行



270372

序

時は移り思想は動く、人文の發達は寸時も息むを許さない、世は擧げて科學の指す方向へと波垂れてゐる。

由來花卉藝術は一面に於ては創作を期するの造型藝術であり、他面に於ては亦人間生活の精神食糧としての使命を持つて居り、時代の背景と社會の反映とを無視しては存在の意義を未ふ事言ふを待たない。

顧りみて吾花卉藝術界の現状は果して如何であらうか。

立華、格花の如き古典藝術を繼承する者、果して古典の眞意を誤つては居ないであらうか。

將又近時流行の盛花投入家の多くが誇稱する如く、果して先人の研究に見るべきものが尠なかつたであらうか。

吾人は遺憾ながら無條件にて肯定する事に大なる躊躇をなさざるを得ない。

古典派の多くが傳說的傳統に偏して古典の形骸を守り、革新派の大多數は先人の研究を輕んじ、而も一進一退未だ何等の見る可き境地を劃し得ない。爲めに斯道の史的研究の如きは全然等閑に

附され、或は寧ろ傳統に言寄せて史家への壓迫をさへ辭せざるの風が見え、あたら珍籍寶卷も當に湮滅に類し、偶々現存するものは藏書家の堂奥に深く閉藏せられて徒らに虫蝕を餘儀なくされてゐる、本邦獨自を以て其誇とする花卉藝術文献も全く風前の燈火とも言はん状態に置かれてゐる。吾等華道沿革研究會は深く期する所あり、茲に花道古書集成を編纂し、沿く斯道の文献を蒐集複版して一は永遠の保存に供へ一は斯道の正しき資料となし、古きを覺醒せしめ新らしきを啓發するの使命を果したいと希ふ。

敢て花卉藝術家並に之が愛好家への好同伴たるを信ずる次第である。

終りに本集成刊行に際し貴重秘藏の珍籍を快く貸與されたる安達潮花氏に謝意を表す。

昭和六年二月

華道沿革研究會同人

齋藤巢潮
山村宗謙
平田自樂堂



風流
美人
生美合

菊川英山筆

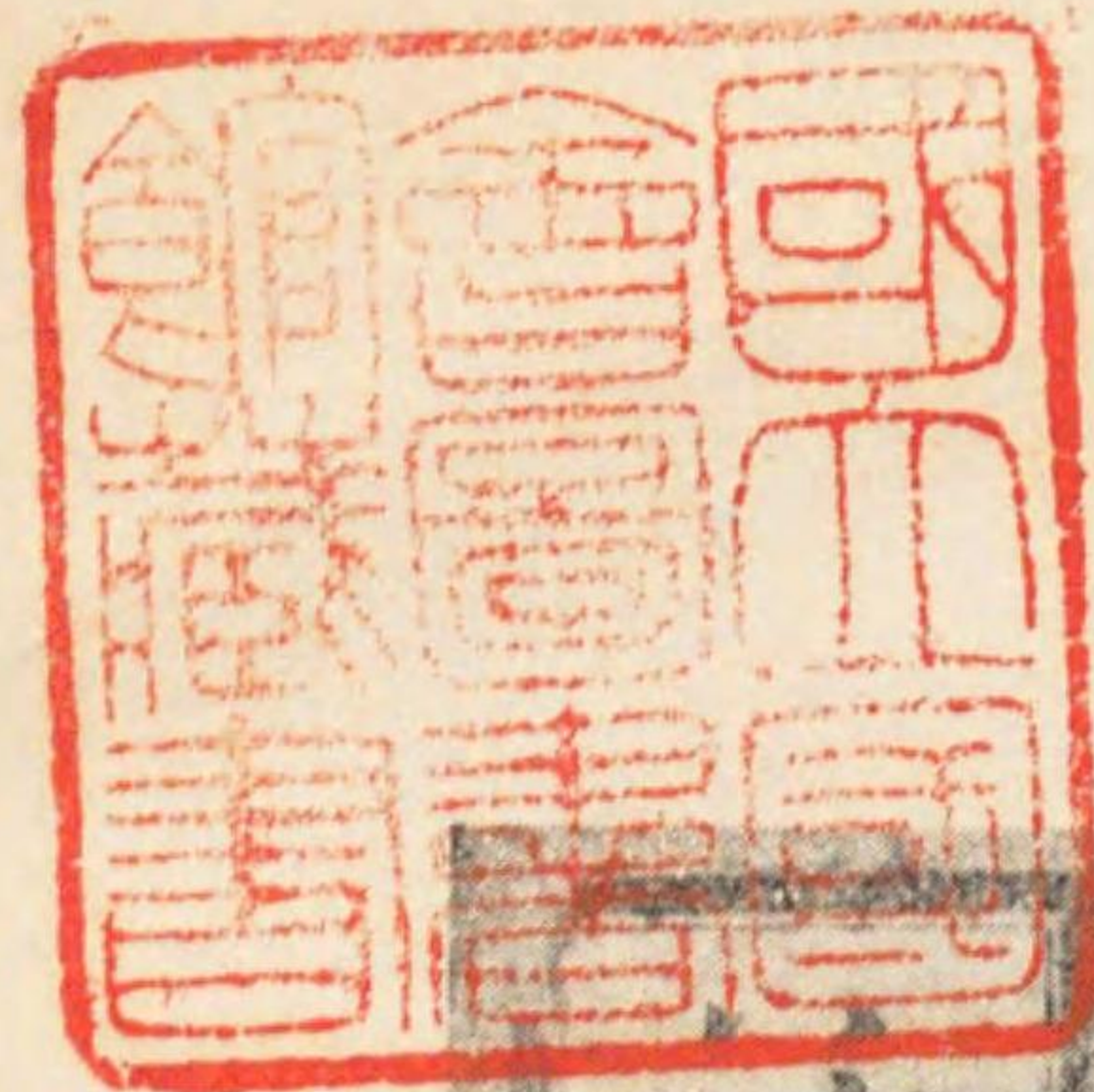
舟とるるまゝのほろ菊ハ
えいこのとつら花は面くら

花道古書集成

第一期 第五卷 目次

一、活花圖大成	二卷
一、生花出生傳	二卷
一、生花出生傳圖式	三卷
一、插花故實集	四卷
一、庸軒流四季の枝折	三卷
一、拋入花薄精微	二卷
一、瓶花容導集	四卷
一、插花秘傳圖式	一卷
一、東錦	一卷

目次

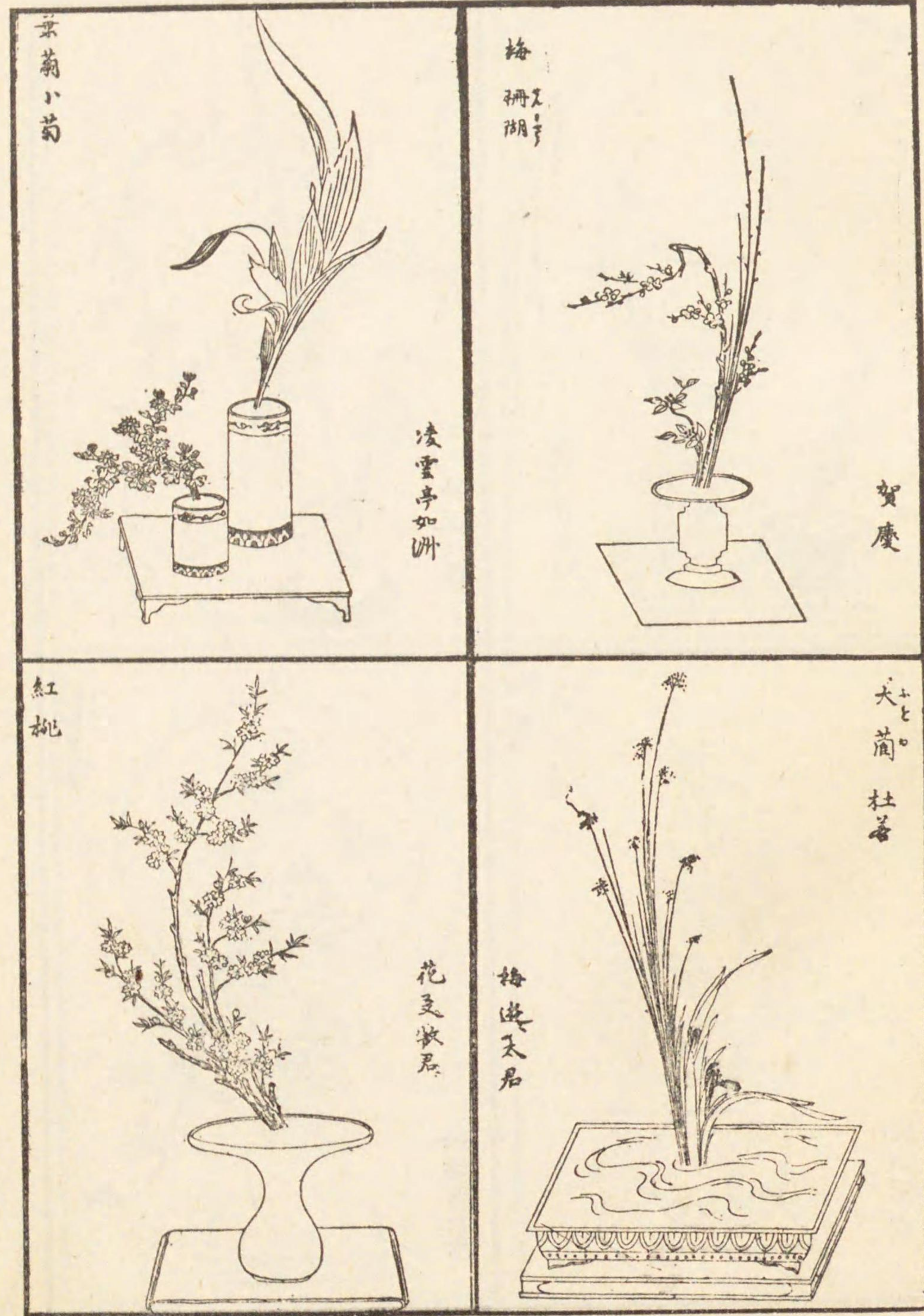


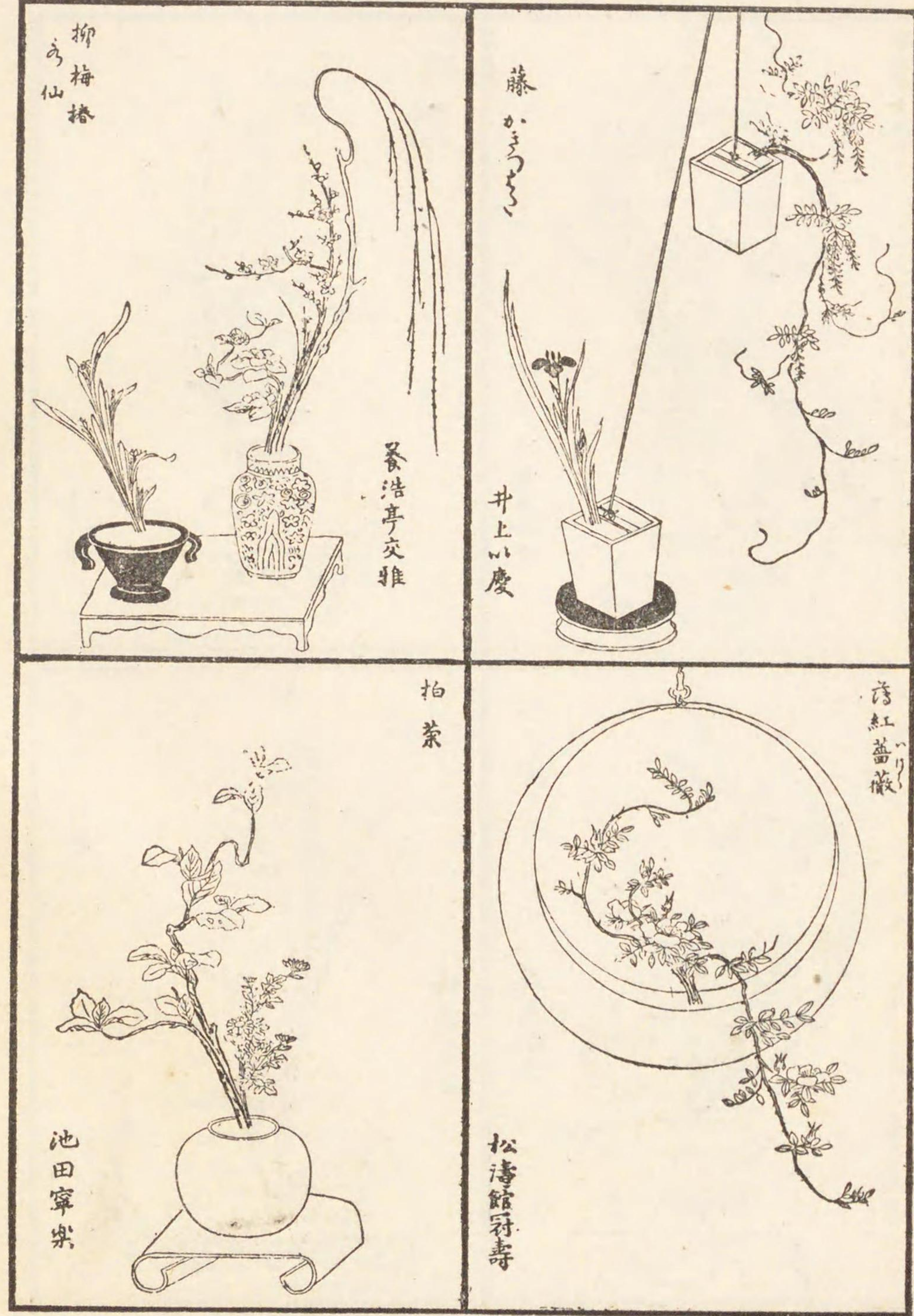
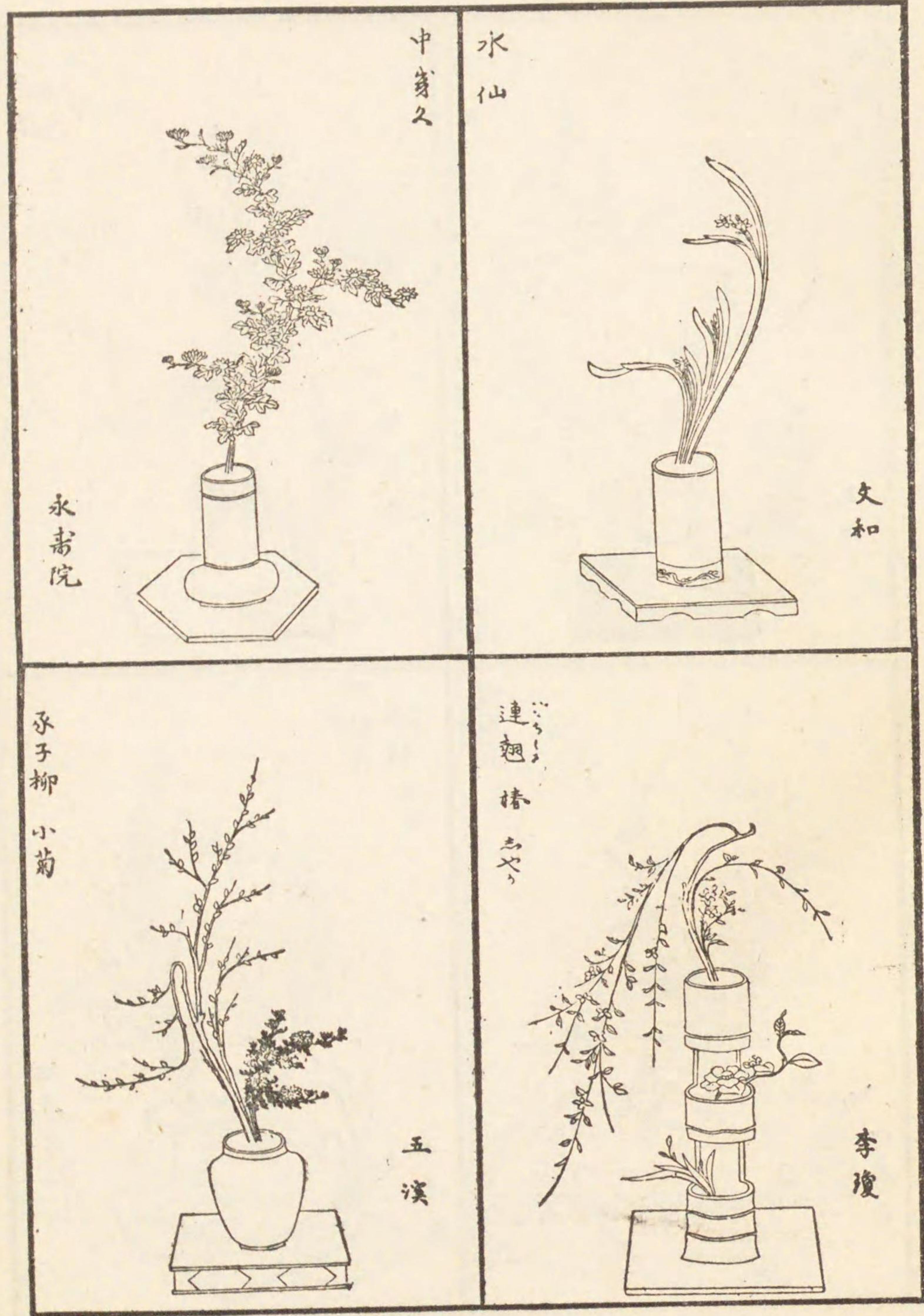
沽花圖大成

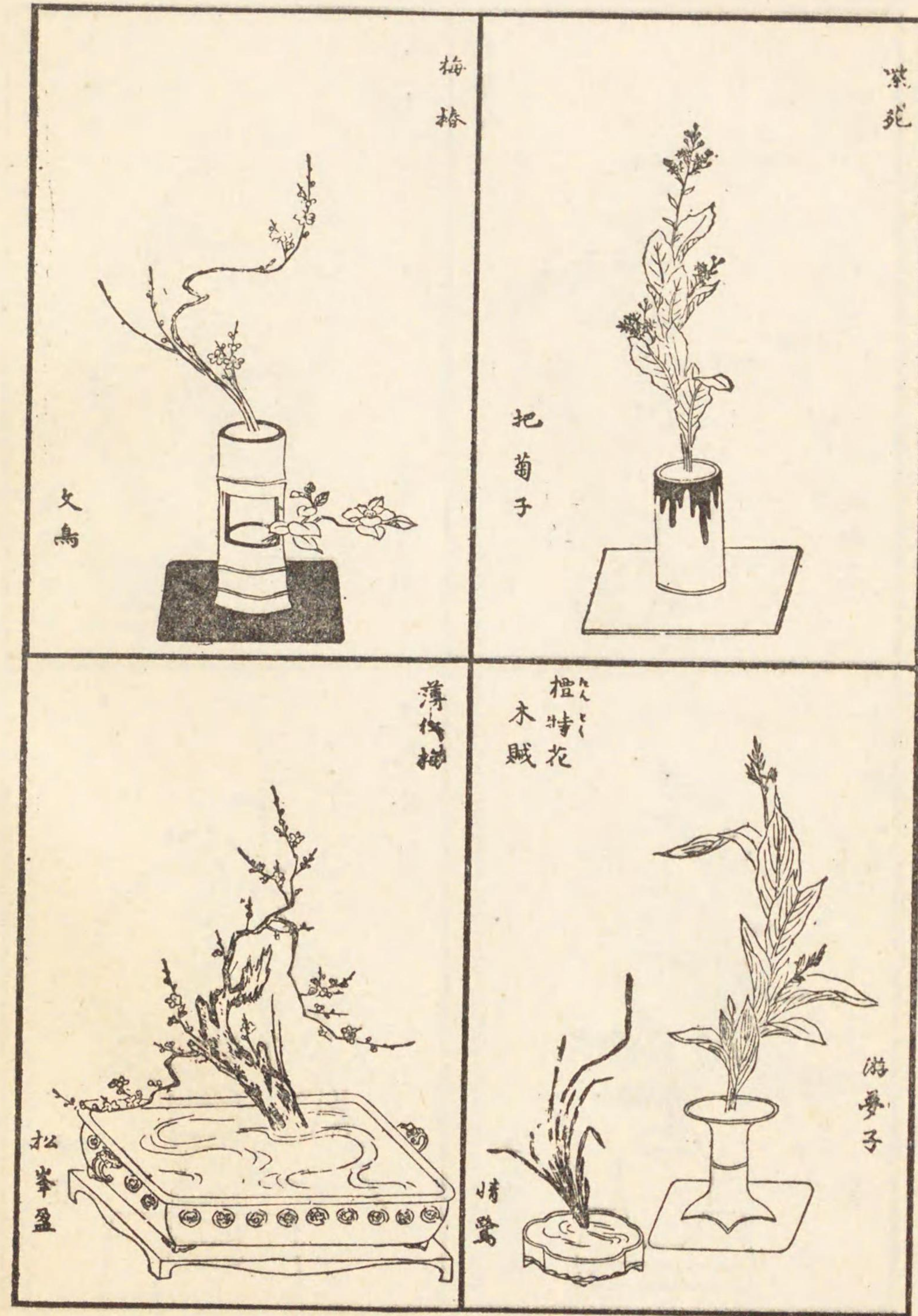
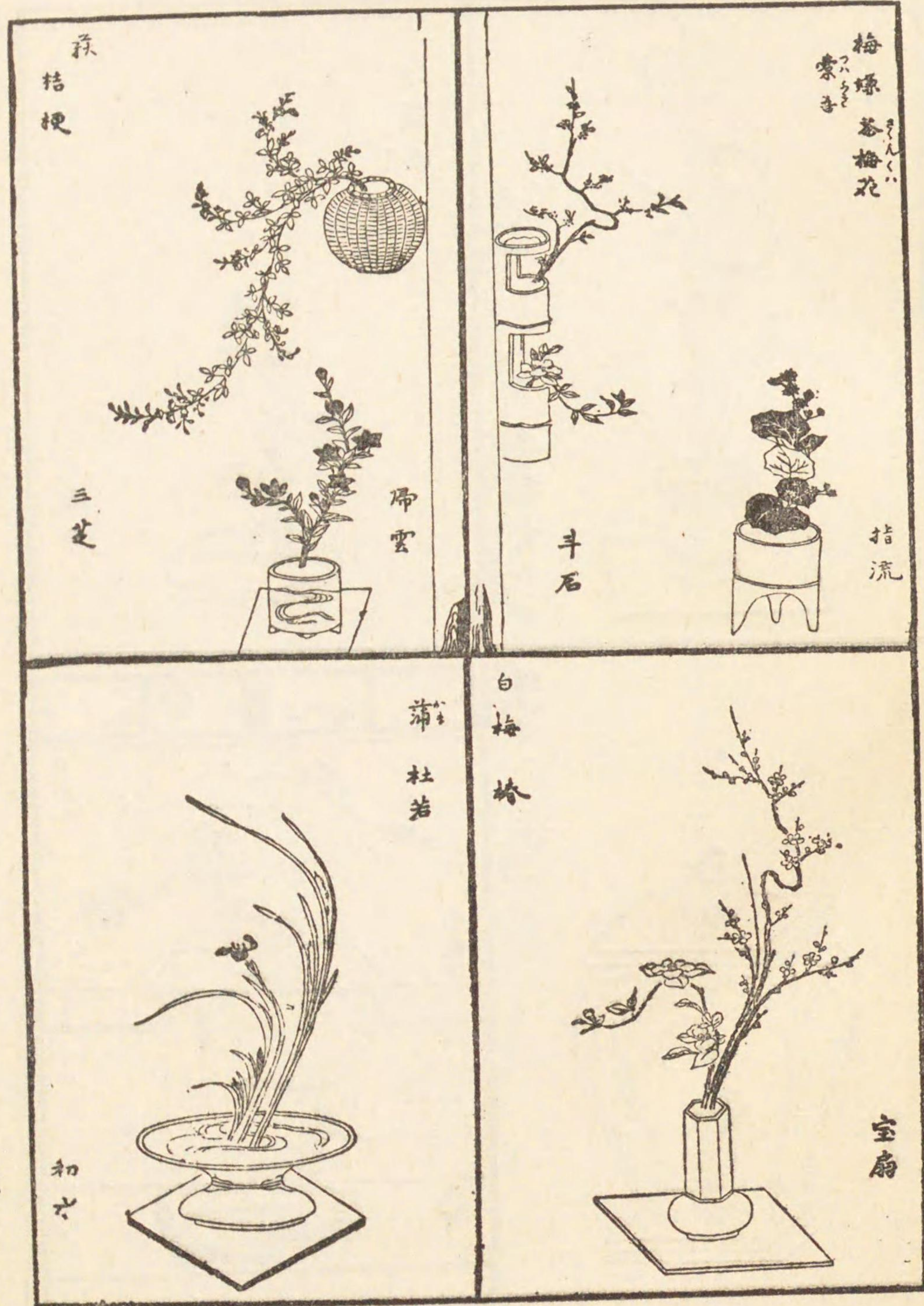
前編

乾



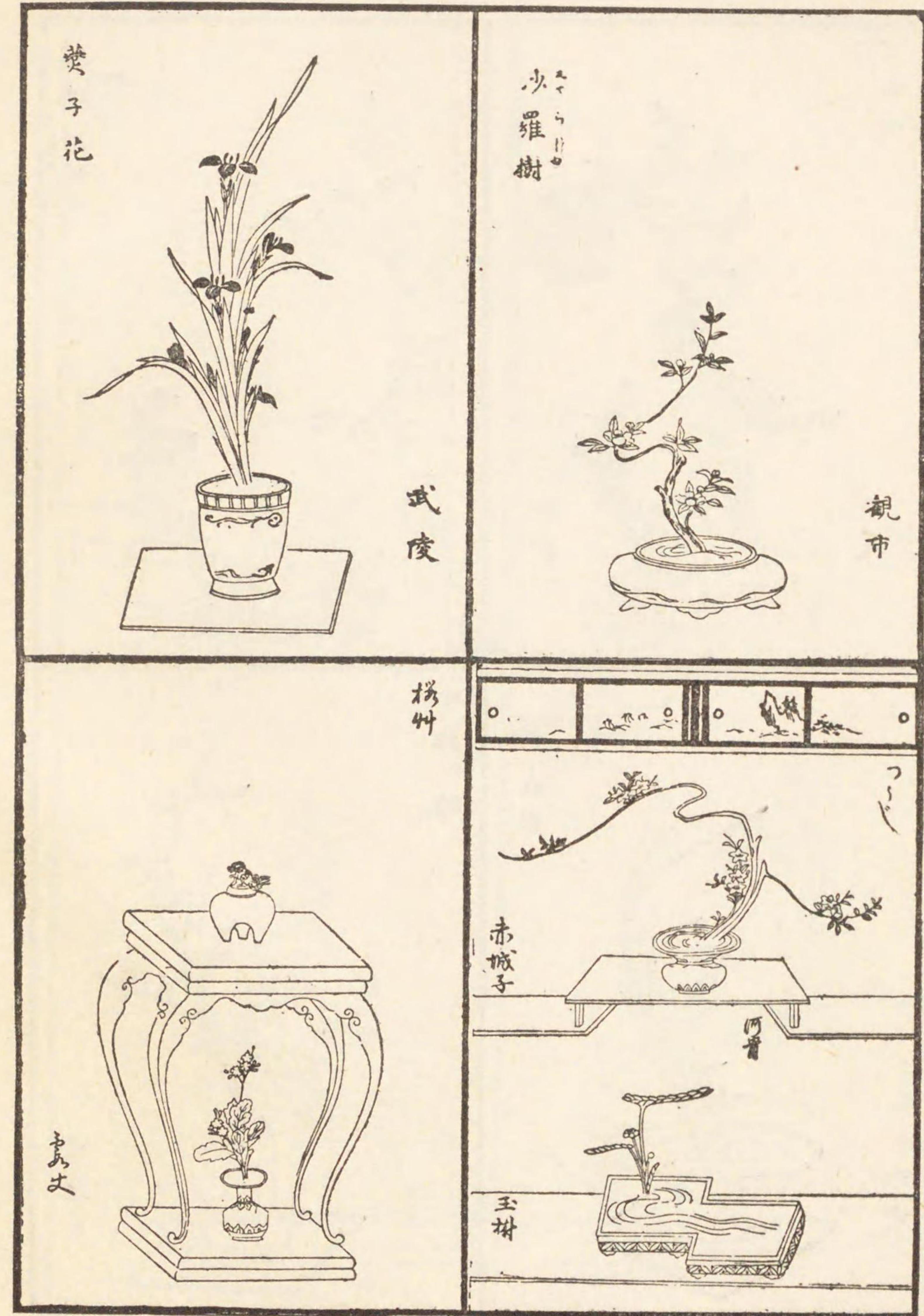


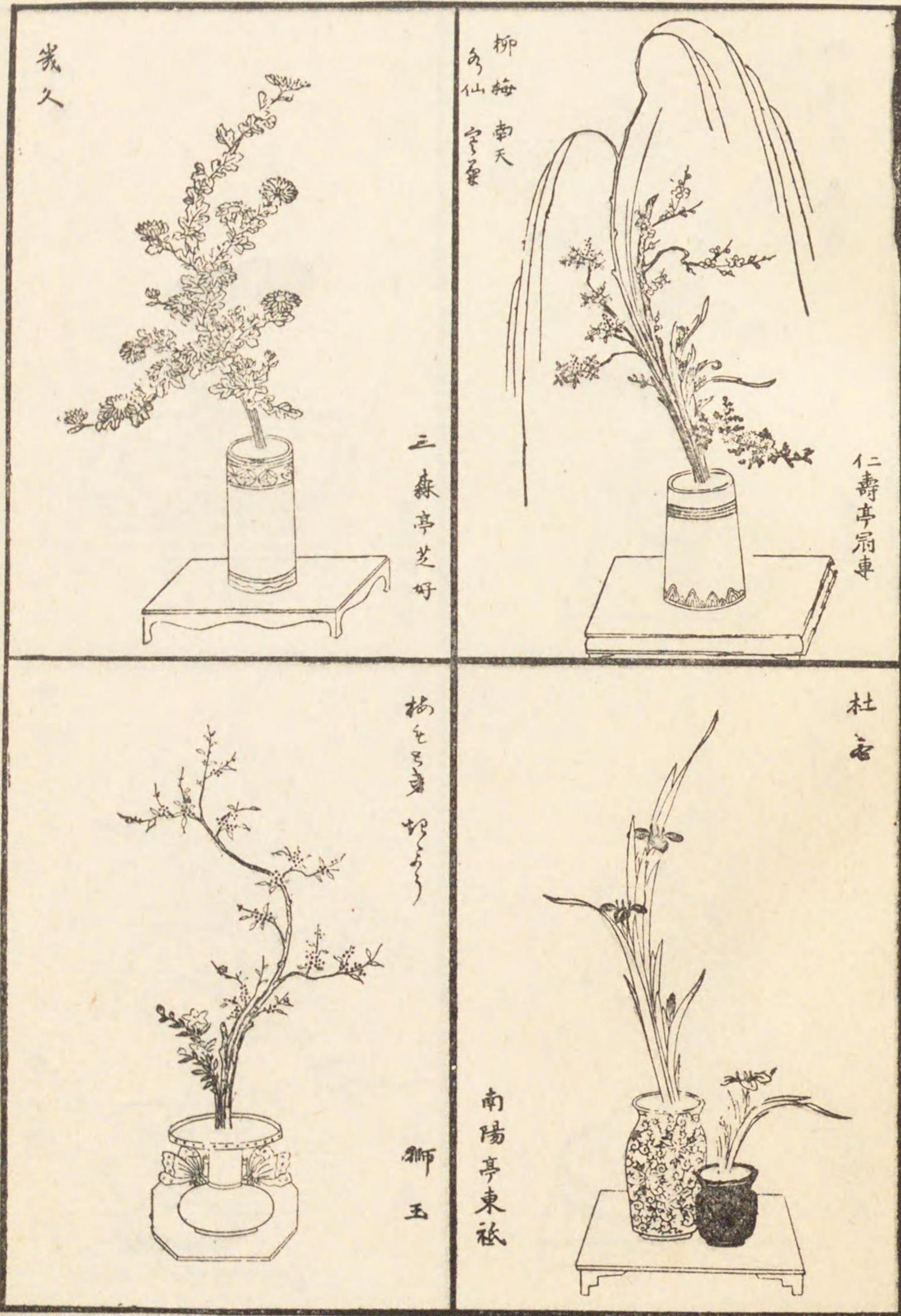


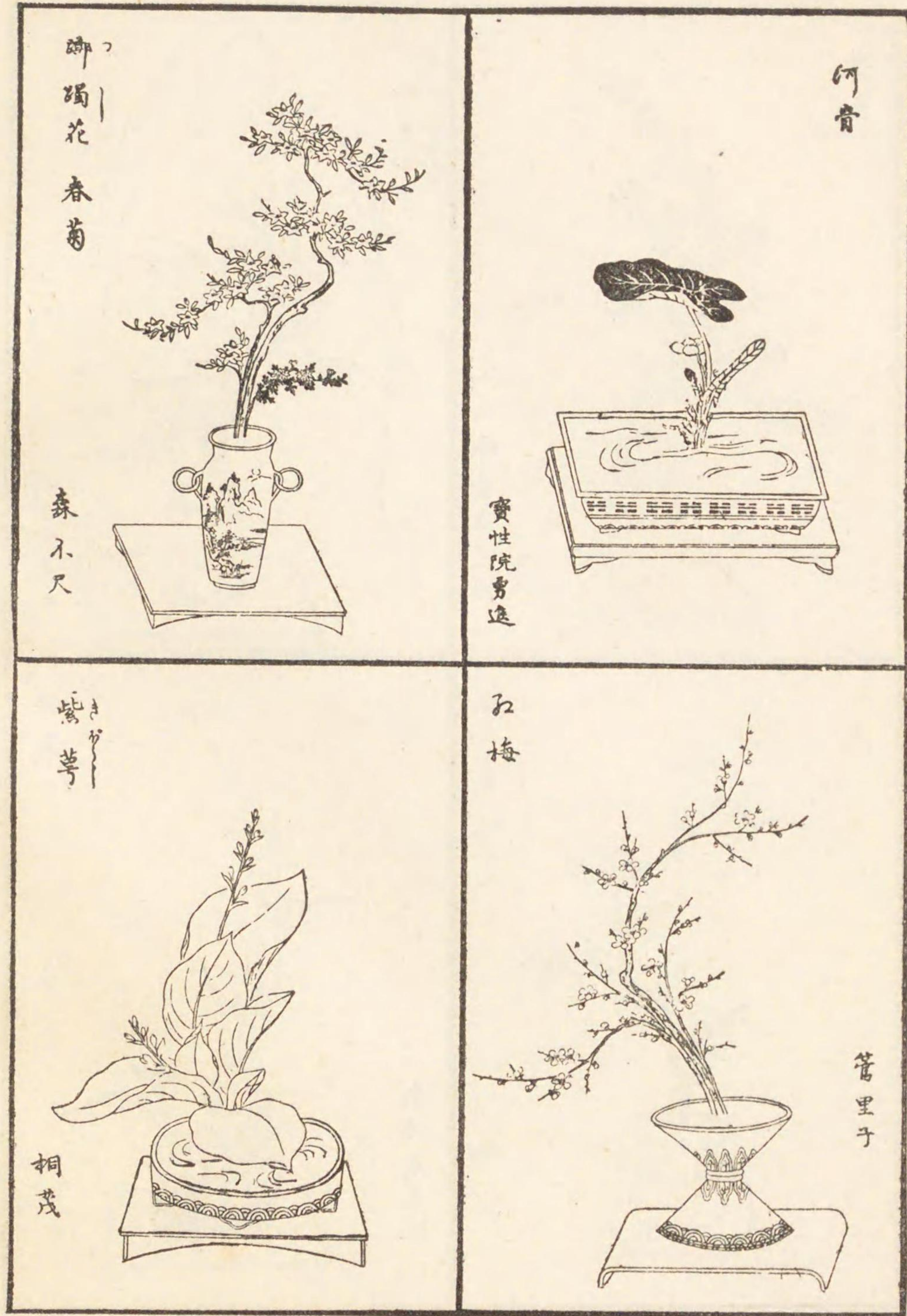
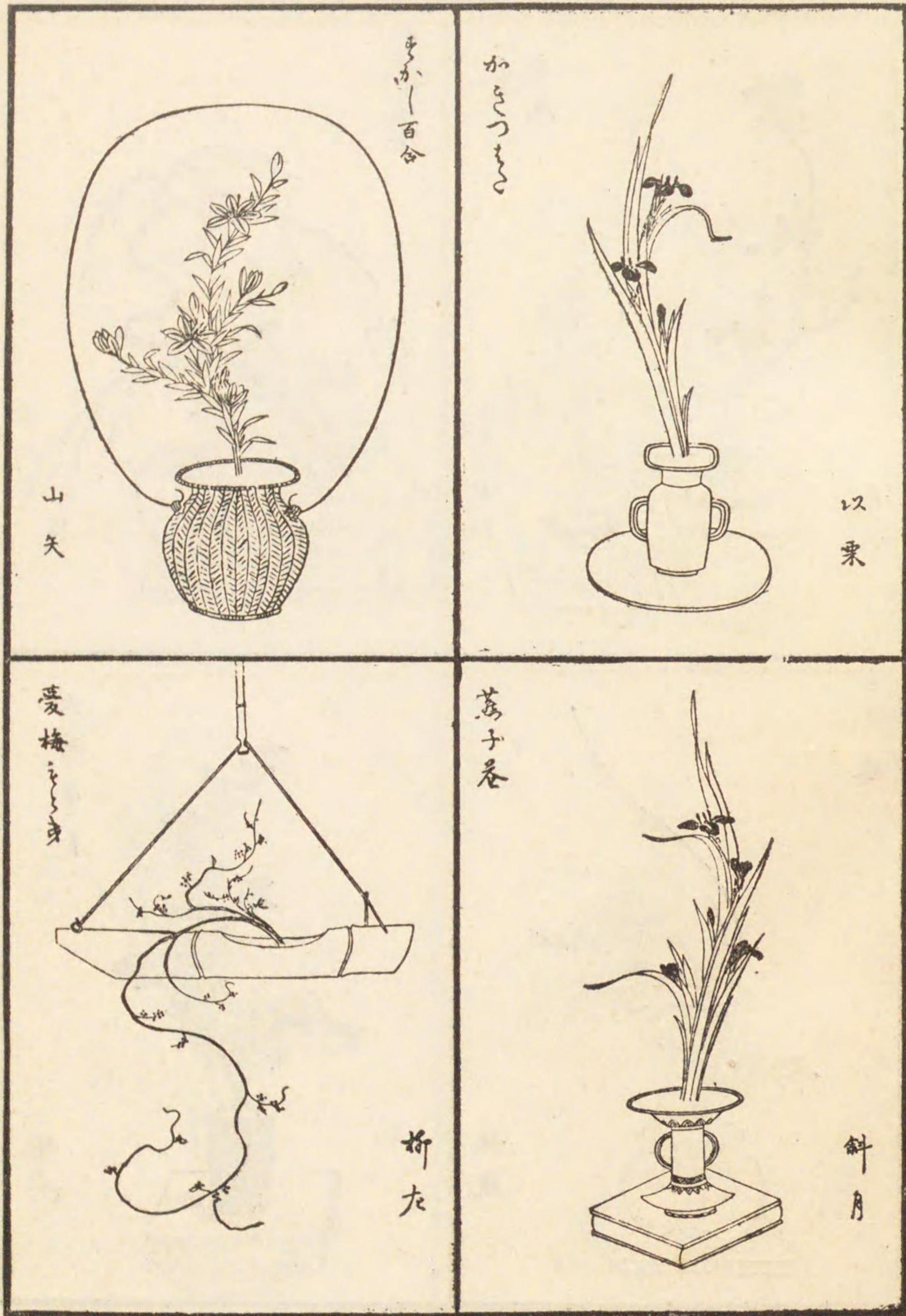


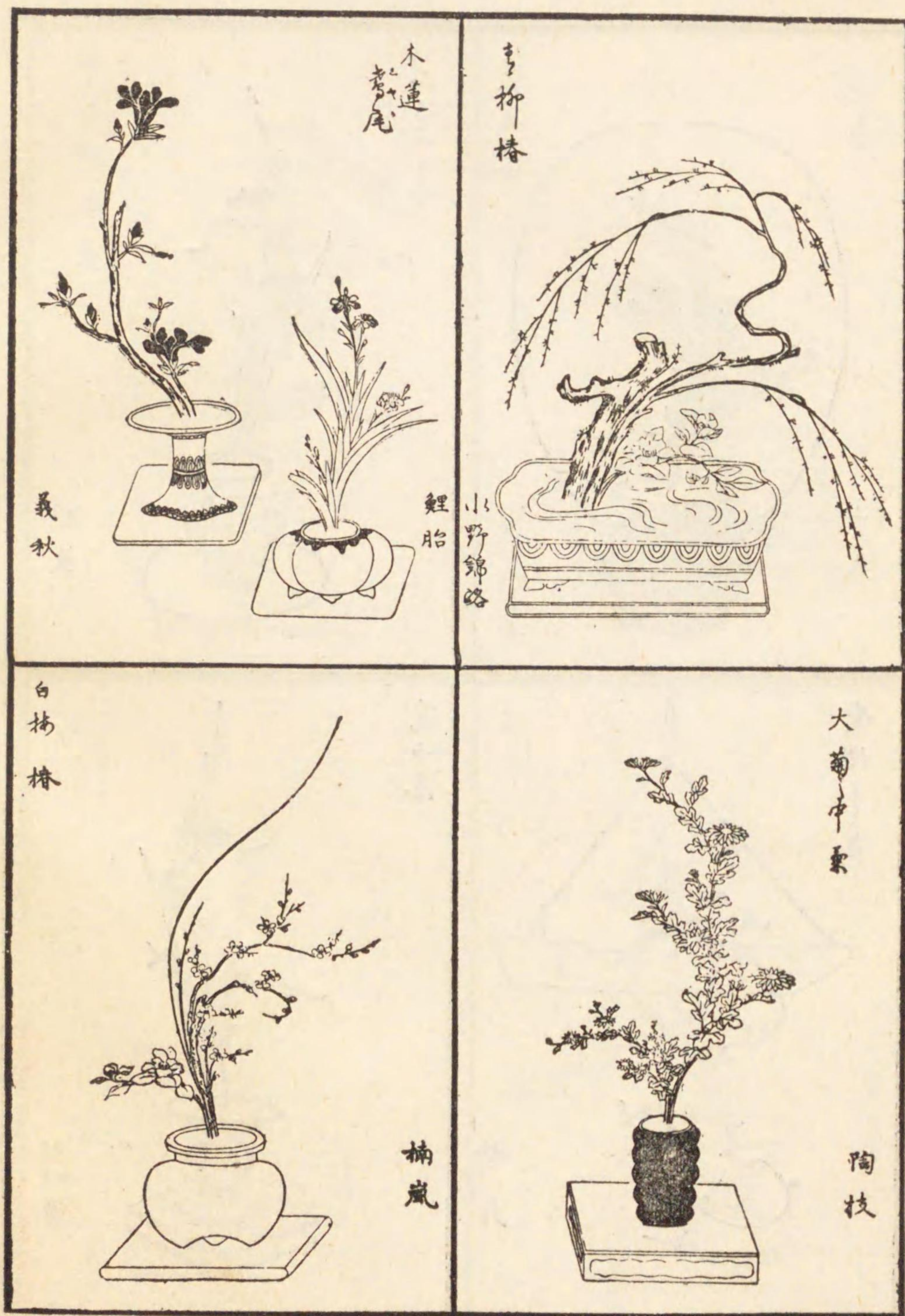
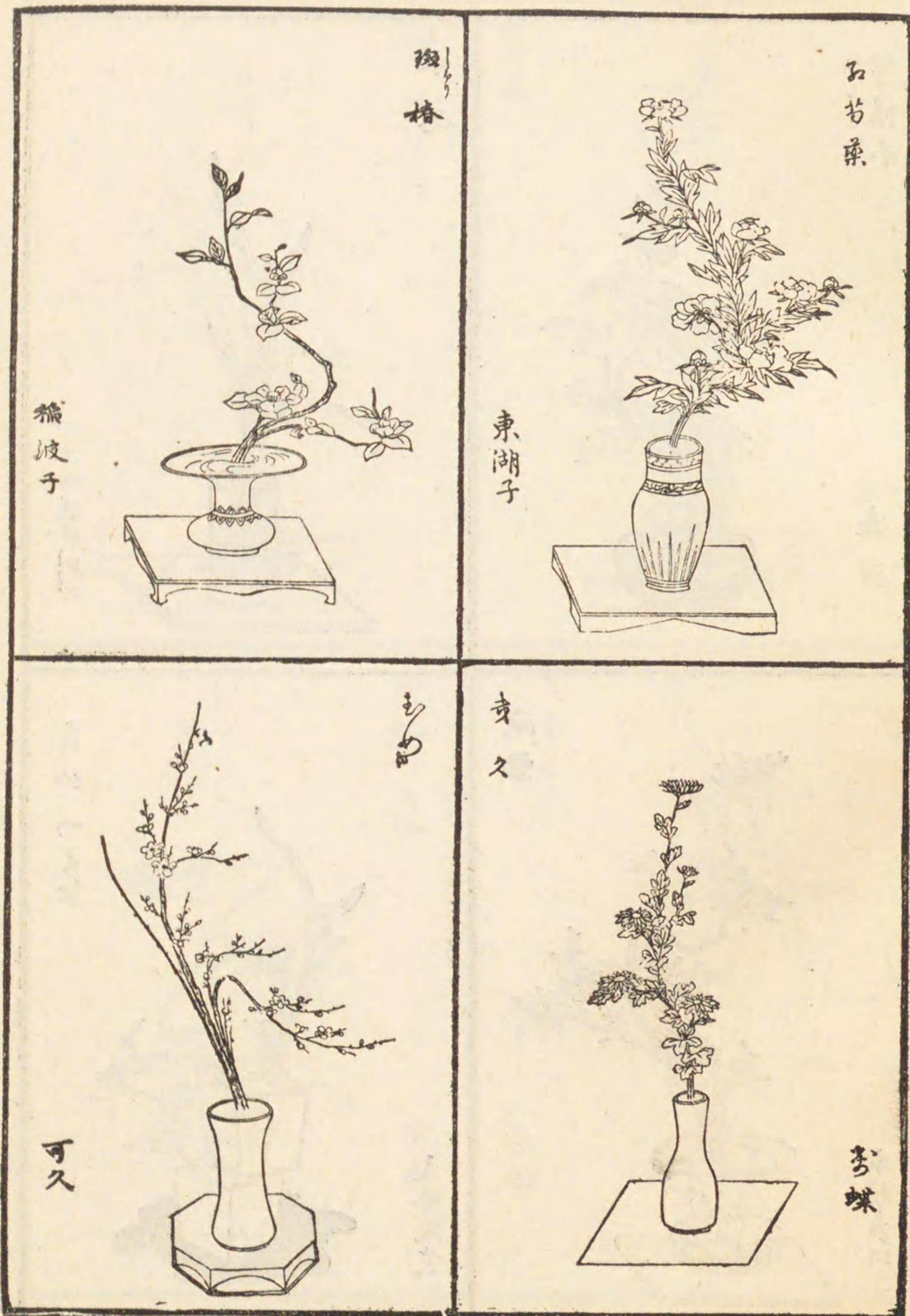
活花圖大成

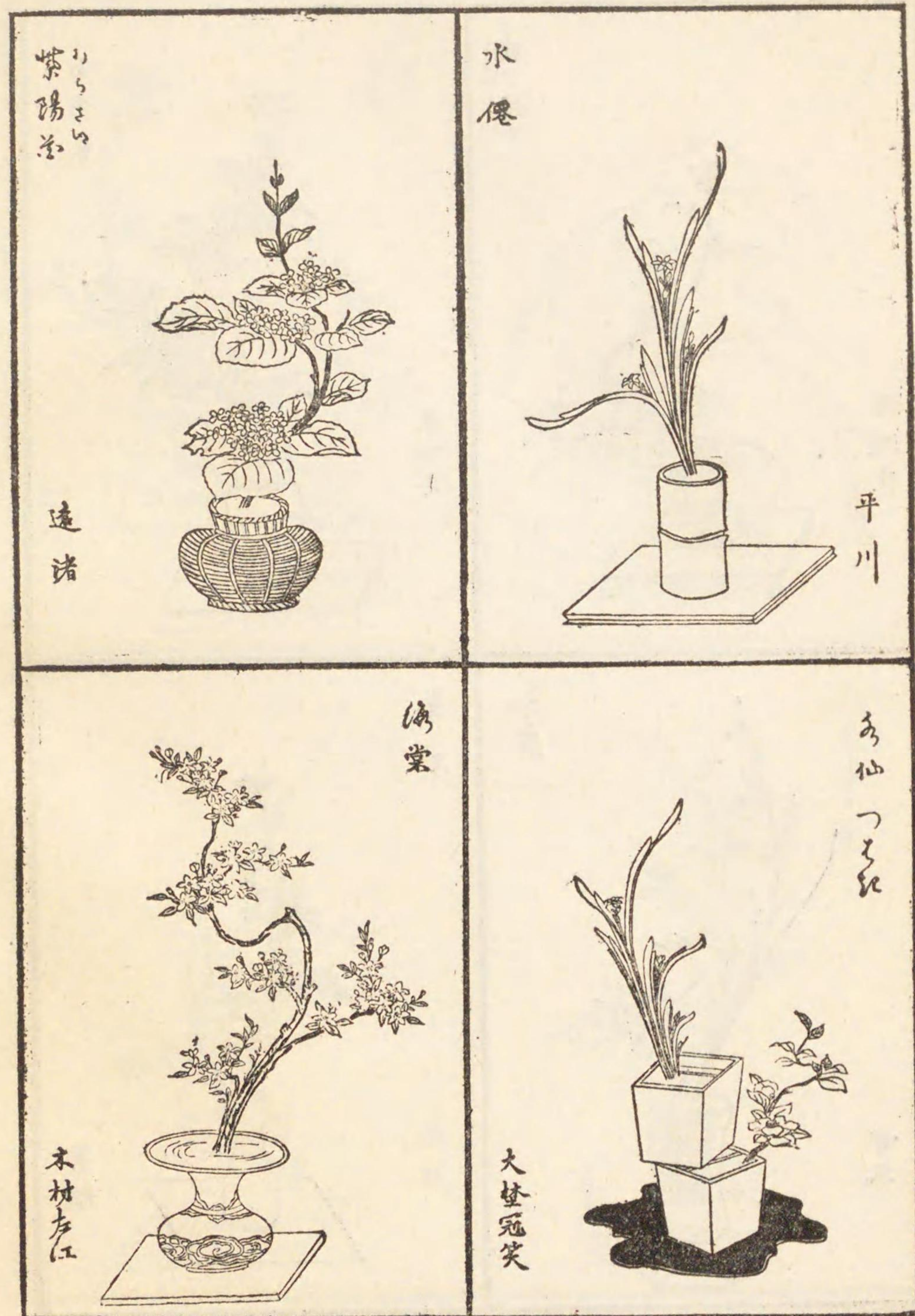
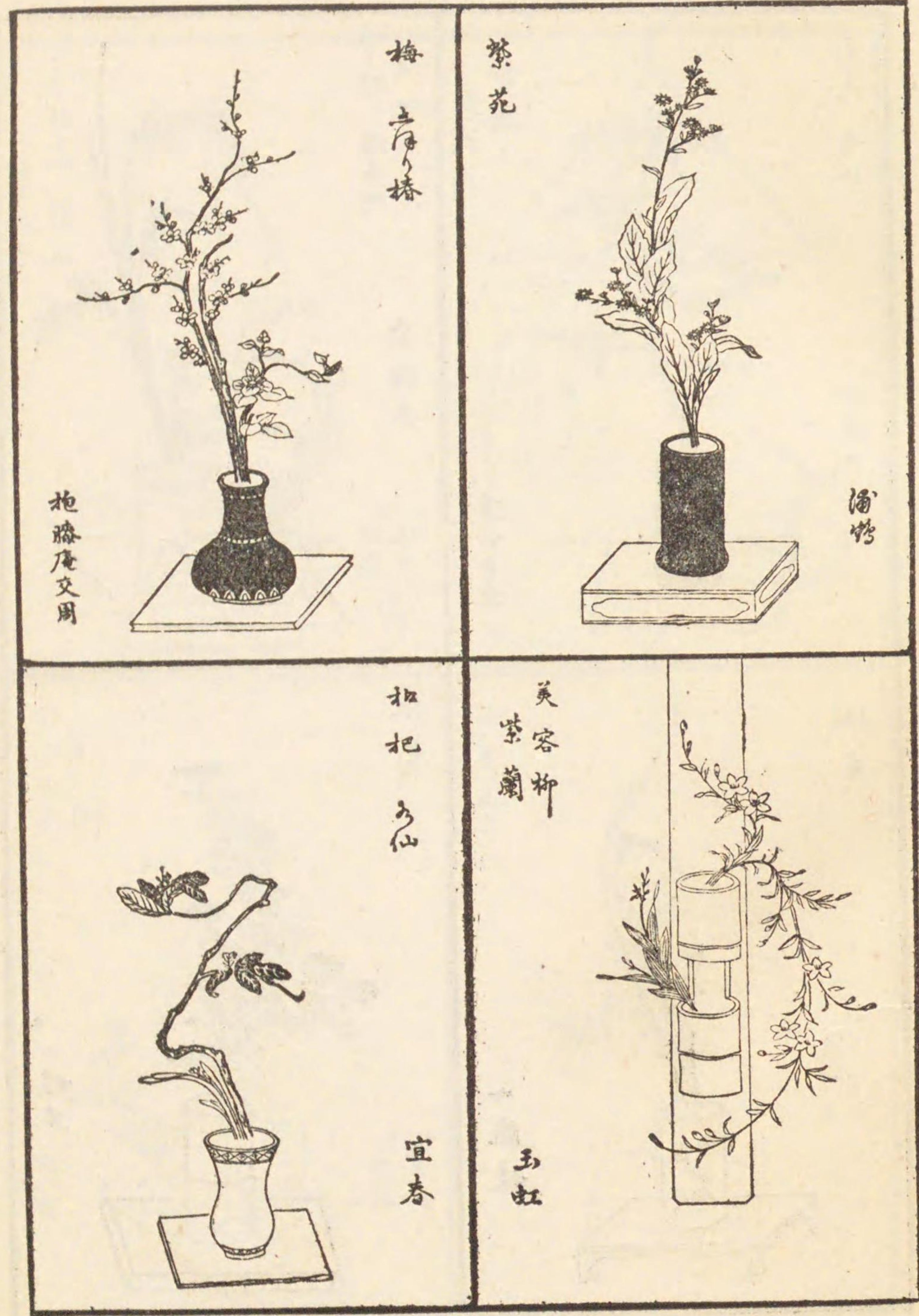
前編 (坤)

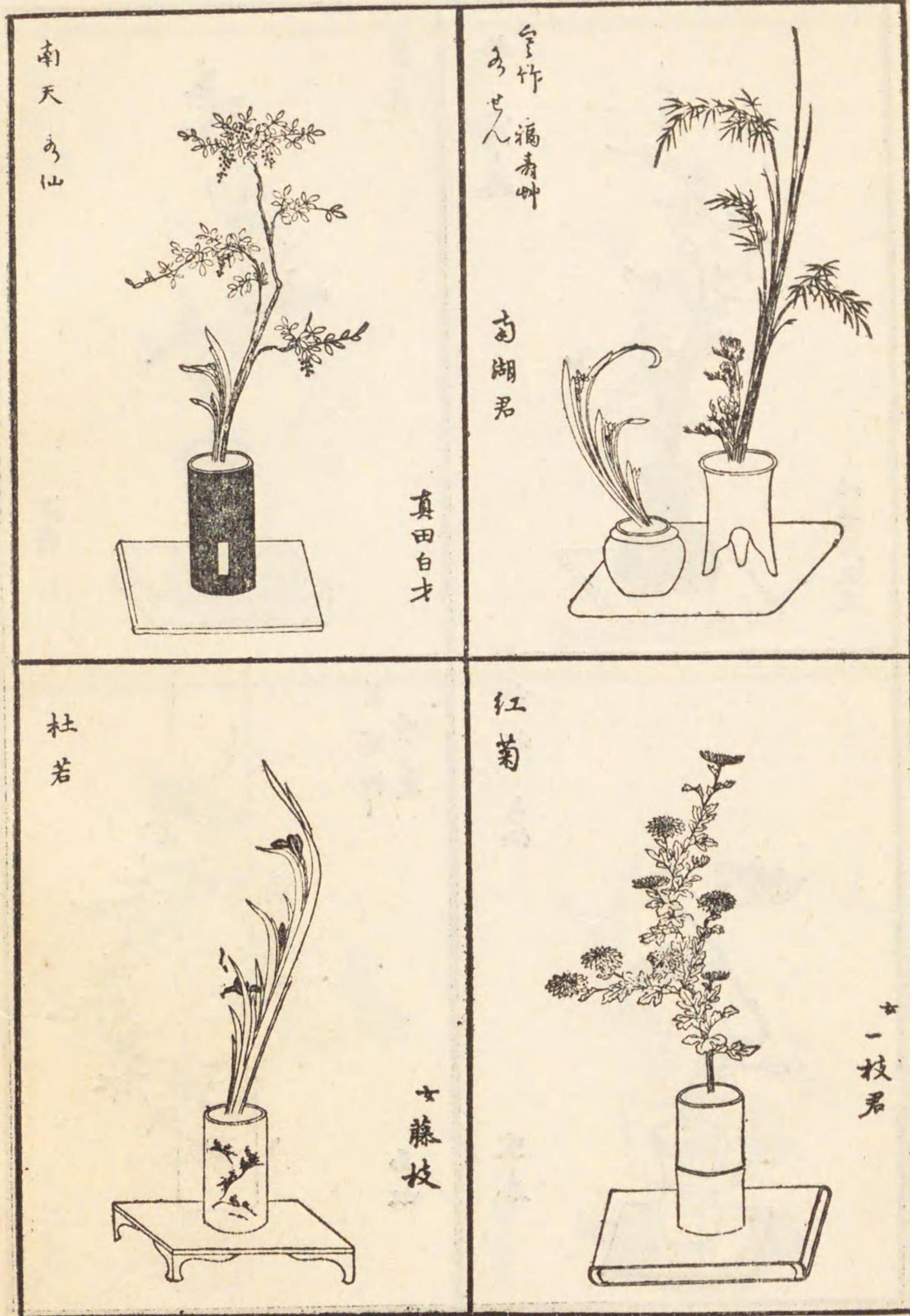
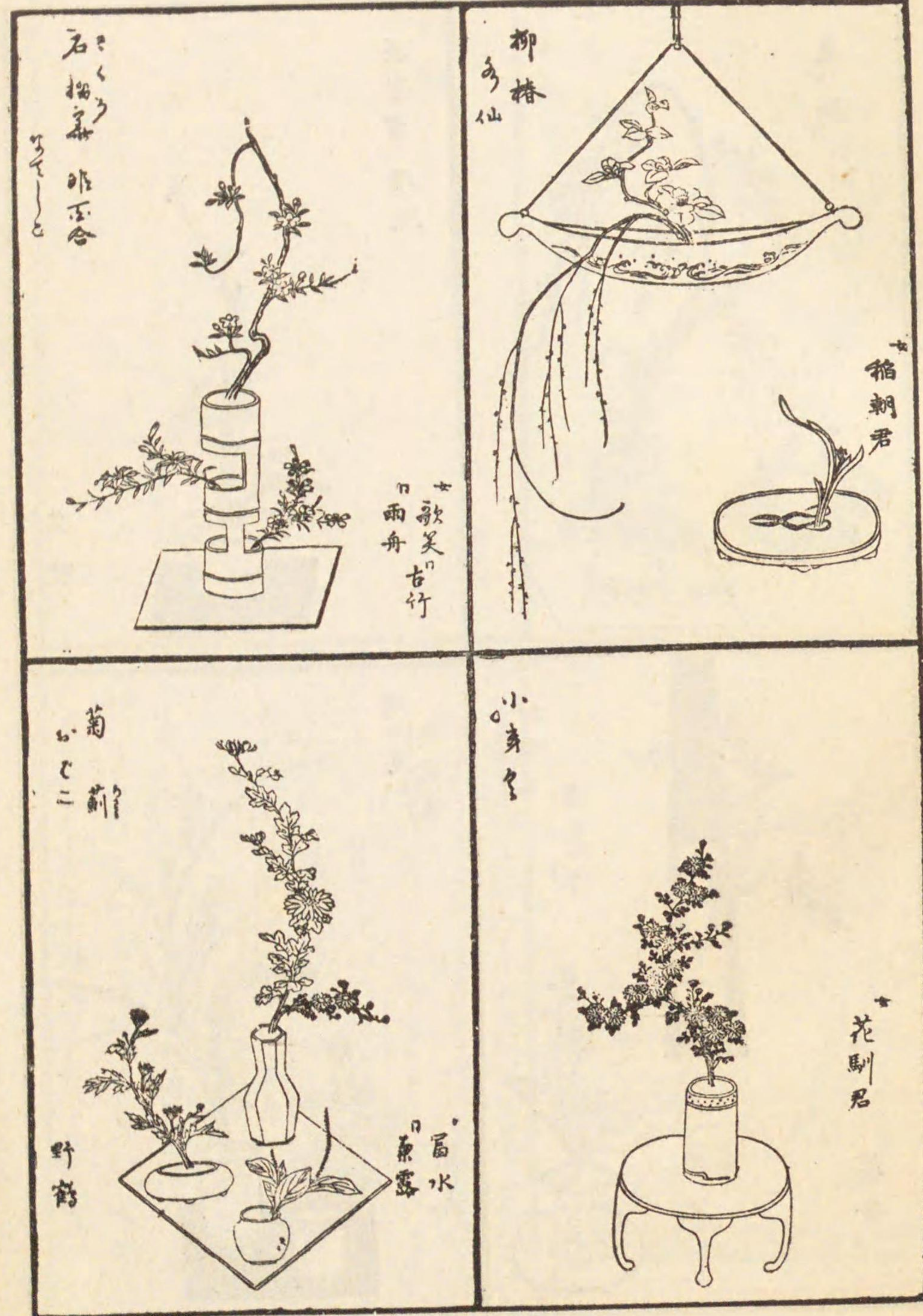












花宮帝 伴酒



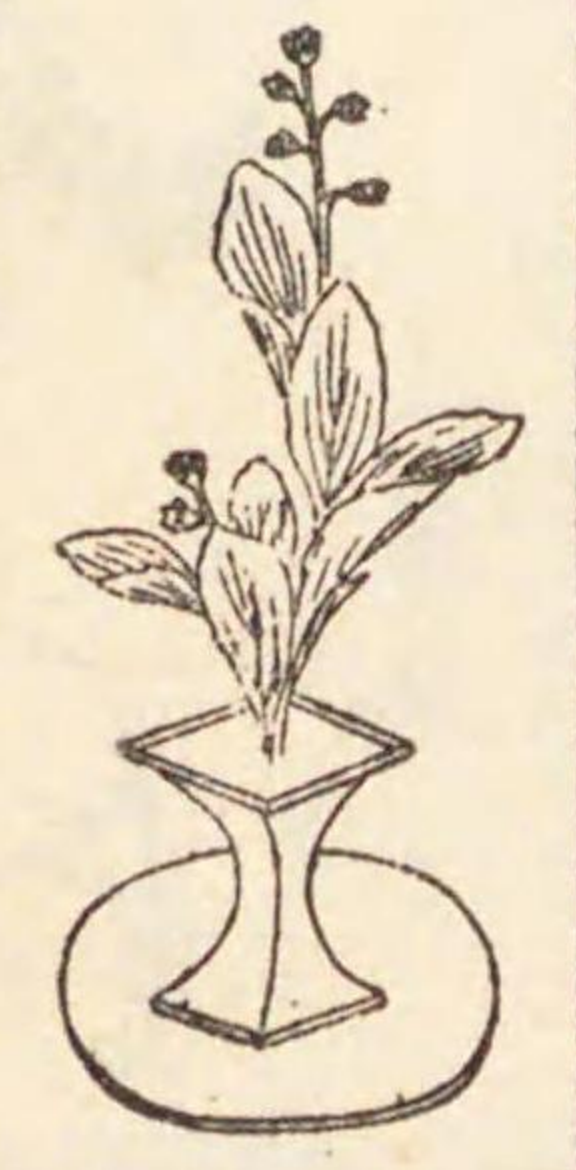
王曉

海菊



季白

紅空木
海老根



眠之

蘭香

鹿枕

雨降山人
吐月草



女郎卷
秋海棠

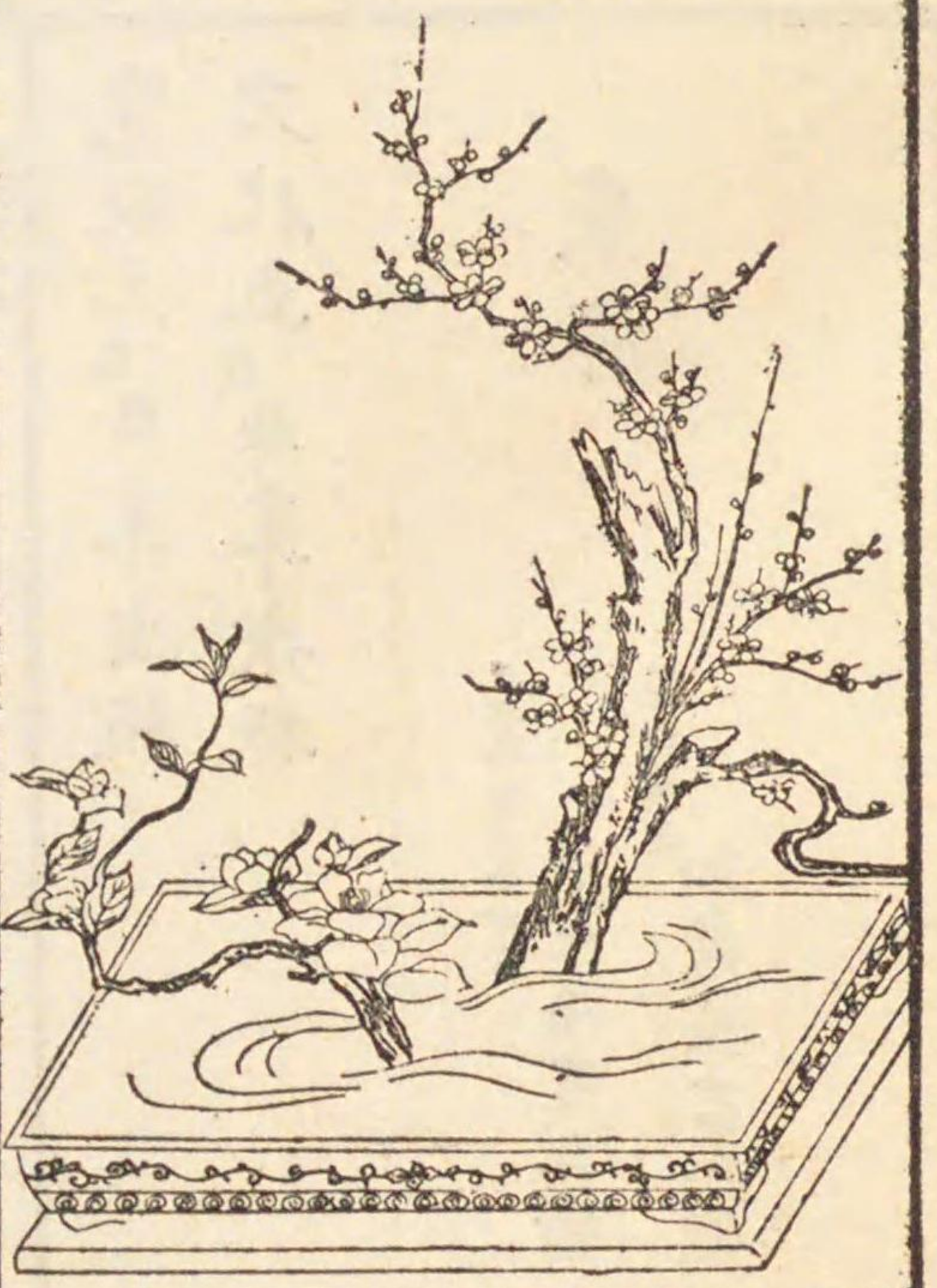


且樂
信杖

紅梅
白梅



風谷亭
静波



花を置くは道に於ては其の能く可く其の如く
或は優居るに華の或は海老根を信杖り或は名方に
修するに利あり其の如く古に其花を今に
里は向つれば其の如く其の如く其の如く
今友と結新ら其の如く其の如く其の如く
先折れし其の如く其の如く其の如く其の如く
きく其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

生花出生傳

活花圖大成

撫子 山丹 小丹	百合 山丹 小丹	女郎花 敗醬 十	杜若 仙 花	水仙 仙 花	菖蒲 小 葉	牡丹 牡丹 花	牡丹 牡丹 花
海棠 地 錦	芍藥 白 及	春菊 無 蓋	秋海棠 新 種	大黃菊 一 葉	福壽草 九 日	河骨 薄 透	紫萼 白 紫
淨潔 楓	菖蒲 大 小	紫菀 大 小	芙蓉 車 前	檜 山 茶	蘭 山 茶	水葵 雨 久	山吹 金 砂
柏 地	躑躅 杜 鵑	木蓮 山 梅	茶梅 山 梅	椿 山 茶	秋子 山 茶	吳茱萸 金 絲	紅亞米 金 絲

寛政元己酉年出板
文化五辰年求板

東都

日暮通南堂町
須原屋茂兵衛
芝神明前
和泉屋吉兵衛

生花出生傳圖式

「生花出生傳」二卷は、本集成第四卷に納むる
「古流插花湖月抄」こ、其内容同じ物故これを
略す

四季

置之部

雪割画



置花器之傳

○置花器一節切尺八寸五分地丈一何字の表形にて
 方圓之用半月形柄のくまきりをもをが来々毎用の
 中身の花器として少くも置花器は限り如この何字表形
 の花器は行穴と明插花器は用田舎くす意味重々
 五口傳

○唐金焼のくまきり置花器の花類とありた

生花出生傳圖式

置花器より大形踏子の表形也竹の一節四尺八
 寸を表形美意なる生威花のお生すりまよる地丈と
 あり意味の柄もあらくも花器の傳軸に傳ら
 ば

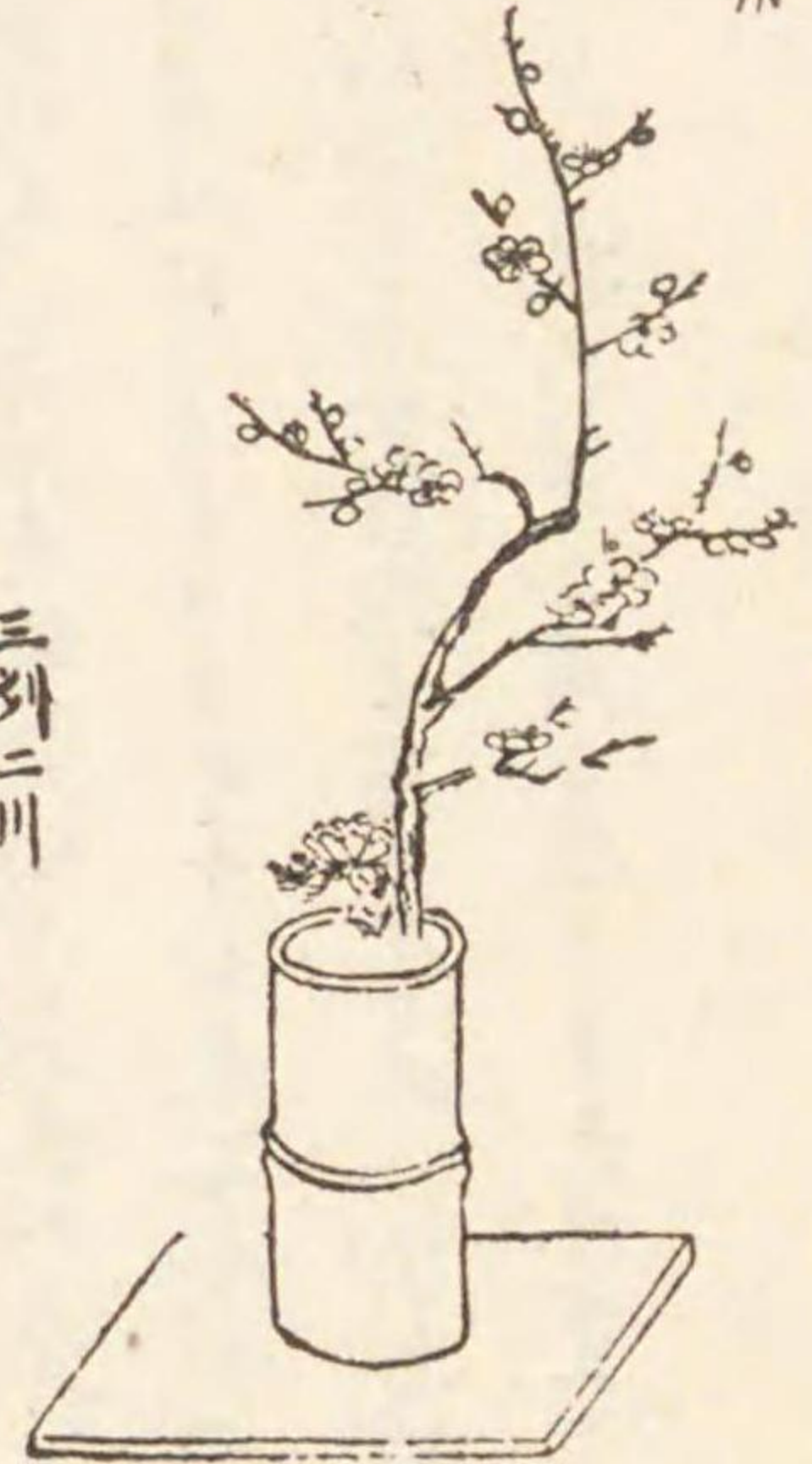
以上置花器地丈よりあり地よりお生し半の深さを
 生威のくまきりお生傳後踏子記すりあり

牡丹 ○牡丹も富貴草の
 傳は様上同一蓋儀よてを
 牡丹柄をも興たり
 花も傳授の
 海の者も伝へ
 他は形をより
 一花の形用具り
 得たりしてあ花
 を圓分り柱傳をおしとて
 水まを流して圓式をおすあり



泉列春木
 海雲を天

梅 秘壽草 初春祝華の花也
一花の形用
五折田成
の折さる
寂の形一



三列三川
二水草
一陸

梅 早春花の形一

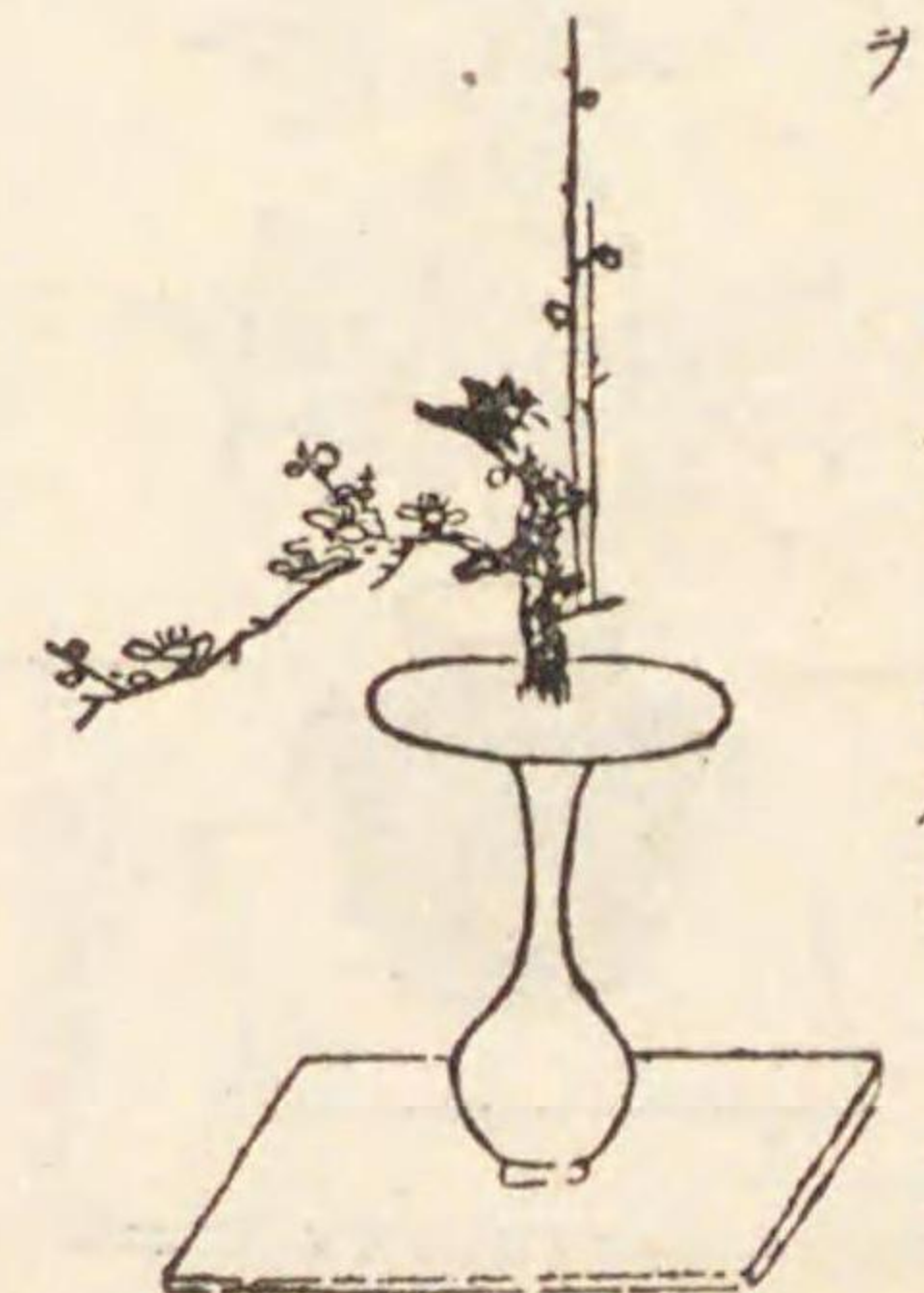
○この花形五折の花形田成

二折の折は御に
折さるは一人の
座の養指の生一
中より折さるは
二つ一色一



三列
雲谷樓 蓮道

梅 早春花の形一
○この花形身あふカララ
折さる折を生一
四折折の手にくも
四折折の手にくも
四折折の手にくも
四折折の手にくも



一露居士門子
三列吉田 心應軒
三省

梅 水仙 冬より初春まで花の形一

○この花形五折の花の生一

深の折一水仙
根の折
冬今少一
心も折さるは
折さるは二つ一



三省門人
三列真郡高松村
一四折
非石

梅 初春祝華の花也

○この花形五折の花形

中より折さるは
二つ一色一

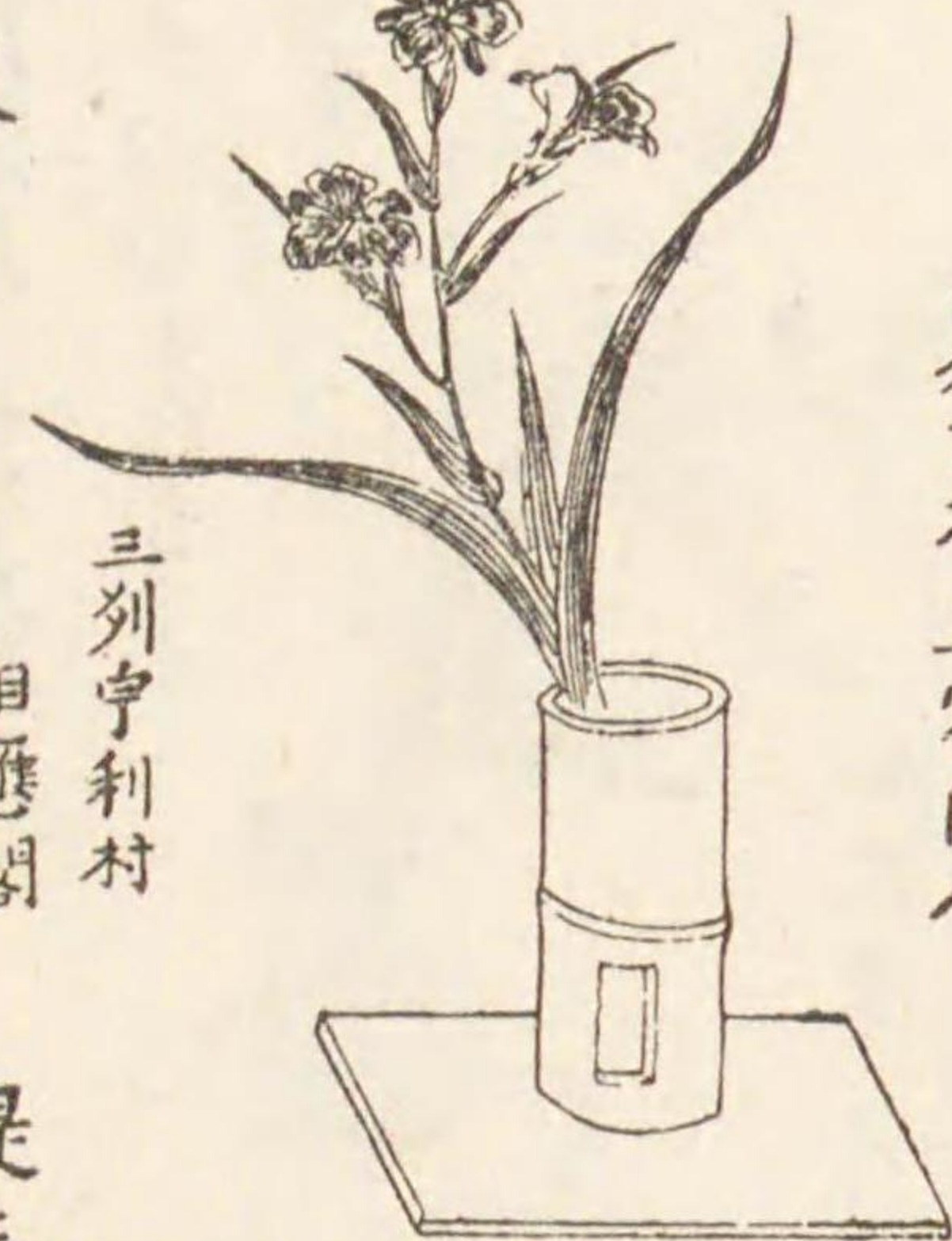


三列吉田 向陽亭
維景

梅 尾

○この花形

一花の形用
五折田成
の折さる
寂の形一



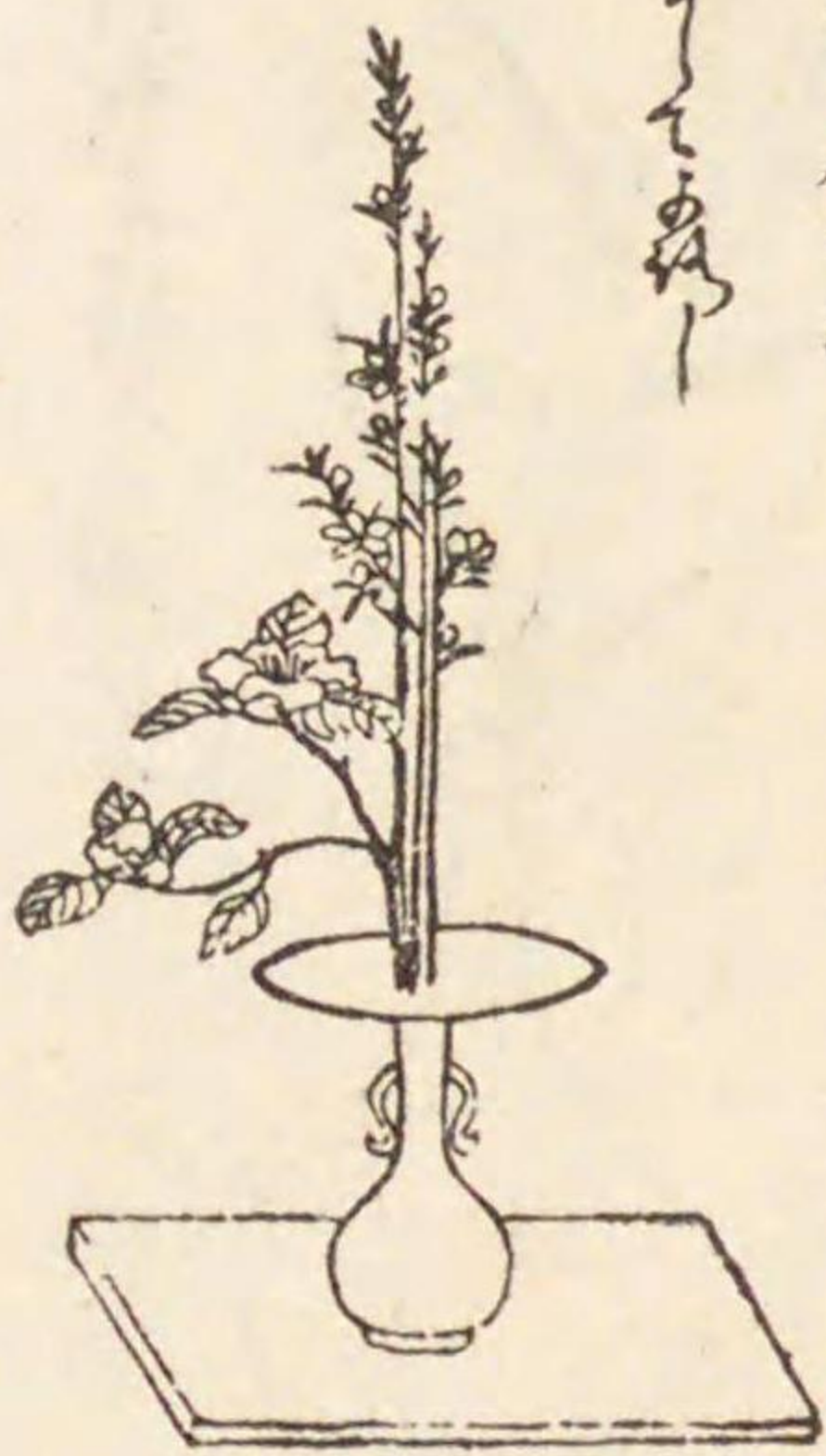
同列吉布 三省門人

三列寺利村
相應閣
是三

梅 桃

○この花形五折の花の生一

折さるは折さるは
二つ一色一



泉列久米多
松濤庵 指月

梅 水仙 冬より初春まで花の形一

○この花形五折の花の生一

折さるは折さるは
二つ一色一



全 百花庵
卍慶

梅水仙 今より神楽よりわきま
○この花形五行の折酒む若木のそ
中より若木折酒の歌
今よりわきま



今大津
業門皓白

梅神 今より神楽よりわきま
○この花形五行
折酒む若木のそ
今よりわきま



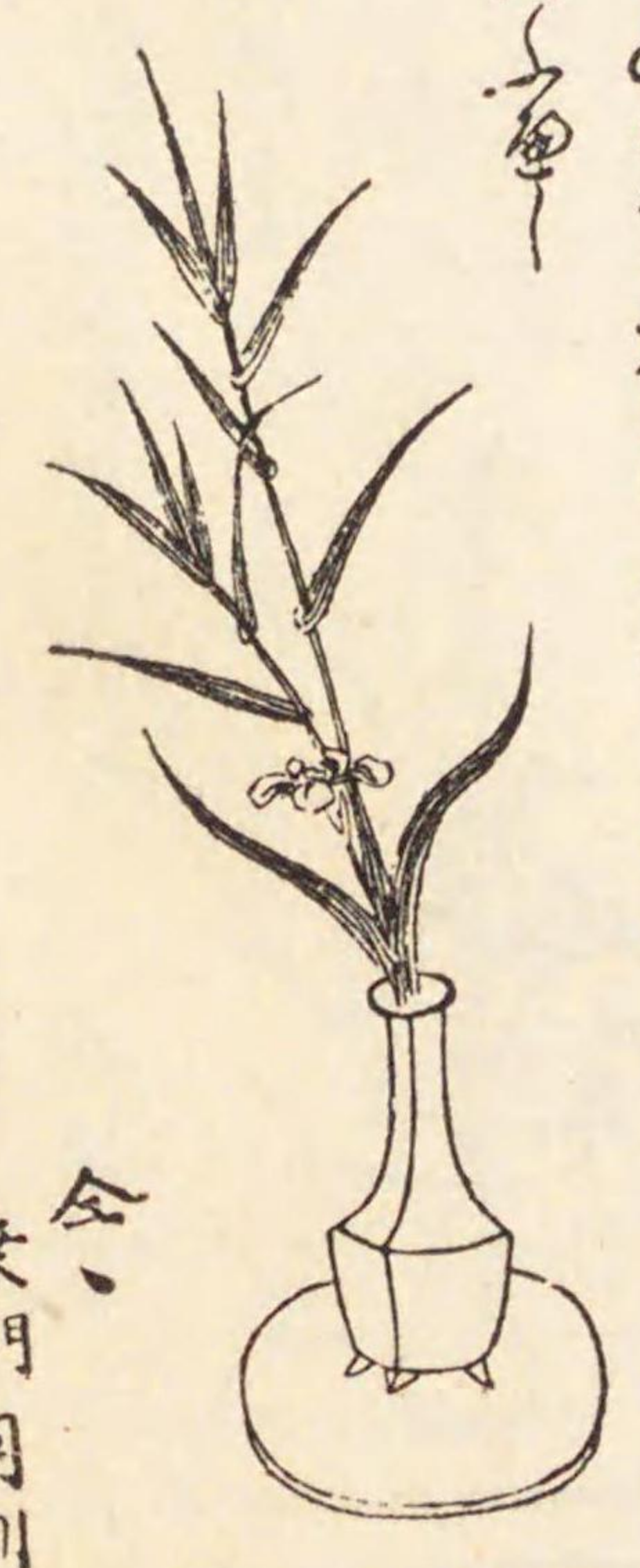
今
釋門一笑

今よりわきま
○この花形五行の折
今よりわきま
今よりわきま
今よりわきま



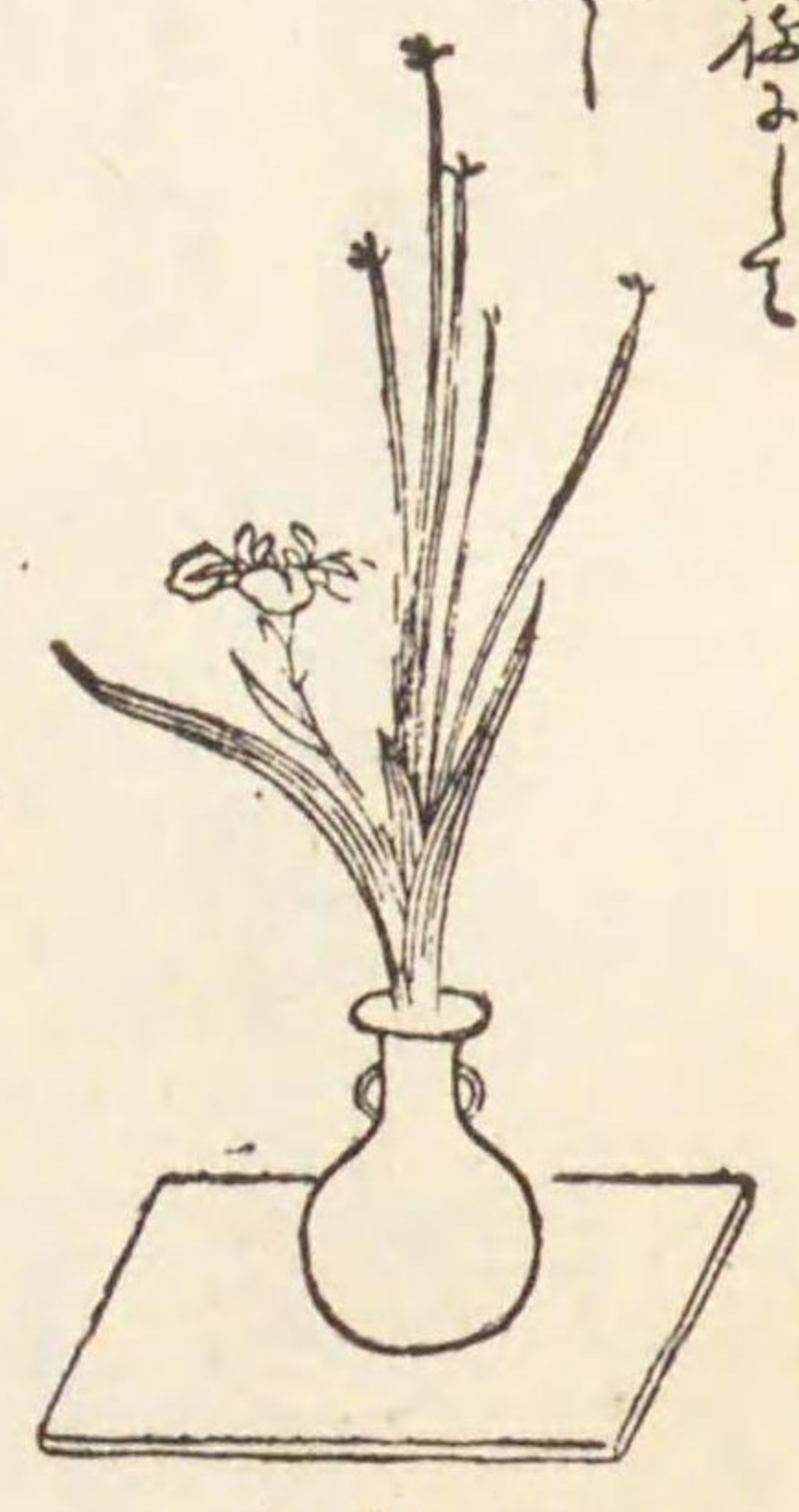
今
釋門浪水

今よりわきま
○この花形五行の折酒む若木のそ
今よりわきま



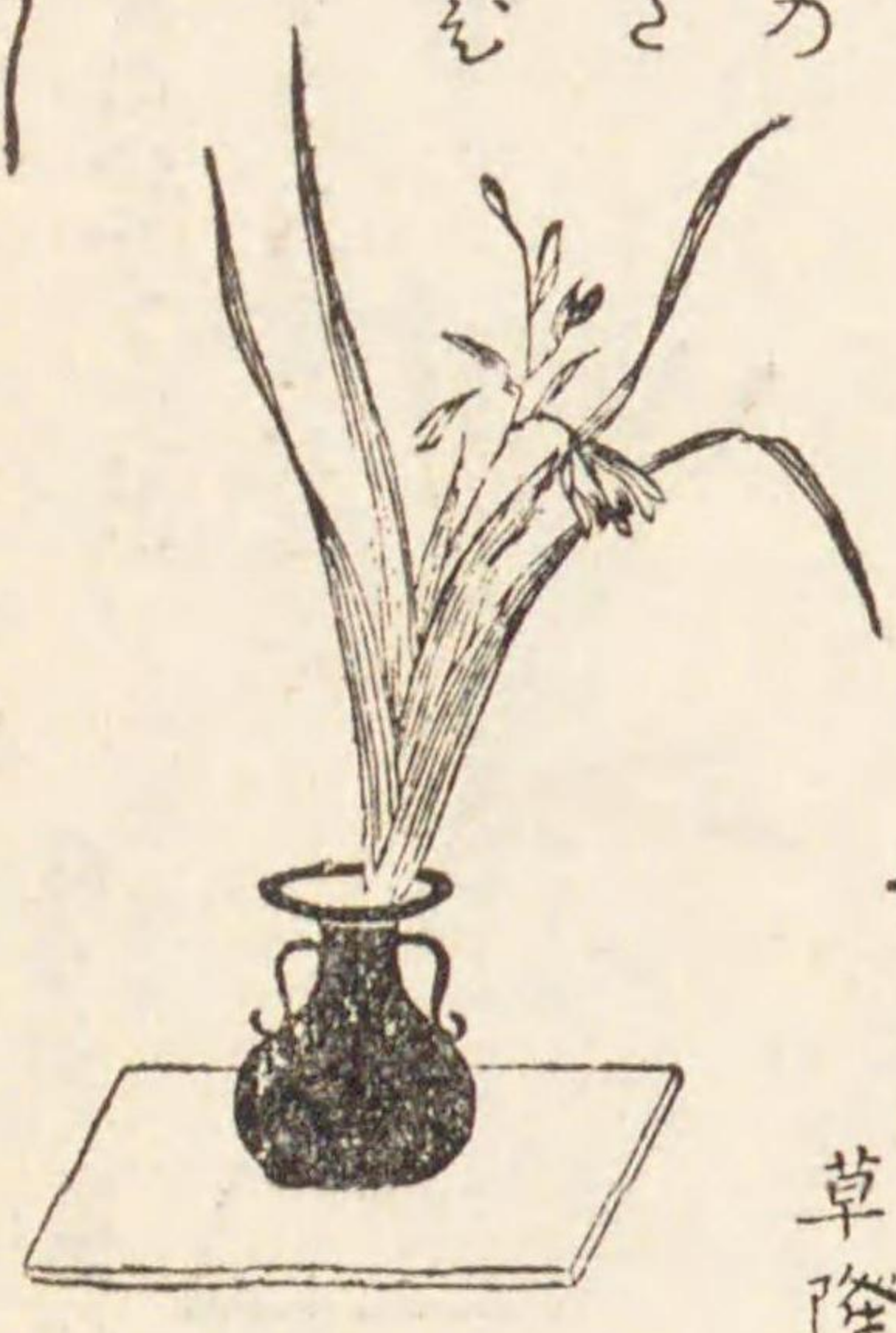
今
業門月川

川くも 今よりわきま
○この花形五行の折酒む若木のそ
今よりわきま



今
一甫奇
草明

今よりわきま
○この花形五行の折酒む若木のそ
今よりわきま



今
好月軒
草隆

射干
○この花形五行の折酒む若木のそ
今よりわきま



今忠園
酒樂堂
花啓

庭こま 今よりわきま
○この花形五行の折酒む若木のそ
今よりわきま



紀列和哥山
露月亭
湖舟

水仙

○の花形五瓣田仙も仙の系
四枚より五枚まで花の形も外も
まろまろとツツ



全 送青軒 蘆船

菫風花

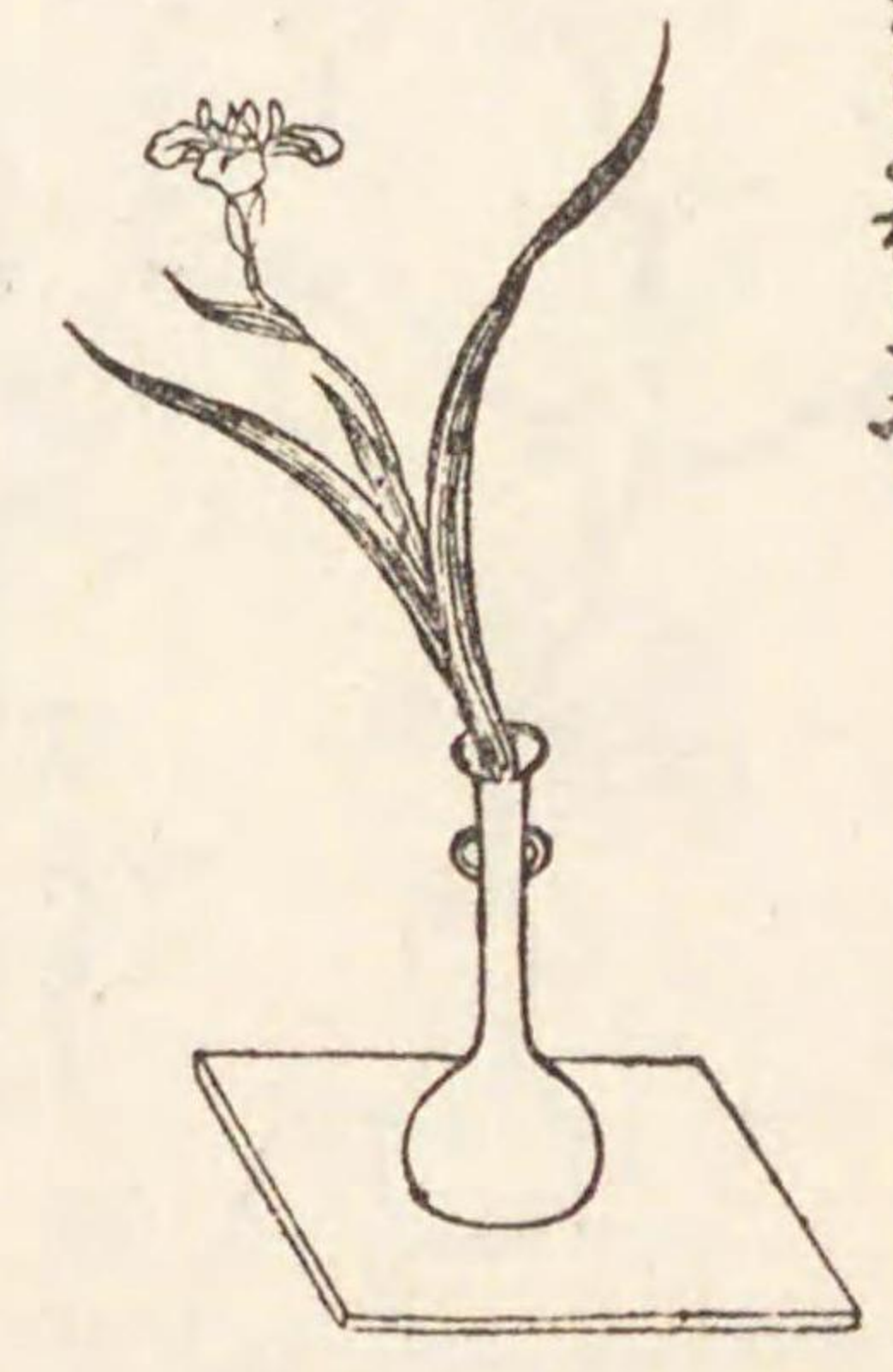
○の花形五瓣から五枚
まろまろとツツ



泉塚 中 羨容

かじ川

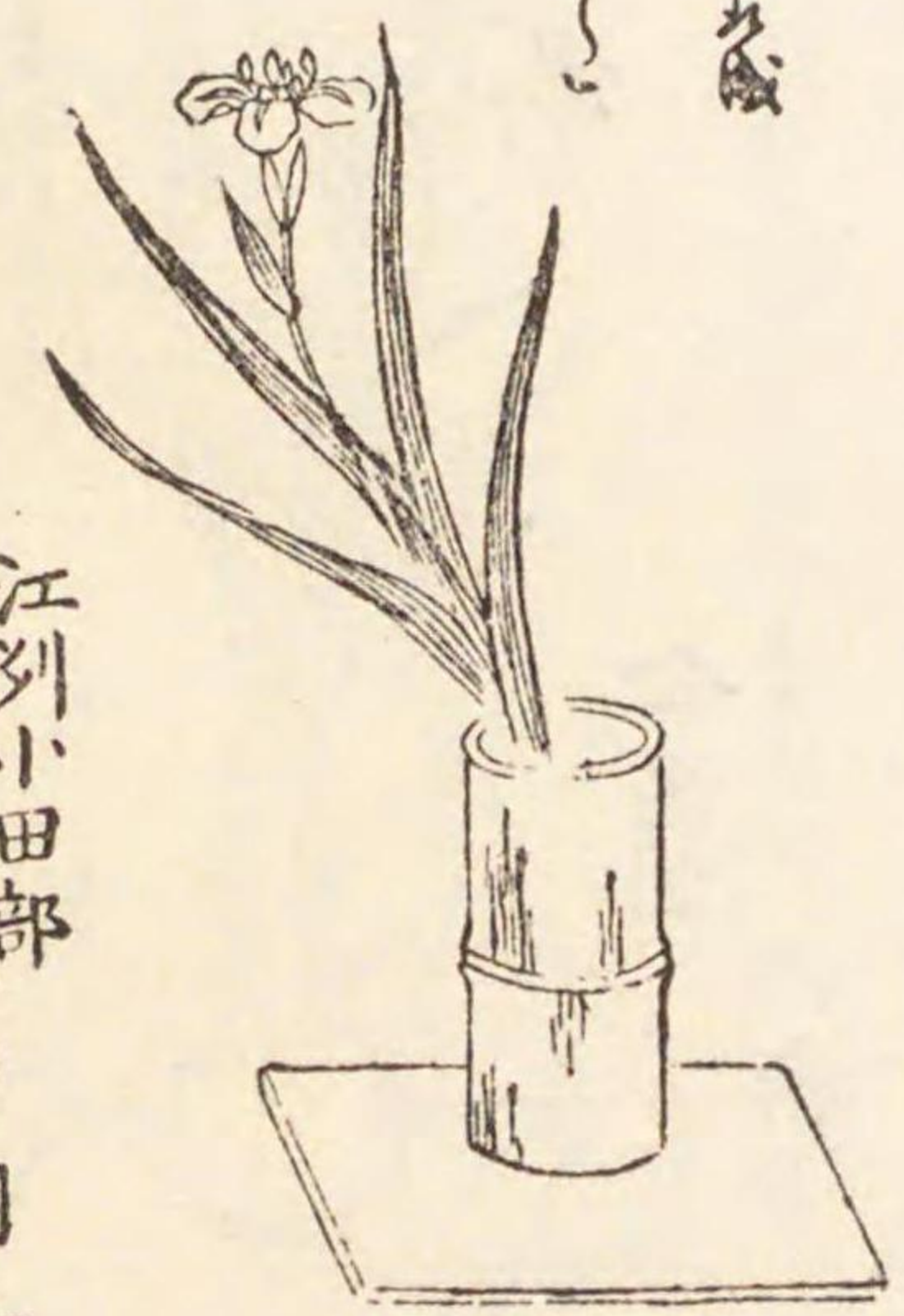
○の花形五瓣の枝葉の
深まろとツツ
葉もまろまろ
まろまろとツツ



江列上石寺 吉田湖雲

かき川

○の花形五瓣の枝葉
五枚葉のまろまろ
竹葉のまろまろ
ツツ



江列小田部 沙門湖舟

かじ川

○の花形五瓣
田成に七枚の
枝葉のまろまろ
まろまろとツツ



江戸谷中 栗門真鳥

一八

○の花形五瓣
三枚のまろまろ
つぼみまろまろ
介のまろまろ



江府龜井戸 沙門文龜

花高藤

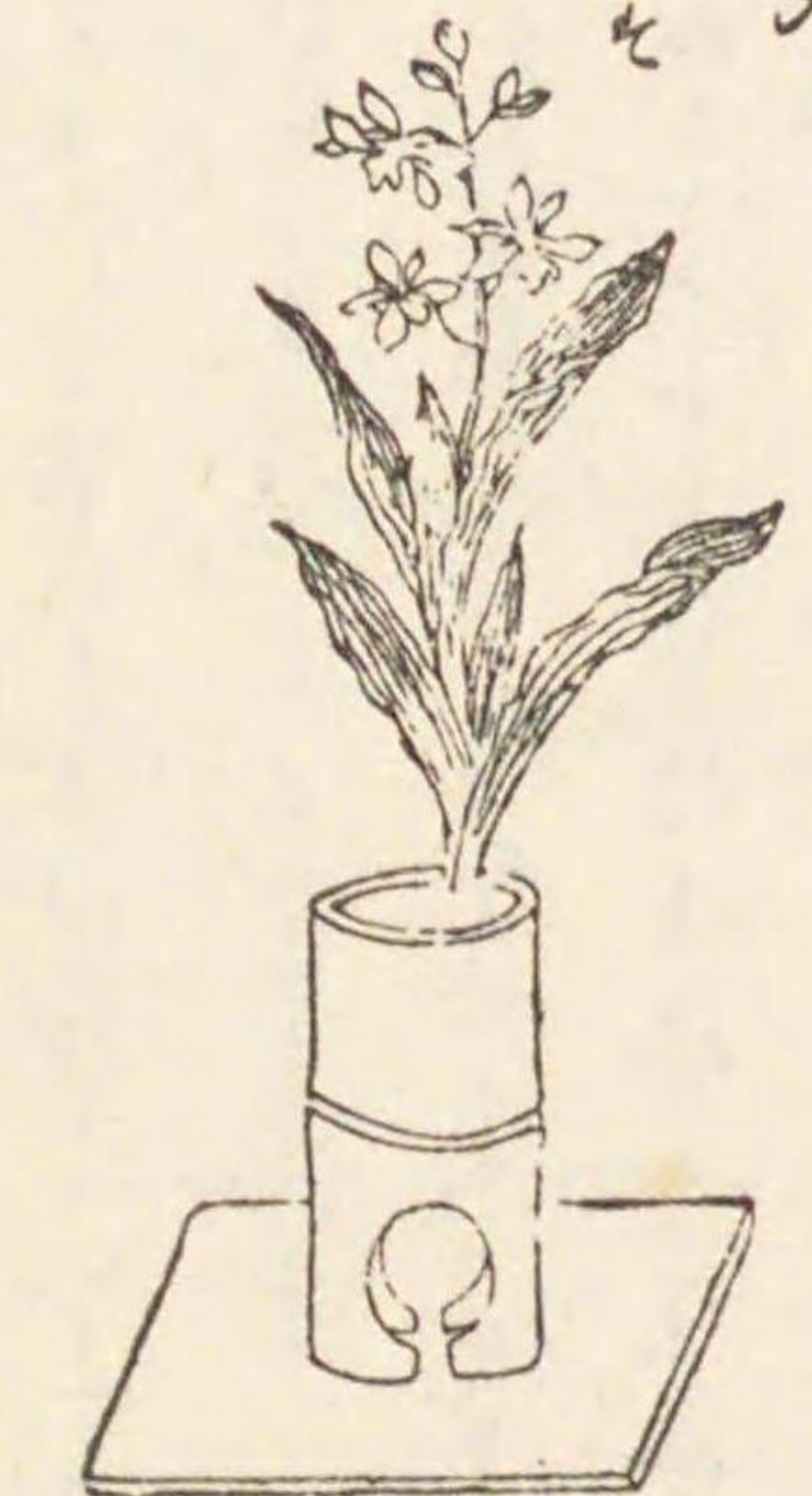
○の花形五瓣かじ川の
まろまろとツツ
花形もまろまろ
まろまろとツツ



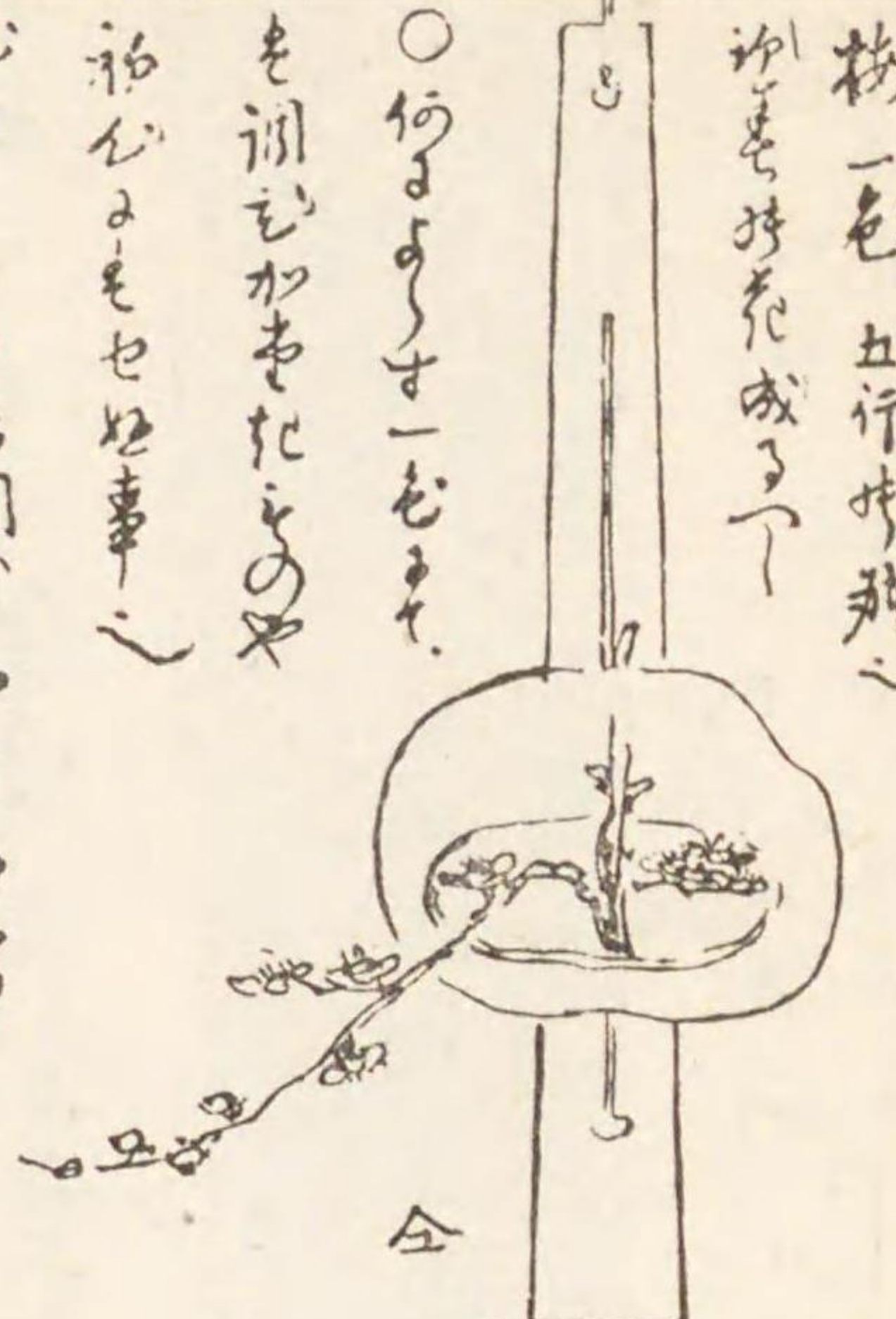

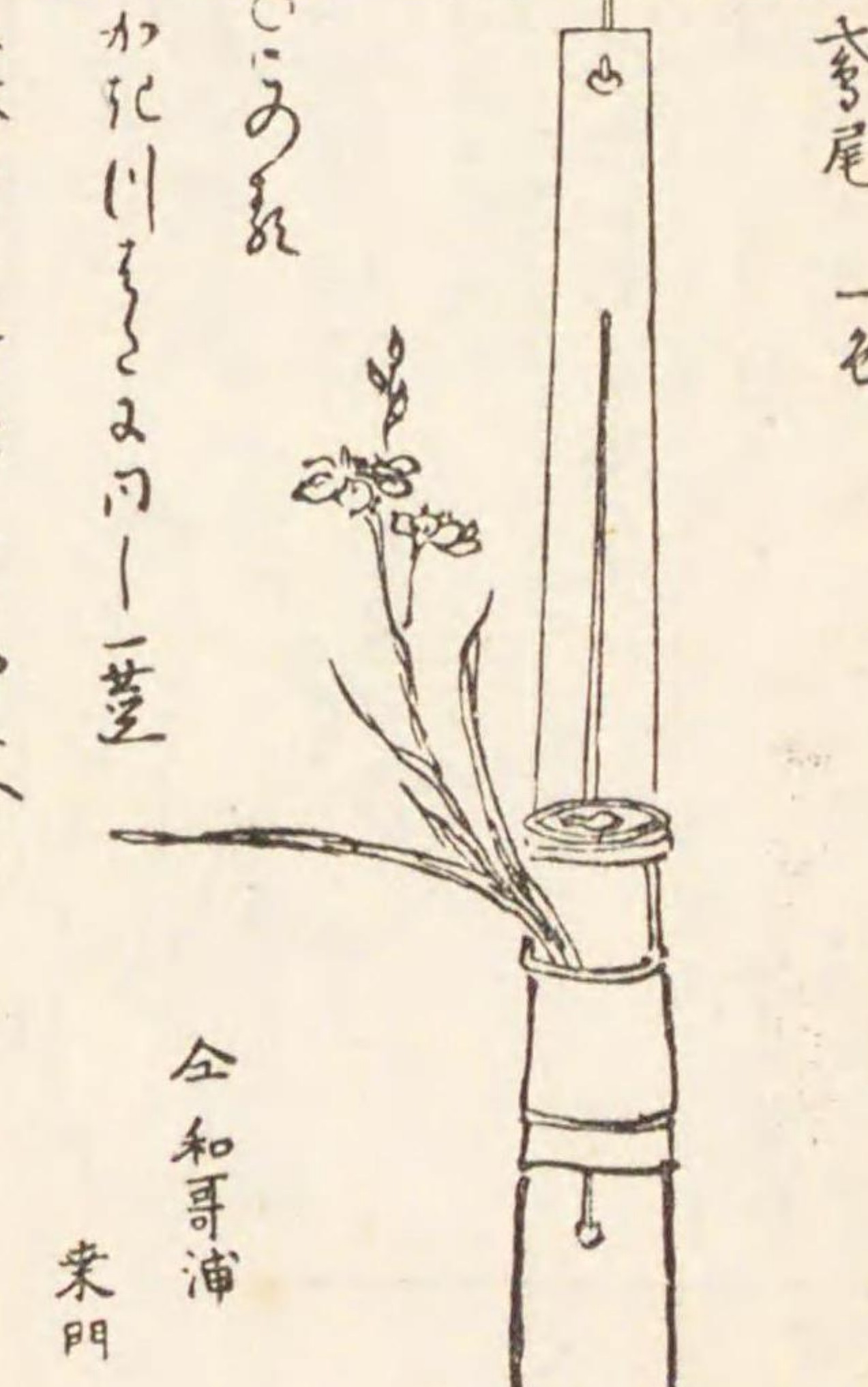
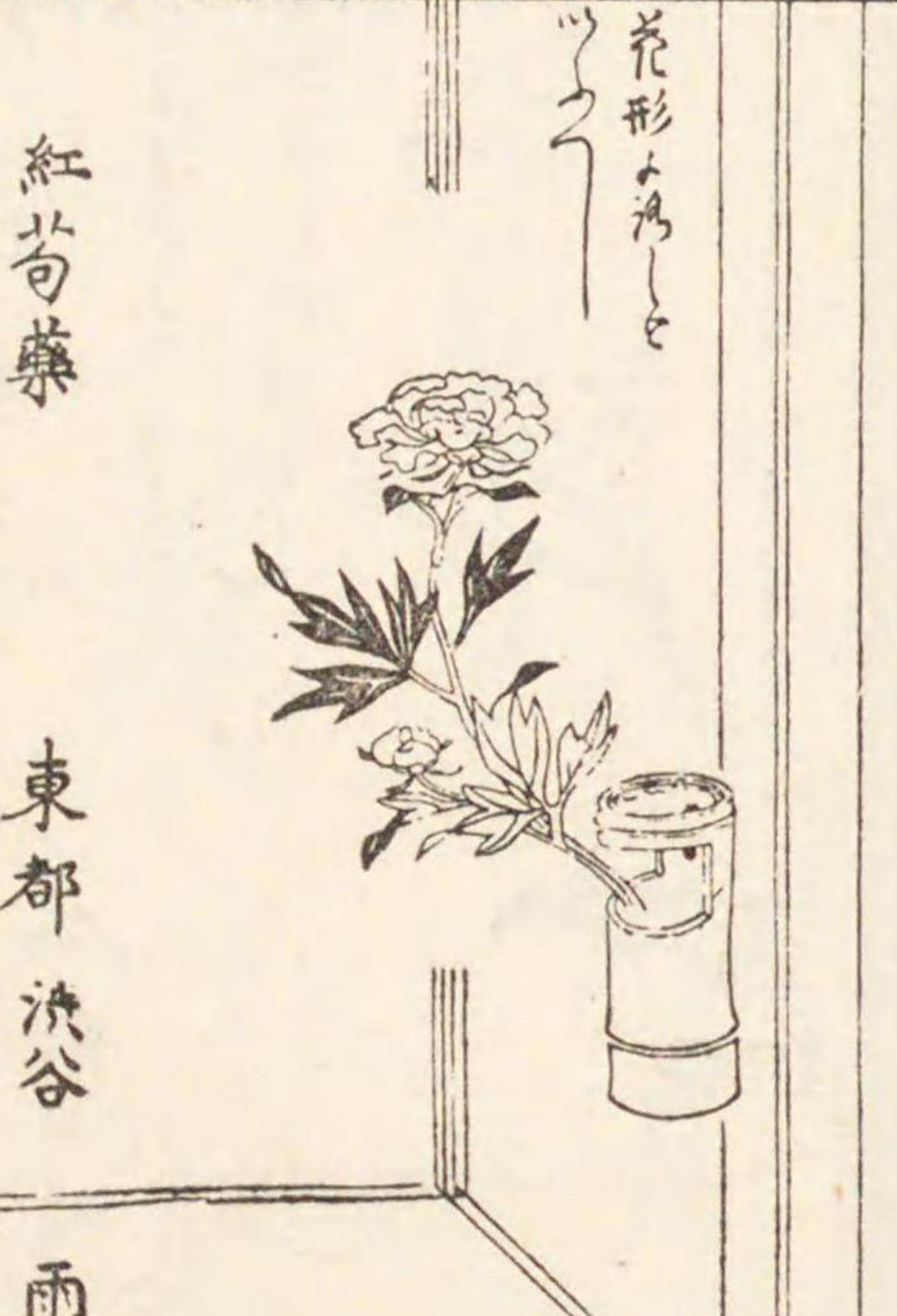
全 浅草 沙門楚英



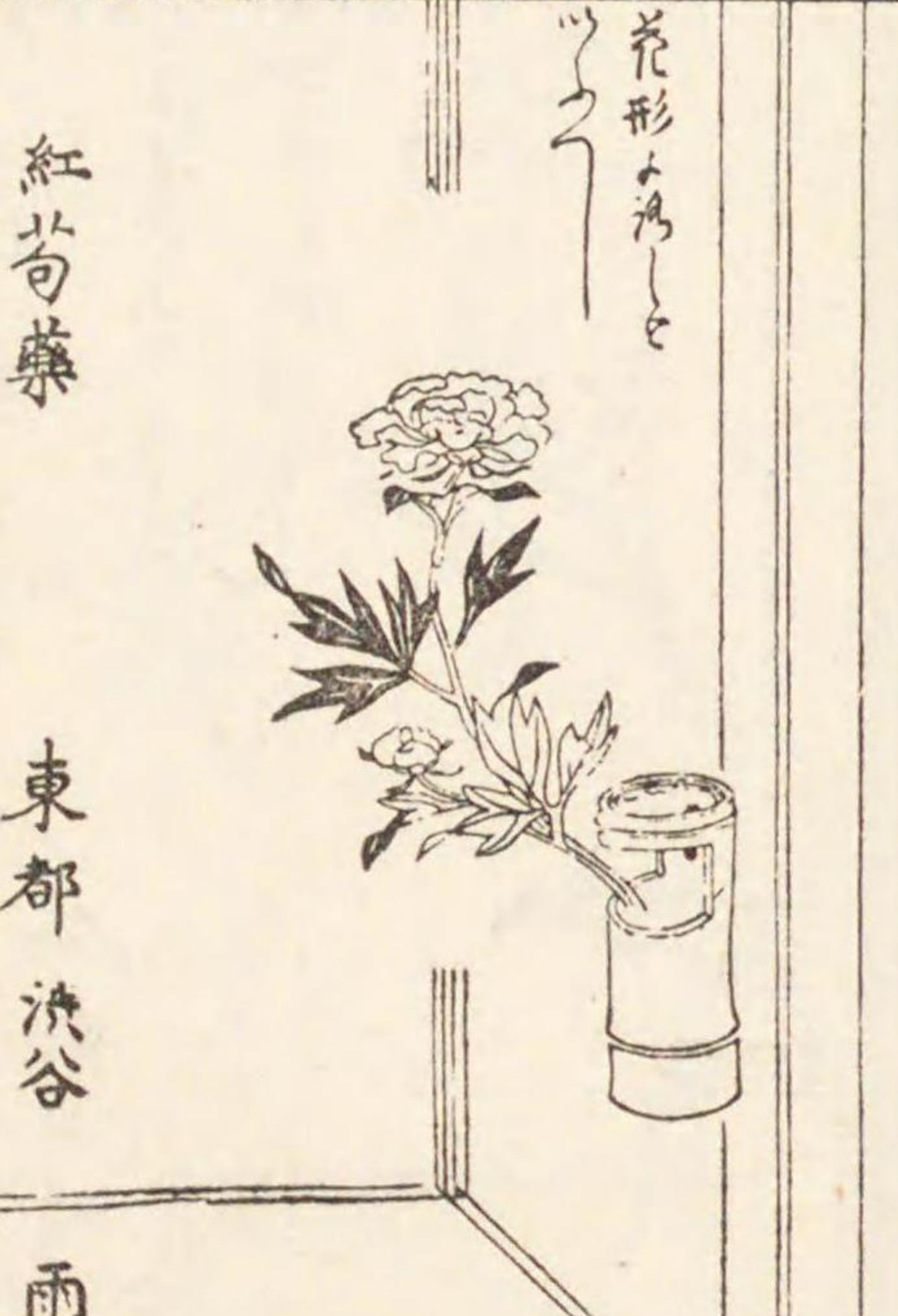
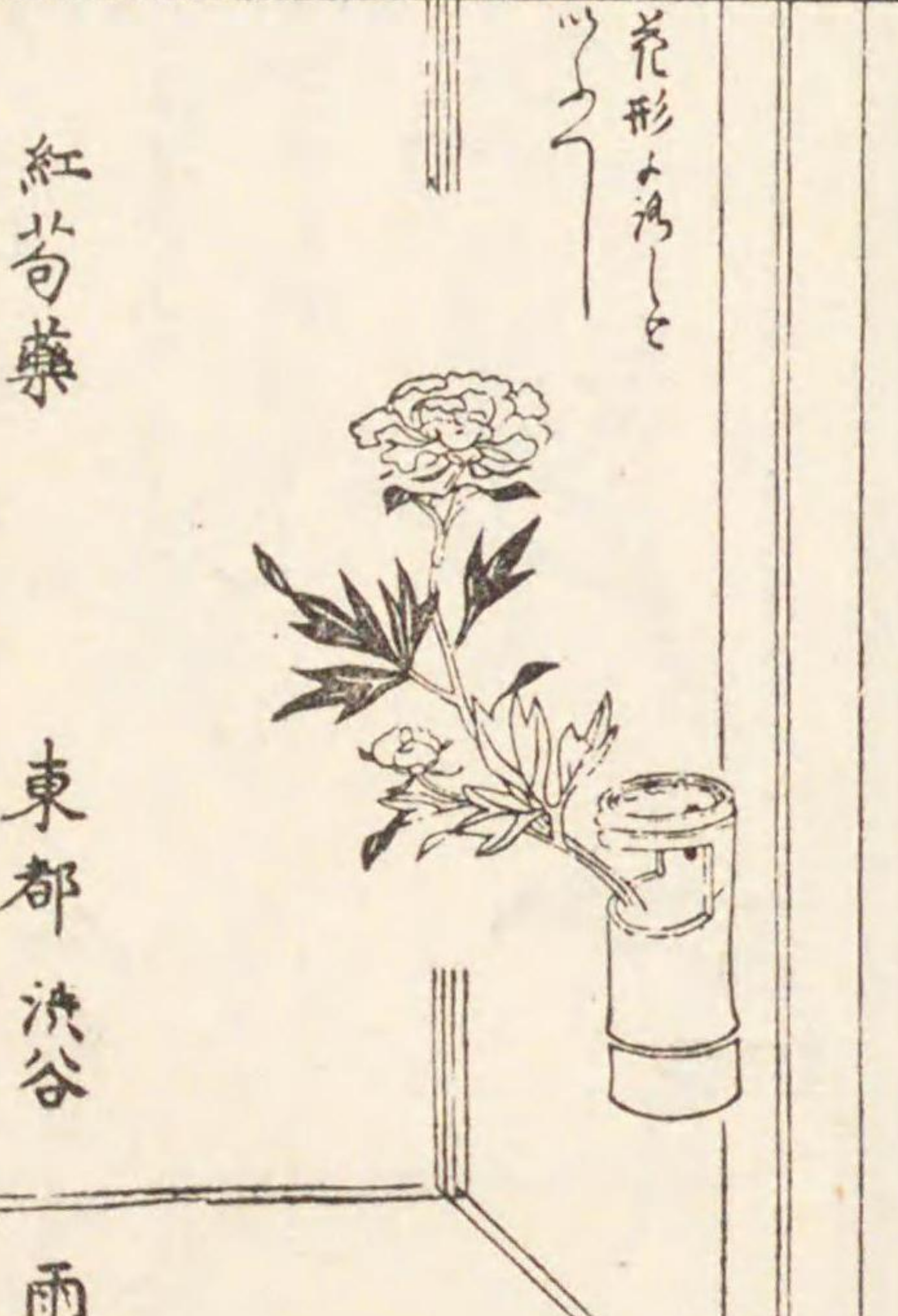
かじ川

○の花形五瓣の
まろまろとツツ
まろまろとツツ
まろまろとツツ



全 栗門 楚蒼

<p>松一色 五行并新 松葉時花成り下 ○何よりす一色を も調むかきたとのや 松公もせせ事 此花も花形調むらりつ あり、松 五行の花形 ○この花を一色のあを五行 の生形す 竹令</p>  <p>松葉軒 如竹</p>	<p>車前子 ○この花葉の 花を先より好し くのうらり同し五折の 割 送新 伝 す ○此花を養生の 海に生方 伝 川魚</p>  <p>在樹堂 州風</p>
<p>香尾 一色 ○この花 加花川 三枚生方伝 加花川 ○この生方上下合して二茎 七枚生方 付て伝 廣口折 柳竹と 川魚</p>  <p>今和哥浦 宋門 芦畔</p>	<p>紅芍薬 東都 渋谷 雨竹</p>  <p>詠歸堂</p>

<p>車前子 ○この花葉の 花を先より好し くのうらり同し五折の 割 送新 伝 す ○此花を養生の 海に生方 伝 川魚</p>  <p>在樹堂 州風</p>	<p>車前子 ○この花葉の 花を先より好し くのうらり同し五折の 割 送新 伝 す ○此花を養生の 海に生方 伝 川魚</p>  <p>在樹堂 州風</p>
<p>紅芍薬 東都 渋谷 雨竹</p>  <p>詠歸堂</p>	<p>紅芍薬 東都 渋谷 雨竹</p>  <p>詠歸堂</p>

女房花のの形五折の
の生方を生こつて
の生方を生こつて
ついで



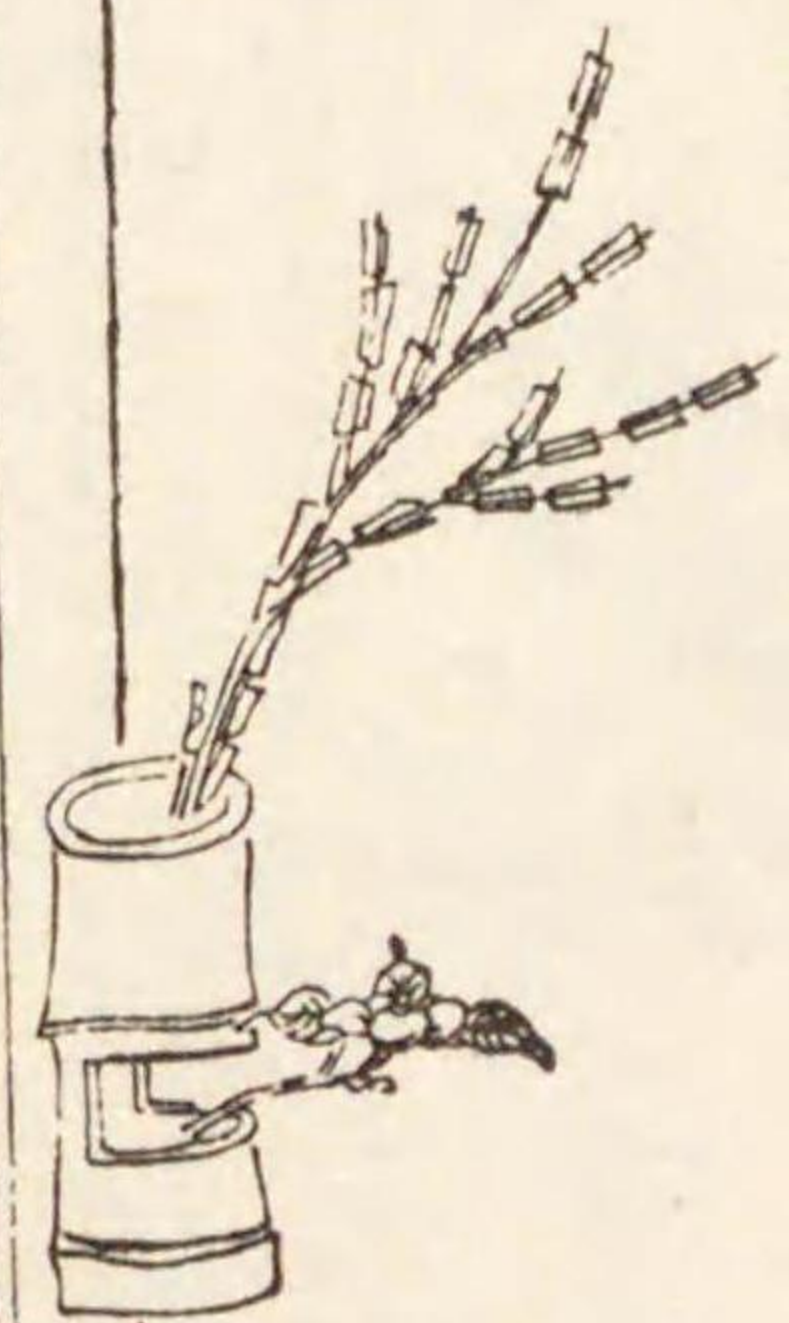
江州高宮
春曉堂
雨霞

紫苑のの枝系
の形こぼりこぼり
こぼりこぼり



江州大山崎
西村湖月

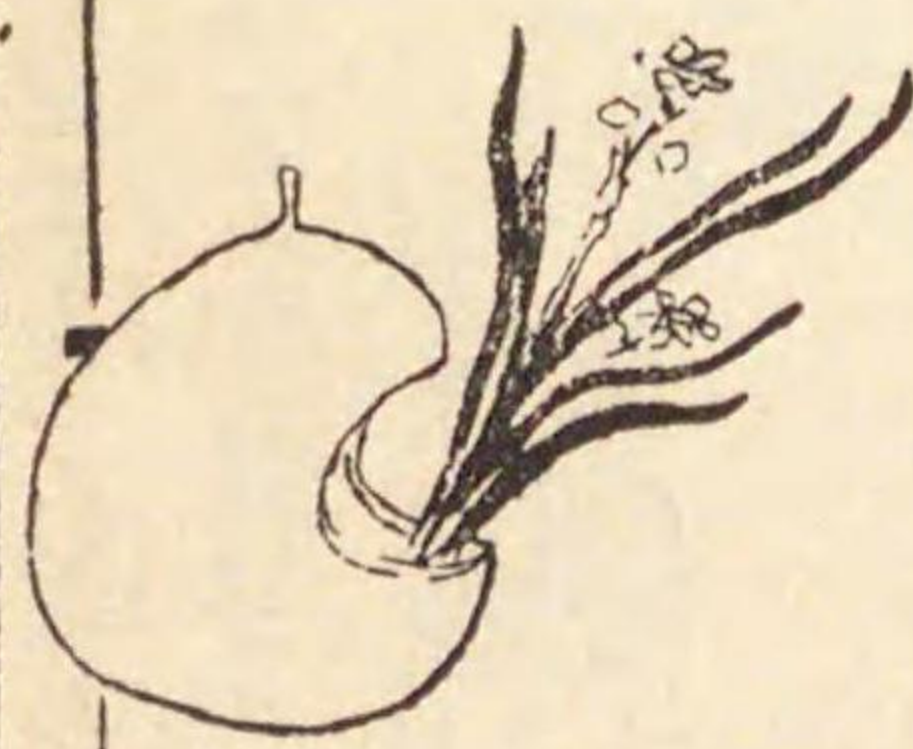
の形木枝
の生方上下合して
五折花形調じの
こつて



今南山崎
後野湖月

水仙

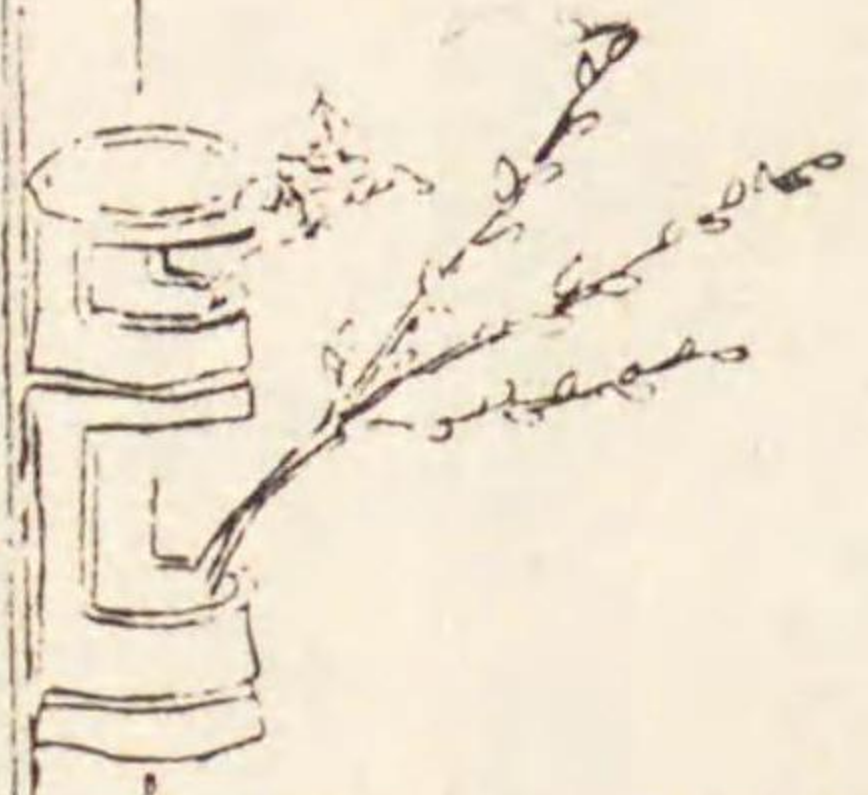
の生方
の形こぼり
こぼりこぼり



合、
後野湖月

庭極

の形上下合して
五折花形同依り
こつて



江州伊富貴山
東門光貞

柳の仙

の形五折の
割の付ちり花形
の形こぼり
用折心の人
生方こぼり



全同
詮

の形こぼり
あつたを
あつたを



全東門
芦湊

石竹

の生方
の形こぼり
こぼりこぼり



全東門
芦湊

すじに 船航 ○舟の
秋のり
婦人舟のあり
まきとこいし
舟一舟のり
ゆり舟のり
今 春芳園 二蝶

多菱 ○舟のあり
帆のり
湖東川合
沙門 雲翠

業 ○舟のあり
舟のり
今 弄園亭 匡山

柳樹 舟のあり
帆のり
江列川合
楚琴臺 南溟

秋仙
○舟のあり
舟のり
南紀府
宇治 向榮

枇杷 冬素
○舟のあり
舟のり
南紀府
園奇飛泉

柳樹
○舟のあり
舟のり
尾列神島水室之館 松層女

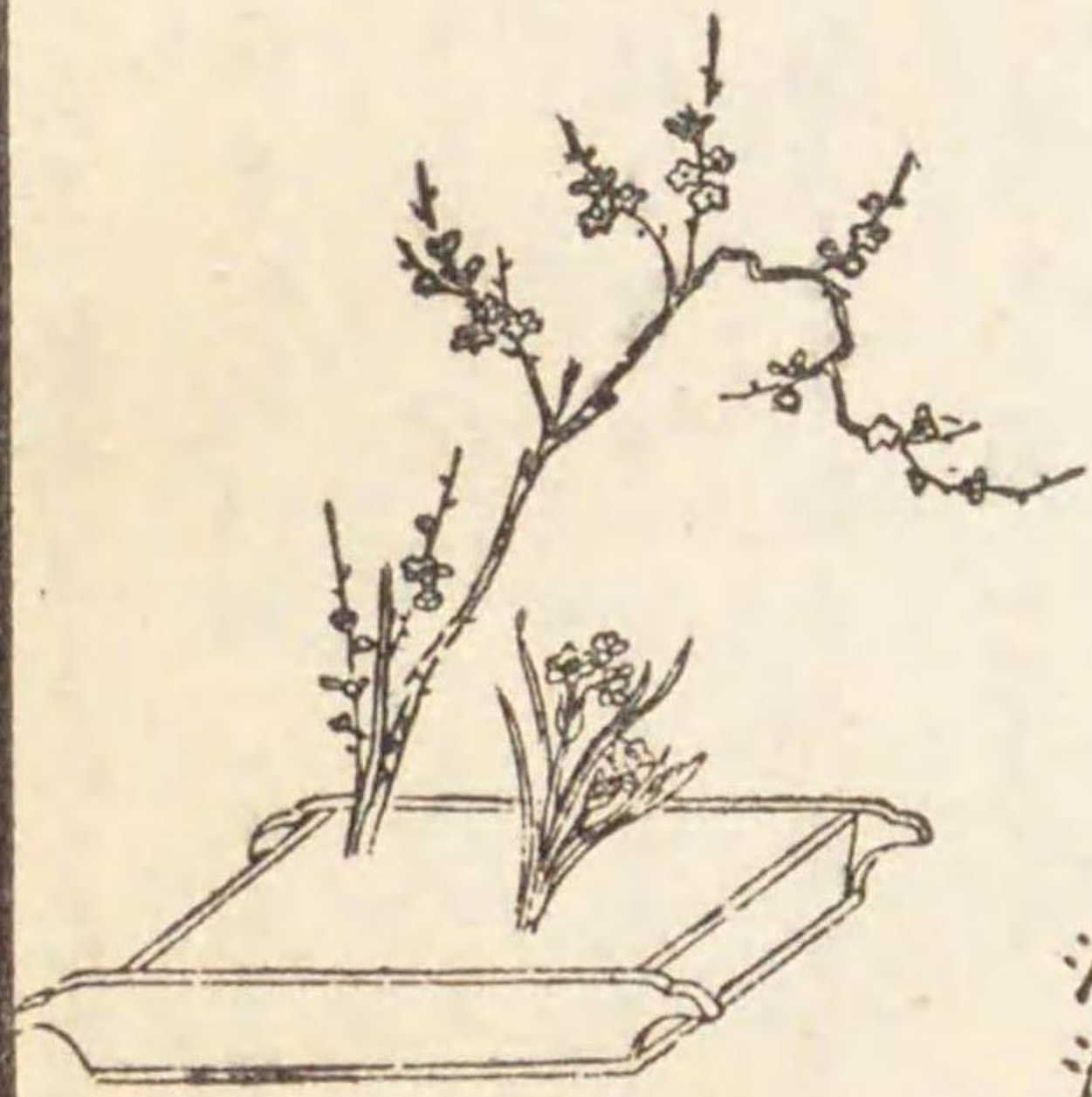
友花 初花つ
舟のり
尾列神島水室之館 水民女

全 彩雲亭 辨亮



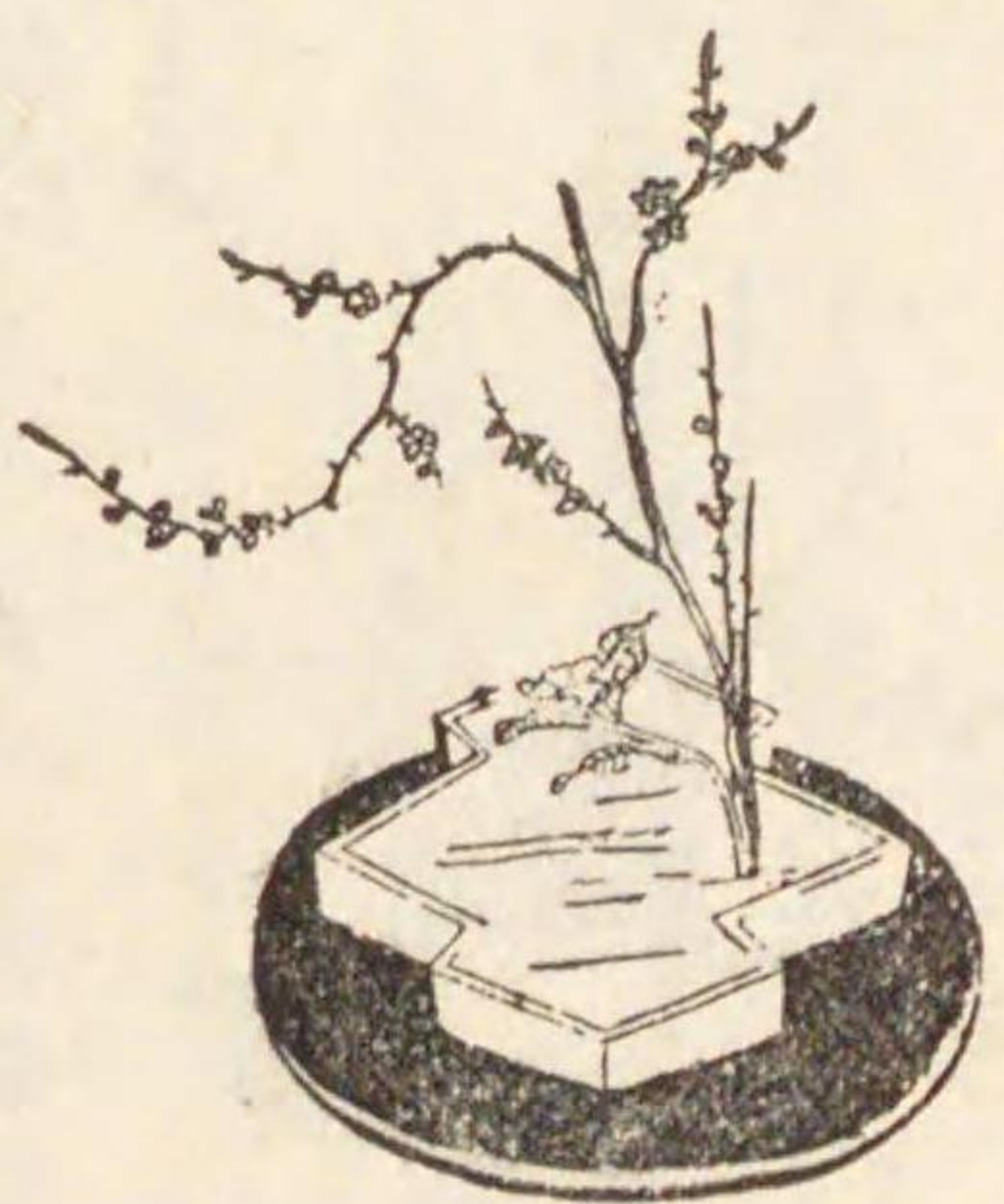
梅 仙 早 暮 の
花 ぶ 包
○この花形も花柄を正に
若葉を正に正に正に
正に正に正に正に
正に正に正に正に
正に正に正に正に

泉列尾崎善性主人 普天堂 海湖



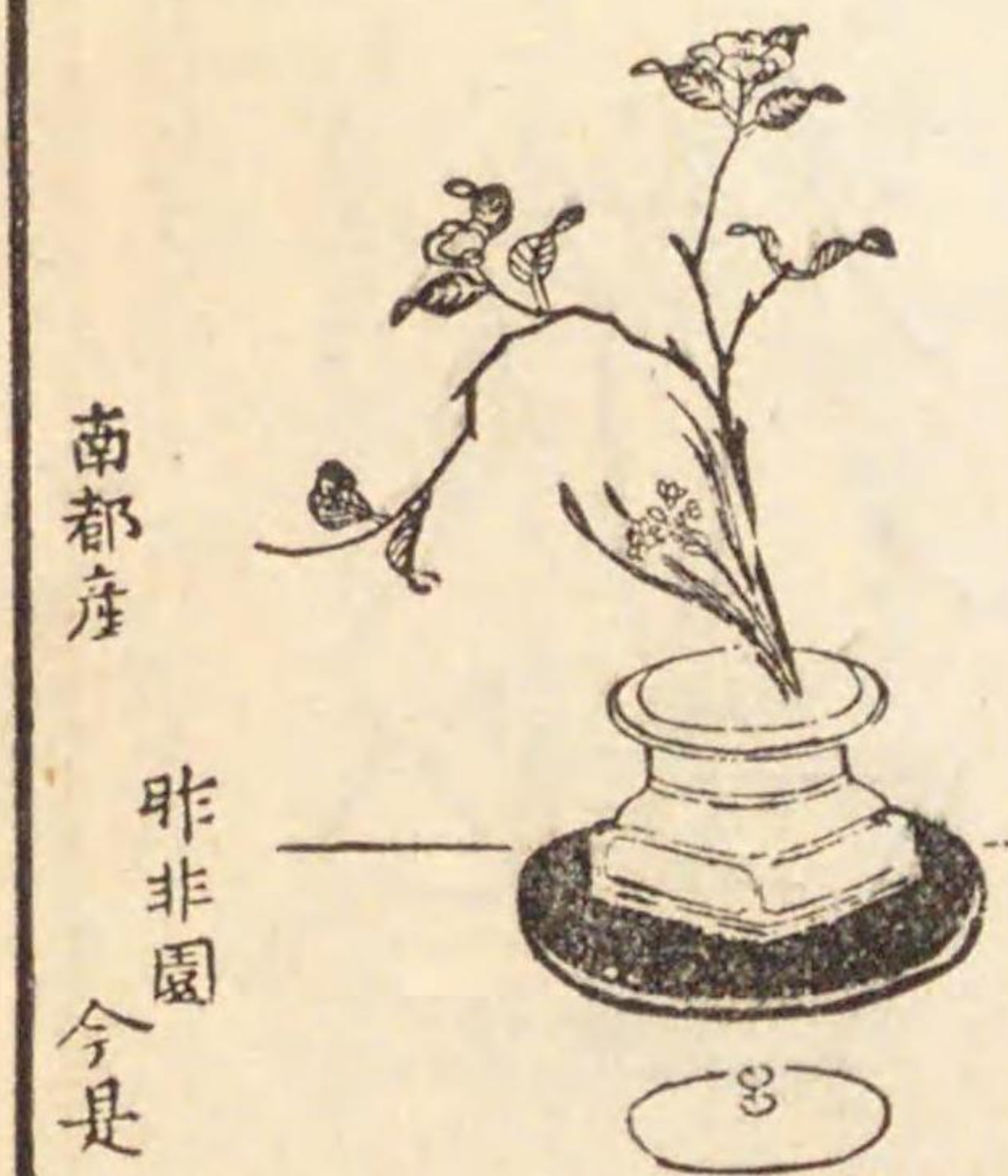
梅 仙 早 暮 の
花 ぶ 包
○一花五行的辨用之
通用の老形と之
とも正花の形を以て
曲尺合半の花形成
包

全自然田 少欲坊 知足



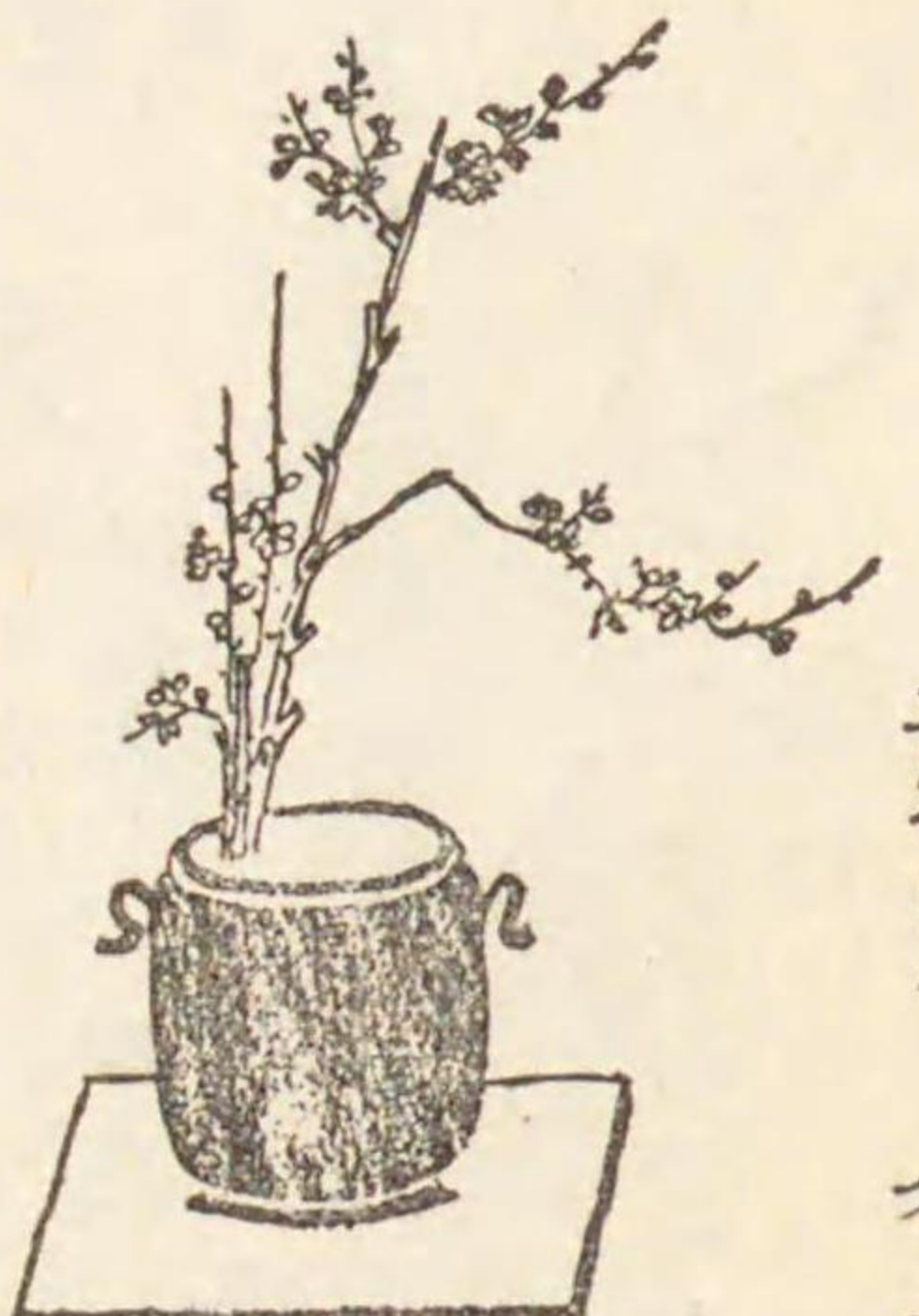
梅 仙 早 暮 の
花 ぶ 包
○一花五行的辨用之
通用の老形と之
とも正花の形を以て
曲尺合半の花形成
包

梅 仙 早 暮 の
花 ぶ 包
○この花形五行的
辨用之五行的の刻
形一様を中葉
の正に正に正に
辨用之付て正に
正に正に正に



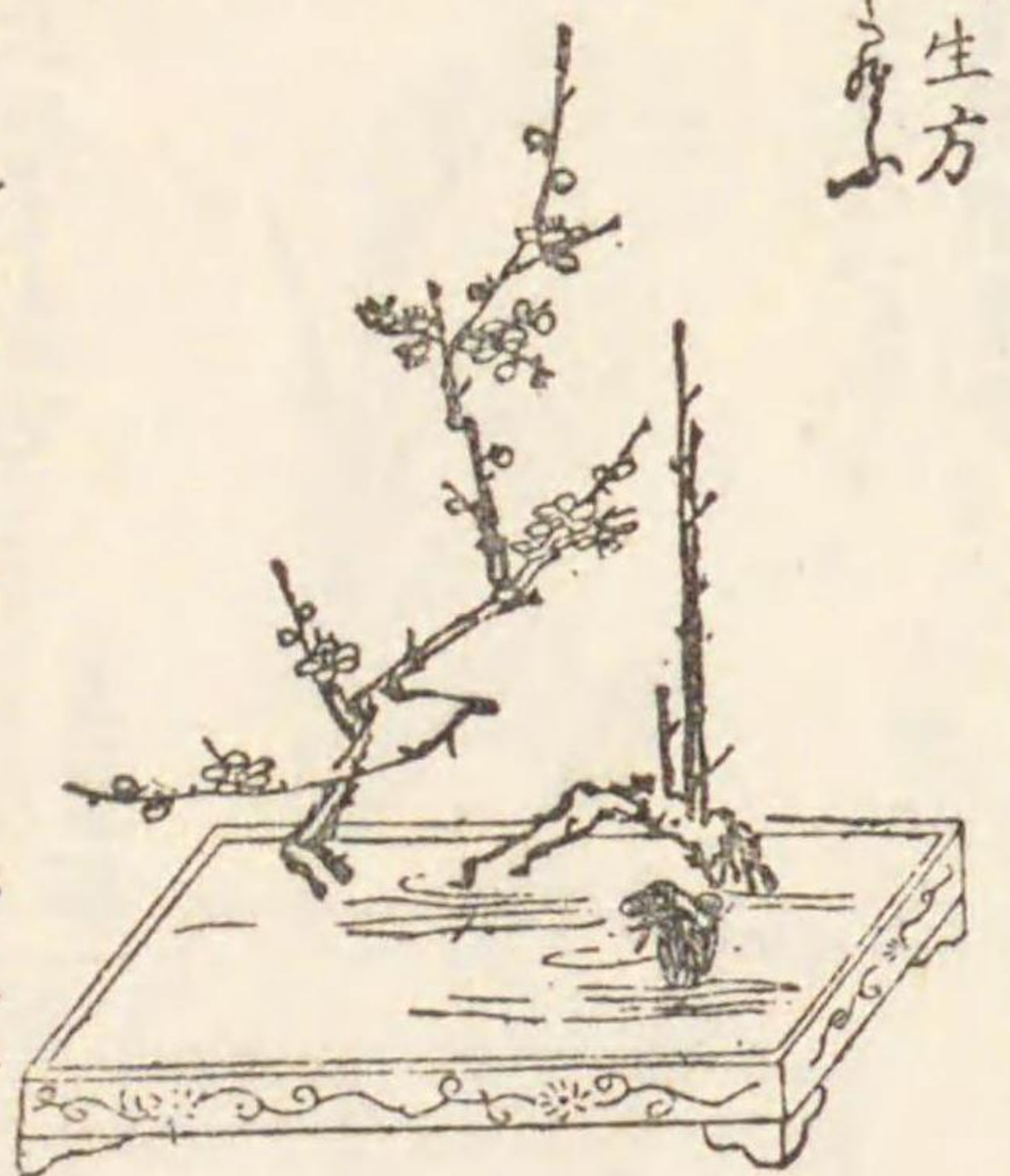
南都産 昨非園 今是

遠列濱名郡宇志村 龍取寺 三省門人 梅枝



梅 仙 早 暮 の
花 ぶ 包
○梅枝の生
方
正に正に正に正に
正に正に正に正に
正に正に正に正に

古法眼一露門三列吉田 心恭身梅楚



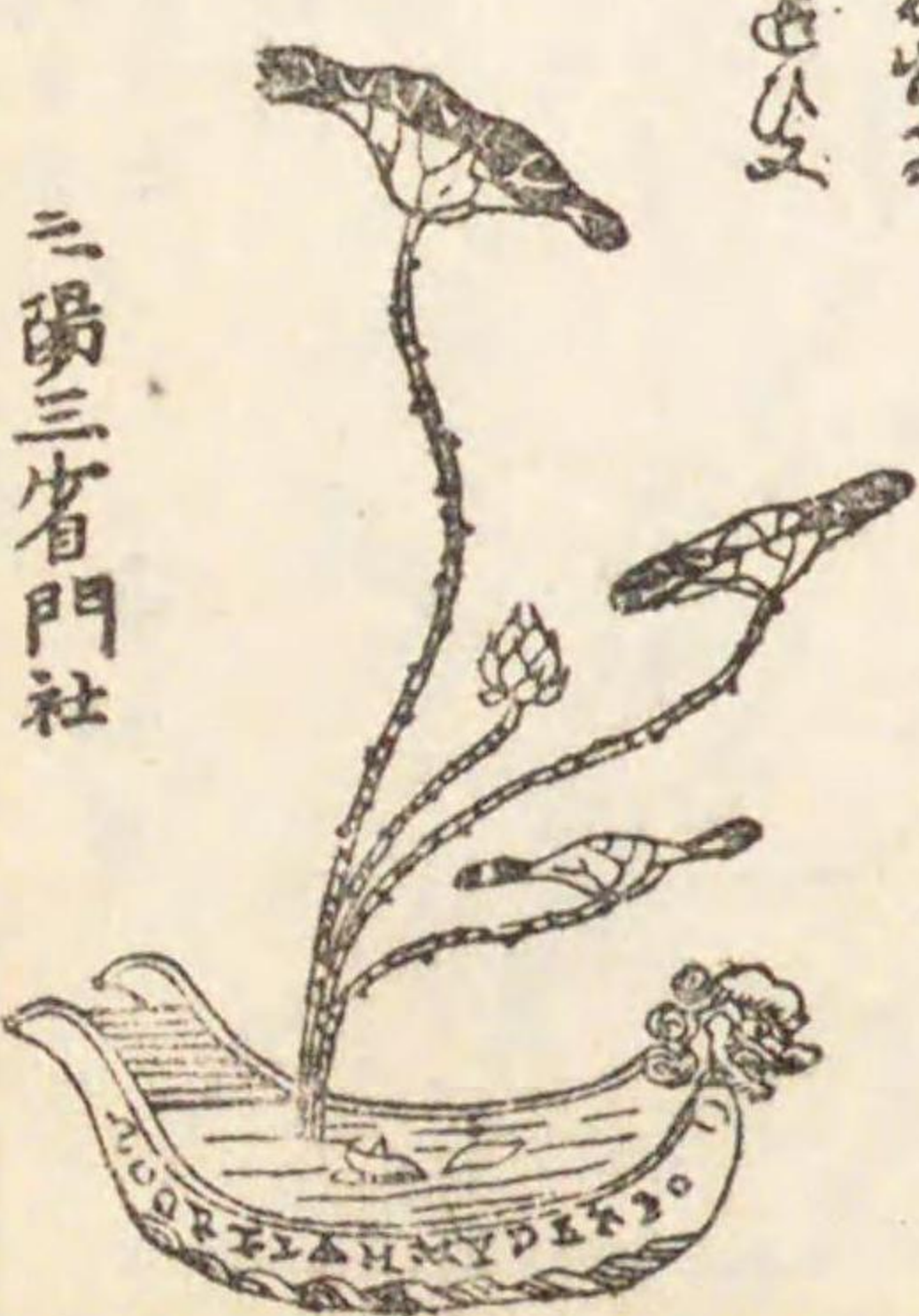
梅 仙 早 暮 の
花 ぶ 包
○梅枝の生
方
正に正に正に正に
正に正に正に正に
正に正に正に正に

三陽吉藩三省門人 萬里亭 三奇



蓮 ○蓮の生方
正に正に正に正に
正に正に正に正に
正に正に正に正に

同列同郡摩訶耶村 素光庵 春阿 三陽三省門社



鸚子花 ○この花形は所阿由時
游形も一この形に似てて生
花を二枚葉よ
五枚七枚九枚
十枚十二枚止り
生花の作りは口
吹のあしを
○この作りは、その盛りの花の
に成りつものや、子孫肝要や



三列奥郡
長仙寺村
同列全
三省門人

池浦草 沢内
○つくもりの草盛りの
に生花をこの花形
と盛りの花
形も一十五片
と刻りて置く
と振を付くと
肝要なり



同列全
三列奥郡
三省門社

菖蒲 菖蒲 櫻子の
花形も一○五月五日を
菖蒲をせりて花形
と刻りて花菖蒲を
と置き付りて作り
お師の作りをえり
○この作りは、その
作りは、その作り
作りは、その作り



全門生
同列全
露雄草
一水

三陽吉藩三省吹卷
○五片花形阿由時
形も一この作り
作りは、その作り
作りは、その作り
作りは、その作り
作りは、その作り



同列全
同列全
蘭香

蘭 かしら
○五片花形阿由時
作りは、その作り
作りは、その作り
作りは、その作り
作りは、その作り



南紀有
秀甫園
蘭卓

二花形用阿由時
作りは、その作り
作りは、その作り
作りは、その作り
作りは、その作り



東部渋谷
江浦州にわたつて河骨 寛政七年 仰月菴 蘭秀

竹 類の系 葉 七夕の花形も一
○竹の類の作り
作りは、その作り
作りは、その作り
作りは、その作り
作りは、その作り



泉塚 採遊堂
柯ト

何一 引の葉
○五片阿由時
作りは、その作り
作りは、その作り
作りは、その作り
作りは、その作り



全塚桃李園
止乙

葉 重陽の花の形

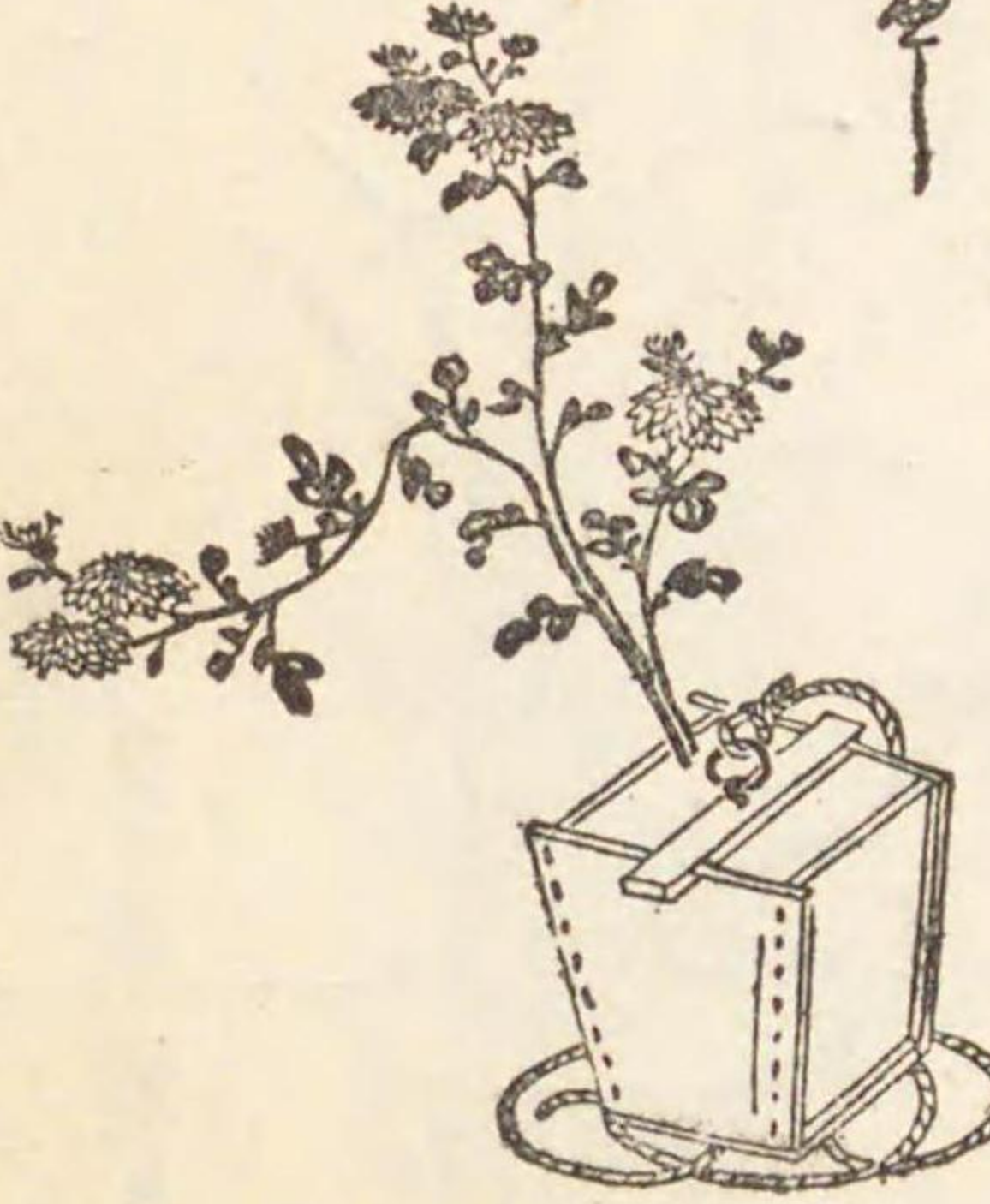
○九月九日重陽の節に
挿す所の花の形
見よかり葉を
よむむを好む
靈花の形は
を世にせし
○の花形五瓣



全、白旭庵 一洞

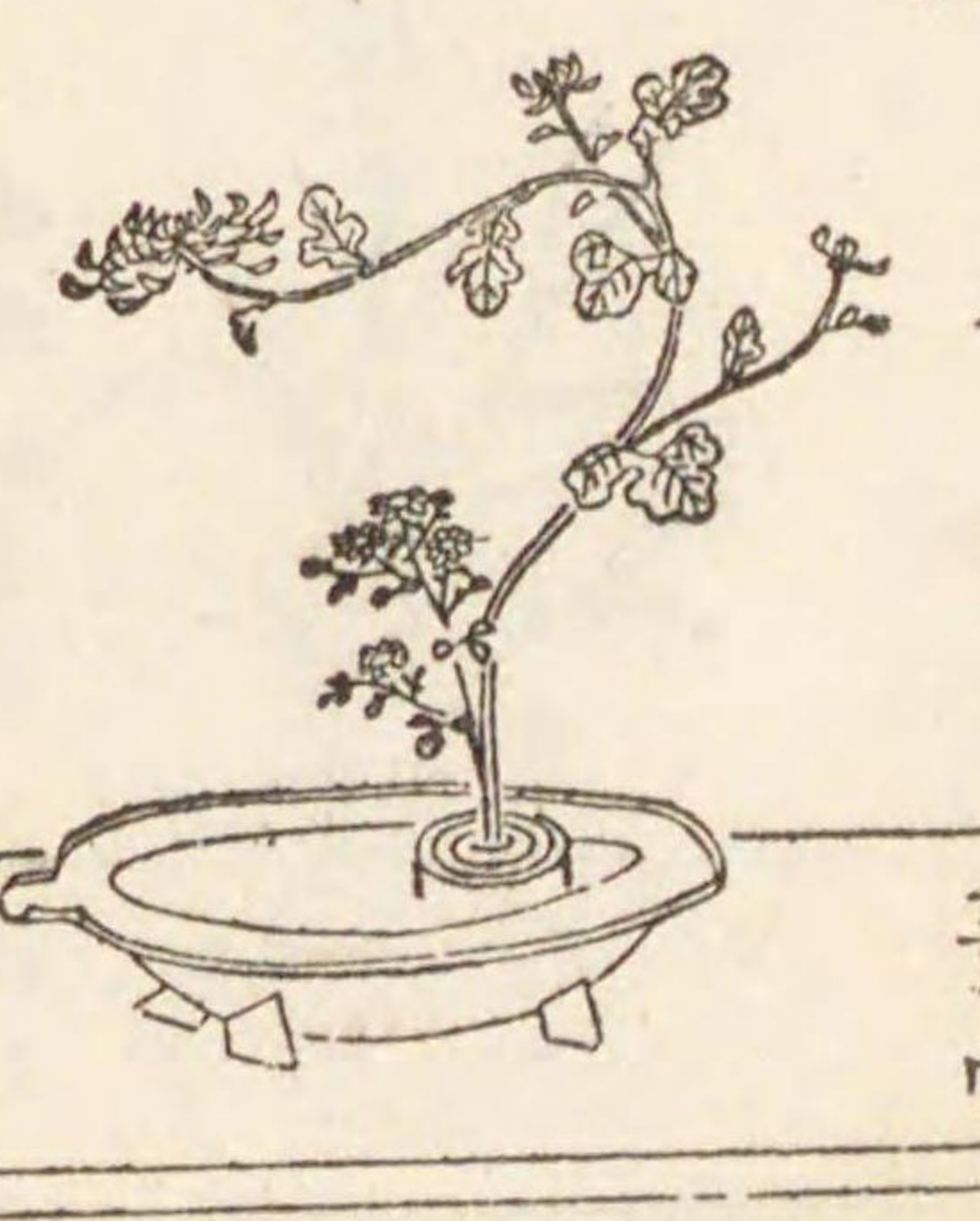
全、風光亭 泉石

葉 重陽の花の形
○の花形五行の葉
信陽五行の葉
同値の葉



葉 重陽の花の形

○の花形五行の葉
曲折の葉は
四角の
○の葉は
葉を再行の形
韻を損ふ所の
く泊り可なり



全、起元堂 葦草

全、玉泉堂 苔友

小葉
○の花形五行の葉
小葉を脱ぎ去り
を世にせし
○の花形五行の葉
信陽五行の葉
同値の葉

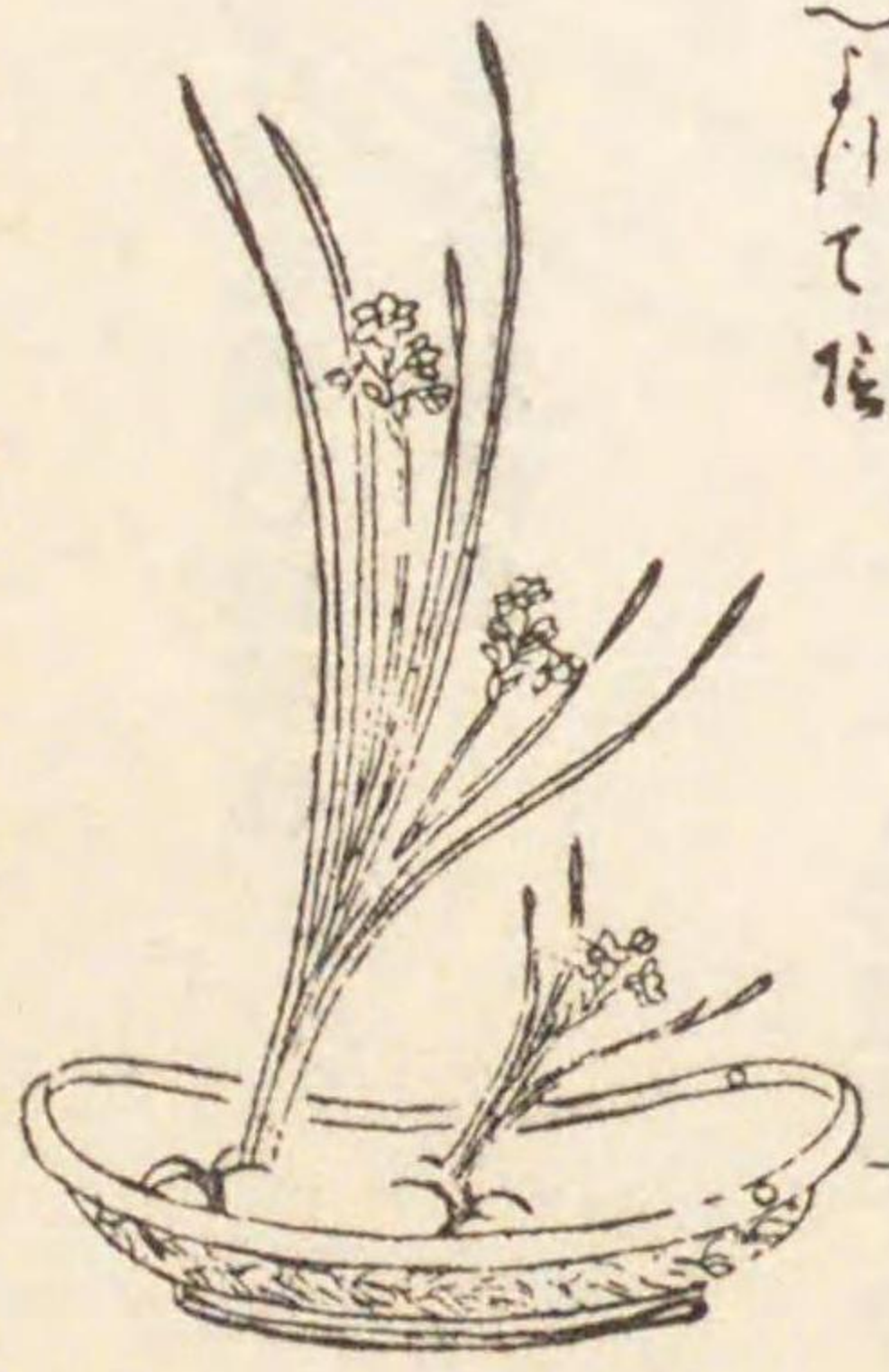


挿枝
○の花形五行の葉
信陽五行の葉
同値の葉



全、中義容

仙
○の花形五行の葉
花の形は
花の形は
花の形は



全、山本春里

生花稽古日割の傳歌

○花體の規矩を一圓相の傳源意を以て陰陽五行の三體を建立する事奥義の源秘也

○主客の傳を花器象體の源意によつて其席に隨つて一花體用を象る事秘傳也

○諸草木種類千ヶ一を揚て千草萬木の出生を糺す事極秘傳也

以上秘傳十ヶ日の日割を以て傳授し三十一字の傳歌を以て草木出生それ〴〵の種類を分それ
〴〵生方に傳數ある事を口授する也

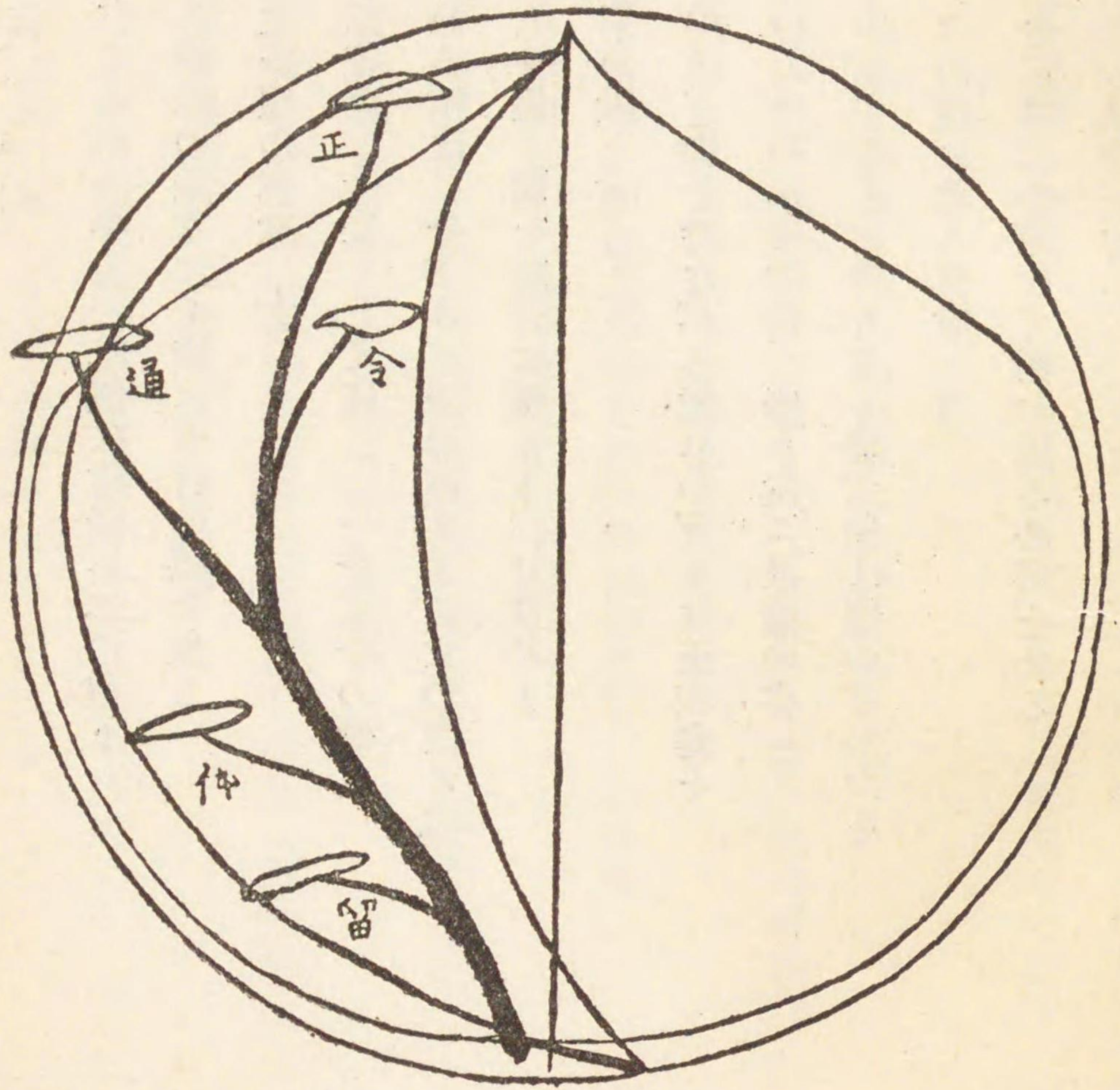
稽古の次第傳詠の言葉日割の下に集るものなり

(初日)置花器四大具足の傳 獅子口象體縛字片體の傳傳に云置花器は地大の阿字の表形也獅子口
は水大の縛字合成の片體也この二器に主客の傳有云掛花器は主客なし置花器には主客有花體の
取成ある事傳歌二首を以て相分つ也

掛花は主客の沙汰をせざるゆへ梢を床のうちへ振るべし

置花は主客定る本意にて梢を床の上座へそ振る

○一圓相の傳に云圓相は乾坤未分の體也是大極也圓形は陽方形は陰花體に象る半月は陰寶珠は陽
又大圍圓相は陽半月の花體は陰これを合して陽陰不二也



生花出生傳圖式

爰に傳歌二首

一圓の中にこもれる半月の花體は陰陽不二の象
半月の影と寶珠の光りにて横に五行の徳を象る

(二日)五體出生長短の傳歌三首

通よりも正花は二寸長くして座より一分は令の働
正花より通の梢は二分下けて令の座よりは立のぼる也
通よりも六分短く體を附留は體より二寸屈めよ

○五體出生體用傳歌三首

直き根の中ほど肉を持たながら競ひのぼるは正花姿を
根は直く中たほやかに肉持て靡き競ふは通の姿を
根も直く中もするとに肉もなく競ふ梢は體のすがたを

○五體出生半月の體に象る傳歌一首

半月の影を正中二分缺けて梢を居る心得そある

○五體出生配當の傳歌一首

正花より令は後に通はすみ體は前にて合す三角

○五體出生假名四六の割の事並に傳歌一首

五體假名に云正令通體留也四六の割寸傳に云一尺の割と一尺五寸の割との二つを用る也一尺の
割は一寸五分留迄 一寸體迄 一寸五分通迄 二寸令迄 一尺五寸の割は一寸五分一寸五分二寸五分三
寸五分也

花形の正令通と體留と四六の割をわすれざらまし

(三日)梅柳傳歌を以て傳數を分つ也すべて木類は生方を梅の姿に習ふべし條れるものは柳に習ふ
べし最別傳のものは其品にて口傳あるべし

梅若梢スツ身木ともつれ枝陽花の傳是には口授のならひある也
生方を梅の姿に習ふもの桃や海棠なしや狗子

柳には陰陽を取る生かたに一陽來復象眼の傳(象眼は重傳なり)
立のぼる身木の梢を寸と取りたる處に縮柳の口授

(四日)椿枇杷青木大葉もの、類水仙花爰に種類なし水仙は別傳也
椿には陰丁陽半葉の數に一輪生と三段の傳

枇杷青木すべての大葉中葉をば椿に習ふものとしるべし
水仙の秘事は陰陽口説にて丁葉半葉わけてしるべし

初盛殘花配りして水仙は上中下段生かたそある

(五日)蓮花 傳多し傳歌に秘事詠合かたし通例の生方河骨のことし

蓮の花數ある秘事はわかすともまつ生かたを河骨によれ

○燕子花蛇腹出生といふもの也口傳事也蛇腹出生のもの、種類を詠合傳歌爰に二首

かきつはた一八菖花菖蒲鳶尾射子は蛇腹出生

紫蘭他偷草薄の類も出生は蛇腹のものと兼てしるへし

○かきつはた口授傳數詠合傳歌爰に二首

かきつはた蛇腹の口授や三段と一輪生も初盛殘有

燕子花五枚の葉より習ふへし三枚生は奥義にそする

○蘆葦の類江蒲草三角菅の類 この類を陰生のものと呼也花體の取成を詠合傳歌爰に二首

陰生のもの、よしあし二方葉は一の葉にてそ道具とるへし

陰生の江蒲草三角菅の類は花腰を付道具取るへし

(六日)山吹の類詠合傳歌爰に三首すへて靡きたるものは山吹の生方に習ふへし

身木枝の遣ひ分ある山ふきは正と通との傳は長短

山吹と同じ姿の生かたは黄梅連翅連珠金雀

山吹に又是同しとりなしは萩と鈴掛下野の花

○藤の類の蔓もの薺アサカホの類の蔓ものすへて蔓もの、種類傳數の詠合傳歌三首

藤は蔓花蔓先の陰陽をそなへて習ふ谷越の傳(谷越は重傳也)

薺アサカホや晝顔夕顔鐵線草同じ姿の風車なり

蔓もの、取成はみな朝顔の姿に習ふ初盛殘有

(七日)紫陽花葱鳳花の類生方を鶴翼といふ葉組に取成也又水葵澤瀉の類生方を鶴翼に取成也鶴翼の傳口授を以てしるへし爰に鶴翼に生成種類傳歌二首

紫陽花やさほうし擅特石菜羽蘭同じ姿に習ふ鶴翼

水葵澤瀉ともに河骨の姿に習ふ鶴翼の傳

(八日)菊夏秋冬出生は四方葉に生するもの也生方は段生也一の葉にて五體の割を付る也段生の取成様をは口授を以てしるへし爰に四方葉の取成段生に生成種類傳歌二首

いつれとも四方葉の傳分つなら五體の割を菊に習らへよ

段生は菊やあちさる女郎花手鞠撫子下野のはな

(九日)舟 馬盃 廣口 二重 四品の生方

(十日)重傳 初盛殘花道十三條

以上初稽古出生傳の表傳歌を以て終處如件

松月堂古流是心軒法眼一露居士

道統 植松前中納言殿方 五大坊誌之

右秘藏印刻也古流門生のために一冊となすものなり他見他言を禁ず

五大坊ト友

插花故實集

龜齡軒蒔來先生著

插華故實集

大阪書肆

稱觥堂書肆

園きまのいづくかろふ能くはふと印を
引き及れ一行中安素町にいたる
乃道よりいそぐらぬむと領地及び
千里も一まじりしを海路ほしとあり
築可く授けぬ家方決定す園管大
河乃如ぬもすしを計りてふとあり
よ牙と合ぬと造化も水とのと計り

浪中風かきよるよのよし四巻一巻
染しそるしに清て書よの孤裡乃
外戸舟月主人すらなゆ

于時寔政六寅

一及五月念八

浪中棹舟孤裡

一炊菴泊帆



挿花故實集

上卷目録

- 一 生花濫觴
- 一 三國傳來天笠の始
- 一 獅子口尺八阿字縛字象體
- 一 唐土挿花の堅證
- 一 皇國生花の來由
- 一 生花の大意
- 一 諸流區の論
- 一 千宗易自他の論
- 一 體相用三大
- 一 千家生花無法の論
- 一 懸物の横堅

- 一 床の由來
- 一 四十八棚の式
- 一 四十八棚目録

中卷目録

- 一 千利休當時千氏生花の相違
- 一 抛入の稱號
- 一 竹の花器の由來
- 一 竹の花器目録
- 一 竹の花器寸傳
- 一 華瓶寶瓶花瓶の差別
- 一 釣舟の花器
- 一 馬盥生の事
- 一 花配の事
- 一 草木の陰陽天地陰陽

- 一 陰陽相剋
- 一 五倫圓成
- 一 陰陽五行花體の差別

下巻目録

- 一 陰陽者諸道の根元
- 一 花體五體の假名
- 一 一圓相圖式
- 一 皮肉の花體
- 一 佛草木の誓
- 一 生花者草木隨心
- 一 生花賓主の禮
- 一 生花者不有他の樂
- 一 五體の名目
- 一 仁儀禮智信象體

- 一 神儒佛象體
 - 一 三種神寶象體
 - 一 神體象體
 - 一 神德陰陽和合
 - 一 花翫人無病長壽
 - 一 花實の論
 - 一 禁花の類
 - 一 四季水際の差別
- 以上目録

插花故實集 上

生花の濫觴

一 插花の濫觴は先師是心軒法眼一滴露香翁著述する所の甲陽生花百瓶圖或は古流生花四季百瓶圖等に荒増を記すといへども追て故實集に委しからしめんと惜き筆を擱きぬ予も亦諸國連百瓶圖にそこ爰を取り集むといへども多くは此書に事を譲りて其實を明かず意味を残しぬ意あらん人は此三部の百瓶の圖とてらし合せて見るべし

三國傳來天竺花の始

一 生花は三國傳來にて天竺を始とす然りといへども諸流區にして諸家に出す所の花書或は立花にても池の坊より傳る秘卷にも多く拈華微笑を最初と記せり先其拈華微笑といふは釋迦如來の御在世靈鷲山にましまして御說法の會座へ梵天王來下して佛に金波羅華を捧げ奉り其時世尊此花を拈して高座より御手を出し給ひしに八方の大衆とある數多の御弟子の中に誰か一人此佛の御心を證られしはなかりしに摩訶迦葉尊者唯一人是を見てにつこと笑はせ給ふ其時釋尊の玉はく

我に正法眼藏涅槃妙心實相無相の法あり汝に是を附屬すとのたまへり是は以心傳心不立文字見性悟道の始なり故に禪家次第相承の祖師は天竺にて迦葉尊者を第一番に備るなり爰を以てかんか見るべし梵天王佛に捧げ奉りしは金波羅華といふ花なれども瓶に移して供したるにはあらず花を御手に拈り玉ひ禪宗の悟りの道を花にて傳へ玉ふ事なれば挿瓶花といふにはあらず大に異り然りといへども多く生花家立花家ともに是を用るは慎に傳はる故實の傳來なき故に無理に天竺にて佛花の縁を取りたるゆゑに誤り來れり

一 拈華微笑を天竺の花の最初と云ふは佛在世の花の徳は諸經に數多出たり既に賢愚經に云昔し迦羅城在貧女取草木花奉佛菩薩終成佛云亦智度論曰以一花布施佛塔九十一却生天

等の類は算るに足らず何ぞ拈華微笑に限る事片腹痛き事共なり
一 禪の句草紙に拈華曉稱迦葉傳衣夜喚盧能一文亦云世尊不説々迦葉不聞々と書せるも此事ならんか

一 佛在世より始りたる適說正論あれども秘傳口授ある故門に入らざれば委しくは識得しかたし夫天竺にて阿難尊者佛に能華を寶瓶に移して供養し玉ひしより佛前に花を供する事とはなりぬ故に佛家にては香華といひ華香ともいひて花を供養の第一に備るなり然れども今の出家多く此故實を知らず唯花を供するも食を供するも同様に心得しは可惜哉心あらん沙門は予が門に入りて

供し様に深意ある事を正すべし

一能華は大に口傳あり此能事を瓶に移して供し玉ひしより佛神に供する事となり今の生花の所詮となれり寶瓶は今の花瓶なり象體に口傳あり他家の人此故實を決して知る事なし

一天竺にて瓶に花をうつすに付て又意味あり夫天地の際に生を得るもの父母なきはし然るに草木斗は父母なく天を父とし地を母として雨露の恵により人情を借て生成す爰に天竺の人は至つて慈悲心深ふして是を憐れむ是佛生國の徳なり勿論釋尊のみにあらず過去の七佛毘波尸佛尸棄佛毘舍浮佛狗留孫佛狗那舍佛迦葉佛釋迦牟尼佛等の七佛なり凡佛に法報應の三身あり應身の佛とは此七佛等なり應身は娑婆往來の佛なり七佛皆天竺に出世して直に衆生濟度ある時はいつにても天竺の出世なり又釋迦の御弟子に彌勒菩薩は佛の滅後五十六億七千萬年の間都率の内院に於て御說法御執行なされ天竺へ御出世の上大磐涅槃の證りを開き正覺の位に至り敗多利也如來と成て衆生を御濟度なさるゝなり既に弘法大師の入定も此佛の出世を待玉ふ亦圓光大師の御師匠も櫻の池に身を投げて蛇體と成て彌勒の出生を待玉ふ然ればいつにても娑婆影向の時は天竺に限るゆゑ彼國をさして佛生國といふ是等の佛の徳に依て總じて彼地の人は慈悲深し其心より父母なき草木の時節來らずして嵐に逢て花葉を吹落され或は枝を吹折られたるを憐みて枝ともに折たるは寶瓶に水を入れて暫時の齡を保たしめ又花斗吹散りたるは

水斗モクソクに水を

湛えて花を浮べ暫時の齡を保たさしむ此二つの器を天竺にての花器の最初とす是より瓶に花を移して供する事とはなりぬ

一寶瓶は天竺にて七寶を入れて佛に供する器なり今佛前にて一本の檜を供する器なり日本に渡りて是を花瓶といふ是は阿字の表形にて象體に甚口傳あり

一三つ具足に添たる花瓶は阿字の表形あり縛字の表形あり檜を供するはけひやうといひ三具足にて花を供するをくわひんといふ文字は同じうして音の違なり尤阿字縛字の象體大に口傳あり

一備前の國に限りて行はるゝ生花を専慶流といふ此先生の云く天竺の最初は瓦を二つ合して花器となりたるといへり甚愚昧の至り也瓦を二つ合したりとも水を保つものにあらず瓦工ある時は何ぞ六ヶ敷瓦二ツ合すに及はず瓦工に命して磁物の花器を造らせ水を入花を生て能様にはせざるや瓦は天工自然の物と心得たるか人工ならば瓦も花器も同様なるべし花器の本形象體ある事を知らず唯花心なき顯蜜の出家に會合の時物語せしを經釋に慥成證據ありと誤れり尤も此流儀は立花より出て作意のみを秘傳とし五重切の花器に松杉等の常盤木を以て昇り龍降り龍と生る事至て秘傳事なり然れば書院向數寄屋向の花にはあらず故實を知らざるも道理歟

獅子口尺八阿字縛字象體

一插花に用る器も鑄物磁物竹の筒籠等に至る迄あ孔字くの表形なきは作意の器にして本形に

あらず竹の花器も置筒も阿字の表形なきは作意の器にして本形にあらず竹の花器も置筒は阿字の表形なり仍て陰にして眞の花器なり掛筒は縛字の表形にして陽なり仍て走の花器なり竹の花器に二十七品あり是皆象體あり象體なきは決して用ひず尤切方の寸傳象體は勿論職人に傳る事を禁す尺八獅子口の二つは甲陽百瓶に象體の圖を以て記す依てこゝに略す

一尺八は假りの名なり世人多く虚無僧の尺八と心得て切る故田舎杯にて本形の尺八は少し本は樂器の尺八に寄りて名付るなり尺八に一重切の尺八といふあり冬至の節に至りて此尺八の内へ葦の葉の灰を一盃につめて火の上に釣置けは一陽を發する時に至てはつと灰を吹出す時の調子を以て十二調子を定め四季に渡り十二月に配當す依て霜月を調子の始めとす是調子の根元なり尺八は一尺八寸にして表に穴四つ裏に穴一つあり但し八寸もあり何れも一節切なり玄崇皇帝所持の尺八は我期に渡り龍田の法隆寺に納りて今に重寶とす尺八の事は樂器にて甚秘傳なり仍て委くは記さず今花器に尺八と名付事は樂器の尺八の一重切にして樂器の最上調子の根本なるに表して竹の花器の最初一重切にして本來無面目の形なとも **尺** 字の表にして則四大を具足す是より種々に割出して數品の花器となる依て假りに尺八と名付るなり大に口傳あり此故實は今の生花家茶家の知る所にあらず

一 **ハクモクモク** は天竺にて佛家の花器なれども日本に渡らず仍て多くの出家も其形を知らず

其形は花籠ハナカゴに似て能く水をもつ花籠は俗に花皿といふ遠堂の時稱名の本を入英を雨らす此器に能いて水を保つをもくそくといひ水の水の入らざるを花籠といふ尤も他家の書に生花四季の友といふあり是に其形を顯はして衣被と書たり是甚誤りなり今は花も器も三國傳來を糺すに付て天竺より傳はりたる事のみにして外に意味なし然るに衣被の文字と器の形と相違せり此文字は法華經の中に大通智勝佛得阿耨菩提アノウヘツツキ時諸梵天王與宮殿ウツミヤノミヤ但各以衣被ツケ盛諸天花ツケ詣菩提樹ツケ下各以天花ツケ而散佛上ツケ奉ツケ上彼佛ツケ靖轉法輪ツケ文又阿彌陀經の中に又舍利佛弗極樂國土常作ツケ天樂ツケ晝夜六時而雨ツケ曼陀羅華ツケ其國衆生常以清旦ツケ各以衣被ツケ盛衆妙華ツケ供養他方十萬億佛ツケ云云此經の註に數多の説あり見るべし衣の裙に花を入るゝの義にして花を盛る器といふ事を未考へず諸説多しといへども今法華經の心は大通智勝佛の昔を釋迦の説法なり亦阿彌陀經の意は極樂國土にはとあれば淨土の阿彌陀如來の莊嚴の結構なる事を説玉ふなれば釋迦の御在世に花を供する器といふにはあらず甚誤りなり予か社中取る可からず

一今佛家にて寶瓶を用ひ櫛を供し三つ具足にて花を供する等悉 秘傳あり佛神に志しありて花を手向んと思ふ人予が門に入て知るべし是即花道の濫觴にして此故實他門の知る所にあらず

唐土插花の堅證

一天竺の花道唐土に渡り専らに行はる尤佛家にて華瓶花瓶ともに用る事は天竺に異ならず末世に至ては挿花瓶花活花环と稱へて翫ぶ事は我朝にては生花と稱すべし漢土にて花道の行はるゝ事は世人の知る所なり本形の花器は皆彼地より送りたるを我朝にて是をうつし鑄物磁物籠等に至るまで數多の花器を作る竹の花器は我朝の花器なり唐土花瓶の道は袁仲良か瓶史或は張謙徳か瓶花譜又は陳湊子か花鏡等を始として生花の書は數々送れり是皆我朝に流布して是を用ゆ今生花は盛んに行はれ都鄙山島貴賤高下の隔なく至らぬ所もなし茶香花は第一の嗜みとなり然りとはいへども諸流皆本源を失ひ所業を能するを上手といひ形容を調るを生花と心得上下と長短あれば陰陽に委しき人といふ是を倭國の生花といひ三國ともに定る所の掟を知らず異流を以て是とす震且の書は事理に委し花瓶花譜に云々小瓶挿花宜瘦巧一不宜繁雜若止挿一枝須擇枝柯奇古曲斜梟者云云花瓶花史に云瓶中插花止可一種兩種稍過多便冗雜可厭云云花瓶花譜に曰欲挿兩種須分高下一合插儼若一枝天生者云云如此漢土の花の掟と我朝の花の教へと府合する事を今の生花の師たる人決して知らず諸流皆是等の事は花道の忌事と心得て嫌ふは片腹痛き事共なり己が愚昧を知らず恥辱是に過たるはなし日本の生花より唐土の花道の委しき事は分明なれども彼書に譲りて是を略す

本朝生花の由來

一吾邦に於て生花の起原は二神を祭らせ給ふ天種命の櫻を瓶に移して奉らせ給ふより起れり神代卷曰伊弉册尊生火神一時被燭而神退去矣故葬於紀伊國熊野之有馬村焉土俗祭此神之魂者花時亦以花祭又用鼓吹幡旗歌舞而祭云云是日の本の花の始りなり然れば神儒佛とも花を供して先祖の靈を祭る事三國ともに異ならず

一人皇五十二代嵯峨天皇の御宇弘仁年中南都元興寺の護命僧正始て神佛に供する花に規矩を定め玉ふ是我朝の生花の最初なり其規矩といふは眞行草花體五倫圓成圖並眞行草の花體五倫圓成次第亦陰陽相生圖並陰陽相生次第復陰陽晝夜圖式並陰陽晝夜次第等の法式を立給ひしより我朝の生花の元祖と尊み敬ふなり花體は則五體圓成の體にして陰陽相生の次第並圖式を以て陰陽晝夜の次第を教へ天地の間に生を得るもの萬物みな此理に止るといふ事を知らしめ草木の陰陽五行歴然と備りたる花體を象るを假に主令補佐と號けて天工自然の理を明して草木に陰陽五行の三體を四體に象りて常に佛神に供し給ふ是皆花道の奥義にて筆談の及ぶ所にあらず其秘傳あり護命僧正の事は諸國連百瓶之圖に委く記するゆゑ爰に略す

一護命僧正の古義に因らば形の如く主令補佐と四體に象り陰陽五行圓備して片體を以て對花相生

の理を含み五倫圓成する也意味深長にして筆に及ばず大に口傳あり

一人皇八十三代土御門院の御宇建仁年中梅尾明惠上人は護命僧正の教示し給ふ花道の古義に因て是を尊み給ひ積日重日専ら執行し給ふに事理既に足ぬ此人は常にあるべきやう和といふ語を
持て出家は出家の有べきやう在家は在家の有べきやう只何事もあるべきやうと示し給ふは
持前の本心にてつくろはず正道を好み給ふ義にして護命の草木の出生の有の儘天工自然に任せ
て規矩を立給ふを尊みて終に其道に妙を得給ひ古義の四體を受けて今一つを補ひ五體と定て對花
相生眞行草の圖式並對花相生眞行草之次第を定め愈規矩を正しく守り専ら世に花道を弘め給ふ
是當流に立る所の五體古流の生方なり口傳多し

一古へより生花といふは此四體の生方と五體の生方と二つの外なし此二流を以て世に古流と稱す
陰陽五行と三體に生る事は生花の定式なり四體と五體との相違は圓備と兼備の不同なり今世上
に流布する生花は陰陽の沙汰なく假りの名目のみ用ひて道安流と稱して四體に生るもあり東山
流と名付て三體に生るもあり二體に生るもあり利休流遠州流杯と名付て二體に生るもあり何れ
も生花の根元先哲の正意を失ひぬるゆゑ眞行走陰陽五行皮肉骨の本體を知らずする容而已にして
誠の生花にあらず本道の本源を急度守るは古流に限ると知るべし

一護命明惠の高名は世に知る所なり護命僧正はいろはの作者明惠上人は茶の元祖といふ事知らざ

るはなし悉くは諸國百瓶の圖に出すゆゑ是を略す

一人皇百一代後小松院の御宇至徳年中の比に至て茶道大に衰へたりこゝに南都西大寺松月堂英尊
是を引起さんと花道の吟味強く奥義を探りて終に此道に妙を得給ひて草木出生の大意 五輪圓
成の圖 如意寶珠の圖 半月の圖 半月花體の圖 一圓相の圖 一圓相の次第 五體の配當
眞行草花體の差別の規矩を定め給ふ此時より天下一統に行はれ上天子を始め下萬民に至る迄神
佛に花を供し花道を嗜當時世上一統に生花の流行は全く松月堂の餘光なり絶たるを嗣廢れたる
を起し給ふ故に花道の中興開基と尊むなり是に依て當流を松月堂の古流と稱するなり

生花の大意

一佛神へ奉獻の第一は花なり其謂は天地の際に生を得るものの中に人は萬物の靈長にして而も父
母あり尊さものは是に過たるはなし然れども一心廉動して常住のころなく邪曲を専らにして正
直を失ひて草木にも劣れり神儒佛の三道より常に戒め給ひて佛は五戒十善を以て作益し給ひ聖
人は五常を以て人を教へ神は死を惡み生を好み邪を避け正直を求めよとあるは太神宮の神勅な
り源空聖人の歌に

我心池の水にこそ似たりけれ濁り清む事定めなくして

弘法大師の歌に

人多ふき人の中にも人そなき人となれ人人となせ人

蓮如上人の歌に

悪しともよくともいかて定むへきををりかわる人の心を

一誠の心なきゆゑかく詠じ玉ふは皆人に誠の心なき事をいましめ給ふならん

一草木こゝろなしといへども漢土にては秦始皇帝松の誠を感じ給ふ大夫の宮を給りし事世に知る所なり

一我朝にては寛平三年堀川太政大臣薨じ給ふ時上野岑雄哀傷の和歌を詠せしかば此邊りの櫻墨染に咲しとなり

古今集に

深草の野邊の櫻しこゝろあらば今年はかりは墨染にさけ

康頼入道の寶物集に

草木こゝろなしといへども物の哀れを知ればこそ其春斗は墨染に咲今に深草の墨染櫻とて

有と書れしは其頃迄有と見へたり

一筑紫太宰府の天満宮修覆の時飛梅の南方へ振り替りし事は當時の人の知る所なり此梅櫻松は正

直の誠を顯はす事ならずや天を父とし地を母として生ずる草木の誠は人倫の及ぶ所にあらず春夏秋冬の四時を違へず寒暖時候の遅速なく芽を出す時は芽を出し花咲時は花咲實を結ぶ時は實を結び少も約束變せざるは草木の正直なり

一皆人惡を捨善にもとづき邪を避け正直に立歸る姿は身に行ひ頭をうなだれ合掌し口に顯はすと
いへ共本心より改りし證據なければ草木の出生の有のまゝの正直なる天姓の姿へ此方の曲心を
轉じ移して正直に立歸りたるを神佛の御覽に入奉るなり是護命僧正の供し給ふ所の掟なり依つ
て花道は惡心を翻し善心に立歸り正直を導く事は花道の極意なり

一娑婆に於て艶色盛んにうるはしく自然と美體なるものは花より外なし其餘に美しきといふは皆
人の手を以て盡したるものにて自然にあらず人の眼を奪ひ偽り誘ふものなれば神佛に供する品
にあらず誠に美しきものは花に限るべし就中清淨なるもの草木に過たるはなし故に供養の第一
に備るものなり是よりして今來客の節床に向ひ死を生て饗應する事とはなりぬ餘流に此故實あ
る事を決して知る事なし大に口傳あり

一護命明惠英尊の三高僧何れも權化の再來にして在世の不思議等世人知る所なり然れば古流の花
道は凡作にあらざる事分明なり尊むべし仰ぐべし

諸流區の論

一人皇百三代御花園院は松月堂の古流に入り給ひ花術に妙を得給ひて専ら花道を翫び給ひ東山相公へ奥義を傳へ給ふに全く私を用を給はず

一東山殿といふは尊氏八世の孫右大臣義政公なり後花園院文安二年に征夷將軍に任じ百四代後土御門院文明五年に政務を義尙公に譲り東山東求堂に閑居して慈照院と稱し諱天山と號す依て茶香本風流の名貨此時に聚りて文質彬彬たり閑居十八年今の鹿ヶ谷銀閣寺是なり古流の道統にて今末世に至りて名を残しぬ然るに今世上に流布する東山流を見及ぶに區にして流儀定らず後代に至りて作意増長し花道の本源を失ひ相公の高意に背けり

一遠州流といふは小堀遠江守をいふ石川流といふは片桐石見守をいふ古織流は古田織部頭をいふ何れも茶花に委し古代は花道に達する人は皆花道の吟味強く奥義を探り豪味を明らかに妙術を得て其功を後代に残せり然れども今世上に流布する生花を以て遠州流古織流杯といふは残念にあらずや何れも茶道に付て花道に委し當代是等の流れを汲む人の花を見るに細き茶器に太き花を入れて其身本の釣合はり合を以て本を留め是を上手と心得花に定寸ある事を知らず花器に六境八境の口傳ある事を知らず花にて花器を殺す事も知らず唯大きな花を生て人の耳目を驚かす是

當時流行の生花なり此生方にて茶席書院等に用ひらるべきや考へべし何れも古流に入て奥義を極め給ふ其證一にあらす下條に至つて委しく記す尤も名を以て流儀とし姓名を以て流儀とする事は自ら名乗るにあらず其社中よりいひなし或は後代の人誤て名付なり

一近頃東武の人萩原の何某公務に所せられ播磨の國に至り在勤の中遠州流の花を指南す其門人誤て遠の萩原流と稱す然る時は又一流とならんか萩の遠州流と稱せば耳近ふして聞へ易かるべし遠の萩原流と云は童子の戯れに近し此高弟に所持する薄端の花器の箱に遠の萩原流花器と記せしは余り愚味にある也

一筑紫に千葉何某とて東山流を指南す其門人より千葉流と呼ふ此類世に多し遠州石州利休等の稱號も是に唯して知るべし

一千利休史勿論古流の達人に相違なし然る時は古哲を總て皆古流といふにあらす何れも花道に於て名人上手の名を得たる事惣して諸藝とも我流を以て名人上手の名を得る事なし其道に入り能師に隨ひ朝三暮四の暇も惜み寢食を忘れ累年の積心に依つて手練顯れ神も動し鬼神も感ぜしむるの妙あるを以て名人の名を得たり然は古の古哲方は古流の外花道なし我流にもあらす古流の道統たる事分明なり尤古人の書を見るべし花は古流の掟を守り聊かも私を用ひたる事なし尤後代の人は寄り所なければ花道に限らず東山殿利休史の物好にして女の頭に指す櫛笄等迄利休形

あるを以て准知せよ

一近頃東武の人生花と盆畫を指南す此花は人皇五十五代文德天皇の御宇太上天臣良房公を吾邦の花の元祖といへり未考へず然れども花道は公家武家より出さる事分明なり都て他門にては花の達人を祖と心得たるは甚昧の至りなり

一大閣秀吉公の時代迄は護命僧正の四體の生方と明惠上人の五體の生方と此二流の外なし御當代も末に至りて多流と分れ當時は勿論新流多く年々に増加して十流百家異流と成つて分散する事は人皆新しきを好むの謂なり古哲方皆古流の花を翫れし事其證據を掲げていふとも筆紙の及ぶ所にあらず兒童に至る迄耳近ふして聞へ安からしめは利休只一人を以て迷心を晴すべし

千宗易自他の論

一千利休は古流の達人生花の名人といふは常に陰陽の二體骨體の花を生たるゆゑ其名今の世に傳はりて其功を末世に残しぬ陰陽の二體骨體の花を生る人を如何ぞ名人といふや夫陰陽は生花の本體なれども當時流布する生花の師たる人も誠に陰陽の理を辨へて指南する人決してなし陰陽の二體備りたる是を陰陽和合と云ふ天地陰陽和合萬物陰陽和合草木陰陽和合あり骨體の陰陽も萬物自然の陰陽歴然と備りたる花體を骨體二體の生方といふ陰陽に二つあらず萬物一つにして

異なる事なし

一陰陽二體の花は骨體にして走の體なり皮肉の花體は眞行の體也眞行は圓備の花躰草は兼備の花躰なり眞行の花躰に闕くして草の兼備の花體は何を以て兼備するや陰陽五行眞行草の花體皮肉骨の三體等は古流の規則なり是等の理に委しくして自然の陰陽を感得の上骨體を生たる人ゆへ利休は古流の道統に相違なし故に名人上手の名を得たり

一皮肉骨の三體ありて陰陽の花體は骨の體なり骨體とは皮肉の筋をとりて外にもなき質をいふなり皮肉骨には形なし陰陽五行には形あり其陰陽五行より木火土金水と備りて地水火風空の五大方圓三角半月圓形等の五輪を象り莊嚴したる花體を皮肉骨具足の花體といひ眞行草を差別す如斯象筋るは體相用を以て働く事生花の定式也

體相用三大

一體相用三大の事體大とは性の體なり性は氣形なし顯はるゝ時は必ず體をなす此體は萬物の惣體なり此體性縁に隨ひ變生して萬物と成るなり甚口傳あり

一相大とは此相は萬物各相形異なるなり惣して千萬の種類各體に應して其相形異なる也剛健柔弱美陋等皆相形なり

- 一用大とは此用は人影の如く定る體なきものなり用は萬物ともに種々の色あり此色に厚薄あり是は刹那彈指に變するものなり是を用といふなり委しくは秘傳ゆゑ記さす
- 一體相用の三大は萬物の根本陰陽五行の骨目なり陰陽を父母として體相用を具足する時は陰陽五行のづから具成するなり
- 一眞行草の花體は陰陽五行皮肉骨體相用等を能々解了せずんは生ケ得事がたし然れども皮肉の花體は嚴りあるゆへ手煉にて生け得る事もあるべし骨體の生方陰陽の二體は千草萬木皆天地自然の陰陽歷然と具りたる事を一一に識得して唯出生の有のまゝの花體を生るに自然の陰陽に背かす天理に能協ひたる花を生る故に骨體を生るといふ利休茶席の生花は常に此骨體を生けられし故名人上手といふ此故實今の茶人の知る所にあらず

千家生花無法之論

一利休の相傳千家の宗匠生花には法なしと誤て唯何心なく淋しき花を指入れて是を茶方の花利休の傳來抛入と稱して五常の道にも缺たる花を生けて禮服の客を饗應する事失禮の至りなり餓鬼は水を火と見魚は水を家と見るが如く眼闇ければ花道の意味深長なる事を知らずして花には法なしといへり是花道の故實を知らざるなり

- 一花家の生花を茶花に用ひず嘲り笑ふは千家の茶人なり夫茶道の根元は書院に於て掛物をかけ三副一對四副一對五副一對等を以て三つ具足に香を焼き花を生書院飭をして眞の臺子にて客招清するを眞の茶の湯といふ又數寄屋の小座敷皮付の柱に崩れ窓の脇よりにじり揚りいろりにて茶を黙し廉采の料理を食ふて兎角料理は會席の事と風聽して一代眞の茶の湯の茶を吞す眞の茶の湯の料理を食はず眞行草の茶の故實をしらず會席といへば食を食ふ事と心へて會席はうまいと席を食ふ茶人なり誹諧師の風雅といへば發句する事と心得るにひとし恥辱是に過たるはなし
- 一眞の茶の湯は書院に限りて數寄屋は草の茶の湯なり依て利休は常に數寄屋の草の茶の湯の時は陰陽の二體走の骨體の花を生けられし事を知らずや
- 一平人の茶は數寄屋のみにて書院ある事を知らず貴人に隨ふ茶人は都て數寄屋書院ともに預り來客の節は書院飭より數寄屋に至る迄受取勤る是を茶道といふ然れば花も法を以て生る時は書院方茶方の差別尤も第一なり

- 一宗且は再勤して二度世を退る時四疊半を造り又隱と號けて専ら棚物を用ゆ今八疊十疊の座敷にも四疊半切りとて爐を据て棚物を用ゆるは此故實なり尤も東山相公の例を用ひたるか
- 一千家の茶人浪華に並ひなき宗匠予に向ひ花には法なしといへり花家に向ひて茶家より花に法なしといふは風雅を知らぬ茶人なり茶道は俗を離れ禪氣を専らにして心法を納め親しき朋友の交

りを成す事は茶の本意なり然るに失禮の過言許しかたし此心得にては丁度是程の茶人と見へたり榮西明恵の茶を好み給ふは茶に三つの徳有を以て好み給ふ一つには不眠の徳二つには食後に喫して能食を消す三つには不發の徳有事を感じ専らに茶を弘め給ふ

懸物の横豎

一今の茶人は本式の懸物を知らず書は文盲と心得て横物の状ふみを掛けて能懸物と思ひ又客人も是を結構な一軸と賞美するゆゑ懸物の本源を失ひ亦床に掛物を掛ける事は何故に掛けるといふ其故實を知らず唯床には一軸を掛る物とのみ心得たり惜しい哉悲しい哉床を翫ひ物と成したり懸物に眞行草の三つあり懸物に依つて花の生方段々口傳あり掛物の差別大に口傳ある事なり猥に回しがたく門に入つて知るべし

床の由来

一床は往古は床とは言はず押板おしいたなり尊氏の末に香道始り床を用るに付て押板を床と名付て用ひ來れり尤も押板の時は板敷にして疊なし疊を敷きたるは床といへり是傳なり押板に口傳多し先床に懸物をかけて花を生香を燒等都て床傍は皆口傳有事なり此故實を知らずして用る人は兒女の

戯れに似たり

一本式の掛物は失ひ雜物を以て本式と心得て本式の懸物は世に捨てて用す是又口傳多し

一床に香爐三つ具足を置卓を居る等大に口傳有事なり今の生花家茶家の知る所にあらず大に故實有事なり

四十八棚の式

一書院に四十八棚あり此棚にそれ／＼の傍方あり是を書院傍とも床莊りとも云ふ此棚莊りより茶方の棚物の花方も出たる也、惣して書院の床棚等の委しき事は古流ならては知れがたし故實方諸禮方にては奥義は古流の花家に譲りて委しからず門に入りて知るべし

四十八棚 目錄

通	棚	遠	棚	通	遠	棚	二重	遠	棚
三重	遠	棚	落	遠	棚	仕切	遠	棚	冠
上	下	棚	函	木	棚	屏	風	棚	西
卓	棚	鳥	居	棚	大	西	樓	棚	(大橋棚とも云ふ)

嶋	扇	子	梅	柳
棚	子	棚	棚	棚
櫻	藤	棚	楓	松
棚	棚	棚	棚	棚
菱	雁	棚	千	櫓
棚	棚	棚	鳥	棚
向	通	向	幣	二
棚	棚	棚	棚	階
局	手	高	鉤	具
棚	棚	棚	棚	足
假	粧	立	書	草
棚	棚	違	物	紙
籠	守	折	上	大
棚	棚	込	棚	輪
次	第	御	重	重
棚	棚	膳	々	違
吳	服	己	神	佛
棚	棚	上	祀	守
		四	棚	棚
		十		
		八		
		棚		

是を加へて五十棚あり

一千宗易は恐れ多くも勅命を蒙り奉りて絶えたる茶道を再興し天下に弘るに付て故實を正し書院四十八棚の莊り等の奥義に渡り先哲の茶意を探りて茶法を立るに付て無法の花を生くるべきや鑿みるべし

挿花故實集中

千利休當時の千氏生花之相違

一利休自筆の書の中に月の輪を切るべからず釘穴を隠すべからず花窓より出さる花は生ぬべし釣舟は出船入船泊り舟の三つの外なし是皆古流の掟にて他家の知る所にあらず此故實を知らずして猥に抛入と稱して無法の花を入る時は利休の此書は無益なるべし

一利休は陰陽の二體の骨體の花計生たるにあらず既に山崎の妙喜庵におゐて秀吉公一客一亭の茶の時妙喜庵一盃に糸櫻を生て主客ともに此花に障らず一席を勤められし事時の人は是を賞せざるはなし然れば茶席の花は淋しさに限るにあらず花の厚薄は臨機應變ありて皮肉骨は何れを用ひても苦しからず

一千家に廻り花といふ事あり法なき花を生るに廻り花といふ法は何を以ていふや夫廻り花の法式は初めに生る人規矩を正して無用の枝も助け花體の崩れざる様に生置たるを次に生る人は規矩を崩さず質計を易て形容の働さあるを廻り花の所詮とす又次に生る人も如斯茶家の廻り花は花家の眞似をして生る人も見る人も讚る人も笑ふ人も皆無法にて廻り花の故實をしらす

一千家の法も規矩もなしといひて花器には六ヶ敷法ある故千家の宗匠より門人に出す竹の花器は謝寶金子千疋と定め又一家には五百疋と定る事無法の花を生る器には餘り高直にあらずや無法の花を生る器なれば無禮無報にて然るべきか其外生るに付て道具の寸法の規矩を糺して花臺あり水次あり小刀あり薄板あり丸板あり此道具皆定る所の法式あり無式の花を生るに付て嚴重の法式を道具に定め器に定る事は全く金銀をむさぼるにあらずや恥辱是に過たるはなし恥すべし

一近年の如心齋といへる茶人薄板に又格別の法式を立蛤羽の薄板には倭物を置矢筈の薄板には唐物を居る予是を極むと書せり無法の花を生る爲の花器を居る薄板に如斯法式を立る事何面目ありて定るや己が愚昧なる事を風聽するか薄板の故實を知らず花臺と心得たるならん薄板の用ひ方も知らぬ茶人なり今の千家は花臺花盆薄板の三つ混雜して取扱ひも知らずして如心齋餘りの過言なり尤無法の花を生て花器の類には法式を堅くする事は花道には愼成法式ある證據なり是にて准知せよ

一竹の花器は花窓の内に六境の割を以て後を三ヶ一残す事は往古よりの寸傳なり然るに利休發明して初めて四ヶ一の法を立たり是利休にあらずんば他人の知る所にあらず古哲方も當前の理に協ひたる事ゆゑ尤と感得して其後は諸流四ヶ一に定めり當流も此一と墨は利休に循て此時より

四ヶ一と定めたり此故實は茶人の知る所にあらず甚口傳有事なり

鶴齡の花生は利休初て割出したる器なり然れども千家に此墨を決して知らず尤世上に鶴頸といふ花器あり千家も同様に是を用ゆ利休の鶴齡とは甚相違なり此寸傳は古流と細川家にあり予壯年の時筑紫に下向して専ら古流を行ふに折節肥州熊本にて此花器を見るに甚不審なり千家にもなき鶴齡を田舎にて見る事心得ずして作者を問ふに尤成かな利休切腹の時三齋公名残を惜みて暇乞に御出有しに利休は待兼袖の中より茶抄を出し記念に渡しける其時三齋公言置事なきやと仰せあれば利休泉州堺表に壹人の甥あり若年にして心元なし何卒養育下されかすと願ひに依て國本に速れ下り茶道に取立知行三百石を給り今日に存在して増々盛んなり名を古市と給りて歴々の茶人なり然は三齋公といひ古市氏といひ急度利休の道統にて花器の寸傳も此家に傳りて鶴齡も此古市氏の作なれば斯も有べき事なり余是を知る事全く遠行の徳なり然る時は此寸傳は當流と細川家の外なし

抛入の稱號

一生花を抛入と稱する事は太閤秀吉公相州小田原の陣中に於て水無月の頃暑氣を凌ぎ兼て廊下の邊りに盥様の器に水を湛て朝夕是を見玉ふに折節前裁に後れし燕子花の漸一輪咲残れるを利休

に命じて生よとの玉ふに利休庭にをり立指添の小柄を抜燕子花一莖に三四葉を取添小柄のもとに一葉を以て結び付立ながら盥の水中へ投入けるに水底にざんぶと立て水の玉散りて花葉に止りけるに殊に冷しかりければ唯今投入能も入たりと太閤感じ玉ふ満座の人も是を賞しけるより抛入いかにたと常にいひけるを誤り來りて斯いふなるべし只幾度も生花と稱へる事甚意味ある事なり然るに抛入何と題號したる花書數多あり又三都には抛入指南と門口に表札したるもあり是皆生花と稱へて故實有事を知らず

一我朝にて生花と稱する事は花器は大地に表して地中より草木一本自然と出生したる其儘を生なし草木の有のみ、野生の其儘を生成す故に追々生長しておひたつといふ義味を以て生花と稱るなり總て生成すに付ての口傳又は生成しての口傳秘傳等は生ひ立つといふ義に付ての事なり故に諸流とも出生を糺す事は生花の定式なり依つて生花と稱する事推して知るべし尤文筆を飭る時は插花とも瓶花とも活花とも書すれとも文字は何れを用ゆともいけ花と稱ふべきなり是吾邦の故實なり甚深意あれども秘傳ゆゑ記さず

竹の花器の由來

一竹の花器は利休初て切り出したるよし千家の茶の書に見えたり又花家よりも證據をあげて大名

高家方に所持の花器を數々圖を出し利休を最初の作者と紀せる書も數多あり證據をあげていふは愈己が文盲を風聽するにあらずや恥辱を天下にさらすか東山天山公の物好にて昇龜の花生あり洛陽東山双林寺の内に勘阿彌といふあり當寺第一の寶物にて今に重寶せり是皆世人の知る所にして此寫しの花器専ら流布する事は言ふに及ばず時代の相違もしらず花器は何を以て初めしといふ故實もしらず其職分にて是を知らざるは無面目心外にあらずや

一竹の花器は明恵上人より始めり此上人は博學多才にして別しては悉曇しつだんに委し春日明神梵僧と化して夢中に悉曇の深義を授け給ふ故に上人渡天の志し深かりしを春日明神止め給ふに由て志を遂げ給はざりしか又其後思ひ立給ふ所に春日明神御詫宣あつての玉く我無量功より以來一切の佛法を守て一切衆生を度せん事を誓ふ依て智行僧寶を加護する事影の形に隨ふが如し然るに此比丘明恵房程の僧異朝にも希なり況や我朝に於てをや乃至渡らは豈歸る事を得んや若我心を破つて進發せば本意を成就すること有へからずと云々長々と御詫宣あつて止め給ひしとなり爰を以て言は上人と利休と同日の論にあらずや程の大徳花道を弘め給ふに付て竹の花器を切り出し給ふなり勿論茶の元祖なり花の元祖なり然し茶と花とは車の兩輪の如く離るゝ事ならず惣して花器は竹に限らず悉曇に疎き人の知る所にあらず此故實をしらずして今の茶人猥に花道はなきものと嘲り謗るは片腹痛事共なり

一竹の花器も古人の作意を用る時は其數かぞへがたし然れども明惠上人は悉曇より象體して花器の寸傳を定め給ふより始れる事なれば作意の花器には象體なし象體なきは古流に用ひす仍て竹の花器は二十六品と定め是皆象體あつて慎成花器なり此分は古流に用ゆ尤切方寸傳の卷象體の卷此二卷傳へざる時は花器を切る事能はず利休宗偏等は象體に委しくして花器に妙を得たり庸軒遠州等も劣らぬ名人なり

一古人は自ら墨をして自ら切りたる證據に名印ともに居るなり今の茶人は職人の切たる花器に自作といふ名印を居る事人を偽り侮る似たり茶道の本意を背く事をしらず書畫等にも疑筆に名印を居へきや惣して名印の居りを考へ眞疑を分つ仍て重寶とす故に古人の花器に格別に手際宜敷はなし今の茶人の花器は職人の細工ゆゑ甚手際宜しくして見事なり當時の茶人は花器の墨を知らず只竹を見立て筆を持ち先上下に一寸墨を付次に花窓に墨を引て其儘職人に渡す是皆目分領にして形容のみなり決して寸傳を用る事なし又古人の花器は第一象體に叶ふや叶はざるやの義を考へ寸傳に聊も私を用ひず故に自作に相違なき證據の爲めに名印ともに居る當流も自ら切りたるは名印を居て墨計を望まるゝ時は決して名印を居る事なし都て書畫を始め諸道具に至るまで位を用ゆる故に尊しとす茶器にも目利第一の心得は先其器の位を定め次に地性を極む本釜物には本釜の位あり脇釜物には脇釜の位なり竹の花器も予が截りたるには予が身分相應の位備は

り職人は職人の位なり惣して書畫とも尊み用るは其人の徳を用るなり其徳を用る人の其徳相應の位備れり竹の花器も尊み用るは皆徳を用るなり今の茶人は此故實をしらずして職人の花器に名印を居る事片腹痛き事ともなり

眞行草の竹の花器

一竹の花器に眞行草の三品あり眞の花器には四大具足す四大は地水火風の四つなり是眞行草通用の花器也行の花器には三大を具足す三大とは地水を具足して火風の二大いづれにても一大缺て不具成をいふ是行草通用の花器なり眞の花には用ひがたし眞の花器には水火の二大を具足して陰陽の二つを象る仍て眞行の花には用ひず大に口傳あり筆談に及びがたし

一置花器は **礼** 字の表形にして地大に象りて又四大を具足す是 **礼** 字の表形にして俗家に知る所にあらず此義昧に依て中に掛る事を禁す利休宗且等の花器に此置筒を中に掛る釘穴あるをまゝ見及べり是皆僞物なり從令名印あり共用ゆべからず

一懸筒は **礼** 字の表形にして水大を象るゆゑに中に掛る是陽なり故に地に居る事を禁ず他流に獅子口の形又は二重の形にして置筒有決して許さず教へて象體ある事をしらず障子垣越しに聊の切方を聞て是を花器の寸傳と心得より混雜して分らず

竹の花器目録

一置筒六品	尺八	一節切	二柱	二柱二重
橋杭	鉗			
一懸筒十四品	眞獅子口	體直獅子口	體直乙御前	大黒
旅枕	鯨鯨	壽老	鶴齡	
大二重	小二重	節長二重	霍齡二重	間拔二重
猿猴二重	節長二重			
一竹の船六品	杏船	渡海船	油指船	丸太船
渡し船	寶船			

以上二十六品なり、昇龜を加へて二十七品なり此外他流に切違砧或は京極道譽の目籠船といふあれとも餘りに作意過て儀味に協はず故に古流に用ひず

竹の花器寸傳

一竹の花器を切るには先竹の太さ一尺あれば惣丈も一尺と定め其上の長矩屈伸には秘傳あり先是

を四方に直すといふ尺八なれば四六に節を居へ節より上を六寸下を四寸と居る事定式なり一節切は直中に節を居へて上も五寸下も五寸なり尤尺八は四六に節を居て上下とも聊も動く事なし又一節切は上下へ節を送り少しづゝ動く事あり動搖に口傳あり一節切は他流にて一重切或はすんど切杯といふなり

一獅子口も竹の太さを惣丈と定めて眞の獅子口は節三つ籠て此惣丈を三つに割一つ分の内にて月の輪を八分引て残る所の寸を花窓とするなり又花窓の後ろは竹の太さを四ヶ一に割て其一つを残すなり往古は三ヶ一残す事定寸なれども利休より四ヶ一と定るなり是に付て甚口傳あり月の輪の節は只一ト打に打拔し儘にして形に構はず其所以は月の輪を天に象り天に一分の缺有事を表す故に唯無我無心に抜なり是又口傳あり今の茶人は此月の輪の内を小刀にて美しくくり抜なり夫月の輪は風大に象りまた天に象り或は日月に象る何れにても小刀にてくるといふ義味なし千家の茶人は此月の輪より花を拔出して生る事あり夫が爲めにくり置か然れども天に象り風大に象り日月に象りたる時は花にて天を貫き日月を貫くなりいかに無法の花を生るとも月の輪と稱へながら花にて貫く事童子の戯に異らず是また長短屈伸は切方の秘傳なり

一釘穴は小判形棗形といひ傳て今の釘穴は誠の小判形なりと心得るなり大に誤れり裏にてはア字の空穴の蓮實を象るなり表にては蓮の苔の形なり尤も小判形と蓮實と符合する事有小判形と

教へたるは深意ある事なり蓮の荅は寶珠の形なり寶珠の形は一心に表して折釘にて床柱の中に掛るにしつかりと動かざる義なり今の茶人も生花家も皆此故實ある事をしらず大に口傳あり一尺八は孔字の象形にて五大の中の地大の阿字なり依て掛筒にはせざるなり此花器は本來無一物の本體なり然れども四大具成の體なり又阿字の字表は東なるに依て東方面と定め主客を分つ等の極秘傳あり只八境に割て陰陽の座を明けて残る六境に主客を分つて眞行草の座を定むるなり是に又重々義味あり口傳

一獅子口字の象形にて五大の中の水大の縛字の象體なり縛字は陽なる故に地に居る事を禁ず此器の惣輪と口と合して陰陽を具し方圓三角半月の割を付る等蓮實を釘穴と名付て一心に表する儀悉く口傳あり口は三ヶ一殘して前を三つに割れば六境となるなり三つに割れば四方の割となる方は地の形なる故に萬物地を母として生ずる事を表はすなり惣體の圓形と方の角と合して陰陽不二を表示するなり奥義に秘傳あり此阿字縛字の表形は甲陽百瓶に圖を以て委しく記する故爰に略す

一此二十七品の花器悉く寸傳別にあり花は活物なる故に陽數を以て一瓶を取組み花器は地に表する故に陰數を以て切立る事秘傳也

一惣丈を四方に直すといふは惣して花器は地大の阿字を象る時は本と四角なり故に竹の太さを丈

ヶに直し太さと丈ヶを同寸にして是を開く時は四角となるなり然るに丸き竹を好みて用ふるに甚義味秘傳有事なり當時の生花家又茶人等決して此故實ある事を知らず阿字縛字の深意成事は顯密の兩宗悉曇道に入て委く尋ぬべし

華瓶寶瓶花瓶の差別

一寶瓶は天竺にて七寶を入れて佛に供する器なり皇國に渡りて花瓶と號けて一本の檜を供する事天竺の古義を守る故なり

一是も四大具足の器にて花器の本體なり象體に口傳あり尤密教にては種々の花瓶あれども花道に用る器にあらず

一三具足に添ふたるは花瓶といひて是も天竺より渡りたる器なり尤三つ具足ともに渡る竹花器に耳付と耳無の二品あり耳なきは孔字の表形にて地大に象る故に四角なり因て四方に四筋の筋を立て外は四角の形を顯して内は丸し是生花の眞の花器なり象體に甚秘傳あり

一耳付の花瓶は字を二字合體の形なり縛字は水大に象る故に陽なれども二字合成する時は陰陽合體する故に地に居るなり耳は二字の空穴の蓮實を兩方に付る故耳と成なり往古の花瓶は象の頭より鼻を垂たる形を耳にして此外なし象は天竺の獸ゆる天竺より渡りし器に象の頭あり此

故實を以て唐土吾邦ともに耳は象頭なり然るを當時の沙門此故實を知らずして鯉の瀧昇り瓢か
 ら駒の出る形など己が慰ものとなれり
 二如此象體ある器を本形の花器とす鑄物磁物籠等に至るまで象體なきは作意の器にして用ひがた
 し象體あるは時代作者ともよろし賣買にも此象體あるを高直にして尊しとす他流の生花會或
 は茶席等を見及ぶに此故實を知りて用る人至て希なり

釣船の花器

一古來より釣船の花器に四品あり

渡海船 平舩船

此二品は海船なり

丸太船 瀬來涯船

此二品は河船なり

一名の付たる船に七品あり

龍船 龍頭船

荏船 瀬戸船

蟹小船

御法船 桂船天の川の船ともいふ

是等船に口傳あり

一往古より船の紋に九品あり

龍 唐鳥 高浪

魚

貝

藻

雲

唐草 蓮華 等なり 此紋によりて生方に口傳あり

一花體に象る船具十六品あり

檣 櫓

櫂

楫

舵

櫓

打鉈 亂波

合渡

千量力

味方鉈

鯛貫

万字鉈

留指舩 調子木 等なり 能々見覺へて象り生成すべし

一舟は心といふ字の表形にて楫は加持の儀味なり至て深意ある事也大に口傳

一船の花生方は

眞帆片帆櫓櫂竿錠筥等の生方あり其外船具にて見立て生る事筆談に及ばず

一舟の花には出舟入舟泊舟此三つあり晝夜の心持あり海舟川舟の差別あり口傳故記さす

馬盥生の事

一馬盥に花を生る事は太閤秀吉公相州小田原の陣中にて花を得玉ふといへども花器なく利休に命
 じて生方なきやと仰ある時馬盥に轡を以て生られしに席上の興を催し秀吉公大に賞美し給ひし
 より始めり是作意とは云ひながら廣口生ある故に器と花留の相違のみにして用るとも誤りあら
 す又廣口はもくぞくの故實ありて佛家の花器故床にあけて苦しからず馬盥は床に上る事を禁ず

然れども備前の一國に限りて太閤の嚴命に依て床に上るといふ甚非なり是皆廣口生の故實をし
らざる故斯誤れり大に差別口傳ある事なり予が社中取べからず從令食器にても轡を遣ふ時は馬
鹽生と稱する故床に上げずと心得べし

花配の事

一花配と名付て花器の内に一本の花留を遣ふ事は後花園院より東山相公へ御傳授の花の時思召す
様に花留らず其時御傍に有合倭琴の柱を以て花を留給ふより花配りと名付て横に一本遣ふ也故
に據なき時は一本の花留を許すは此故實なり尤本式にはあらずと知るべし然るを諸流常に花配
りを用ひ二本三本或は何本にても苦しからずと許す流儀もあり當流には此故實に依つて己事を
得れば一本遣ふとも不斷に用る事を許さず又ある流儀には花配りには木槿の枝に限りて用ると
いへり甚愚なり若限りて用る時は柳なるべし倭琴の柱は柳なり因て柳を用ると云は亦可なるべ
し木槿に限る其所以なし是皆花配りの故實をしらざるなり

草木の陰陽は天地の陰陽

一天地の際に一つの理あり形なし空なり此理感じ動て氣と變す氣又形なし陰氣昇て陽なり陽氣降
て陰なり夫天地開けざる時をさして大極といひ無極ともいふ其無極とは聲もなく形もなし陰陽
五行も一ト渾然にして何とも分らざる時を無極といふ其無極の内に一理あり此理一度は動き一
度は靜まる其靜るを陰といひ又動くを陽といふ喩へば水と浪との如く風來て松に聲するが如し
理は浪なき水の如く、大海水の満々と湛へて氣は大浪小浪の立て開敷成が如し此氣は形なけれ
ども歷々として有が如し氣が動けば風が吹なり此間を乾坤未分といひて天地と未分れざる時な
り理は天地の間に満々て昇りも降りもせず散りも集りもせず此氣は動くにより昇りも降りもす
る散りも集りもするなり様々に變して雨をふらし風を驚かし火を起しかみなり雷と色々の事を
成すは唯此一氣の所爲なり此氣至らぬ所もなく火の内水の底金石土瓦粟一粒の内にも入大磐石
の中へも通ずるなり一氣動て靜る時を陰といひ陰又動き出るを陽といふ陰陽一平に動き靜り
陰陽二つの名はあれども不二にして唯一なり春夏は陽にして萬物の氣皆昇る故魚は春夏は川上
に遊び秋冬は川下に遊ぶ萬物皆是に順して知るべし

一氣は天に有時は寒暑燥濕風の五運にて寒は水の氣なり暑は火の氣なり燥は金の氣なり濕は土の
氣なり風は木の氣なり此五運地に有て水火木金土となり象既に顯るゝなり此氣と象と相感して
萬物を生して萬事となる是吉凶の根元なり

一此氣動けば陽靜れば陰是陰陽和合なり此和合の芽を種子として森羅萬像と成此芽天真といひ天

性といひ根元は乾坤未分の一物なり喩へば一と年の始めを正月といふが如し正の字は一つに止ると書て草木芽を含むの時なり實誠を孕むといふをを芽含といひしは玄々微妙の沙汰なり故に天真は陰陽二つの眞を顯すの名なり萬物地中より産出し夫々の質を具足し品を分ち萬物を撫育し生々世々の父母は大天地なり此故に人倫の父母を小天地といふなり

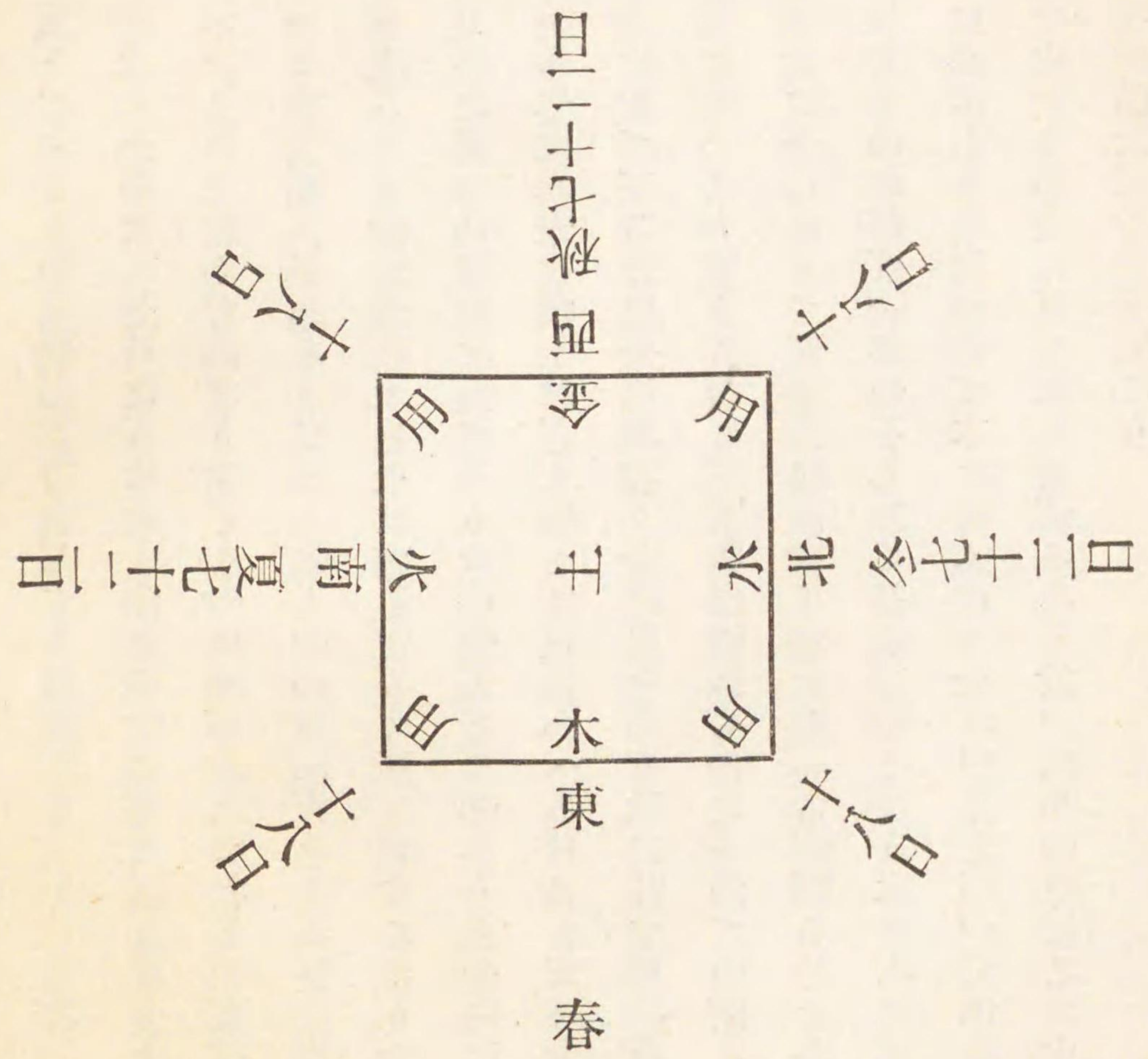
一此陰陽の氣清るは昇りて天と成濁は降て地と成此陰陽の二氣合ふたり變りたりして又水火木金土の五行を生し此陰陽五行めぐり流れて止む事なき事土圭の如くにして春夏秋冬の四時を司行是より陽の徳を名付て乾といひ陰の徳を名付て坤といふ其陰陽五行の氣の精妙なるもの合結んで乾は男坤は女となる是を天地人の三才に結びて人といふなり

一人を萬物の靈長といふは人の字のノ、陰陽和合して左は陽點右は陰點となり此二氣和合するを陰陽合體といふ水火合點の字を人といふ人の字ひとといふ訓を設しは日は日と共に行ふ名なり日は火なりとは水の訓なり従へば水をともへと訓し主水をもんと言が如し

一此二氣陰陽ノと交り感してより段々萬物を生して其内に陰陽五行の純粹の氣を得て形を成す物は人なり濁りたる氣を得て生するものは禽獸草木色々のものと成なり是迄を造化といふて人も萬物と自然と成り出る事なり扱夫々に形を受より人は男女と交り感じて又人を生し鳥は雌雄交りて亦鳥を生し獸は牝牡感じて復獸を生す是を刑化といふなり

一天地の二氣昇降の形體結んで五行にして六氣なり又此二氣三氣となれば六氣となる八氣となれば廿四氣となる是天地萬物の形質交易する所以なり

一五行とは木火土金水の五つなり木火は陽なり木は春火は夏なり木は東を司りて春に旺するなり木はものにふれて動くものなり動くものは陽なり水は北より東へうつりて木を生るなり是水生木なり春は陽氣動き始めなり日は火なり木の内に火を含み夏に至て甚あつきを火と定め夏の火は木より生るなり依て春は木也火は南を司りて夏に旺するなり木を求めは火を生ず是木生火なり金水是陰なり春の陽氣は動て昇り火の性もとる春より夏の終に至る迄陽氣極て早氣か秋は下へ降る花も春は木末に咲上れども極ては根にかへる日月も天の半へのぼれば早西へ下る夏の日火漸く秋に成て下る時は金に取なり金は西を司り秋に旺す砂をゆりて金をえらふ是則土生金なり金は重きものなり重きものは下る陽は輕きものなり仍てのぼる程上つて老すれば重く成て早下る故に秋は金に取りて萬木きはみ落て根にかへる氣靜る時を冬といひ水に取るなり水下つて卑き所に溜ものなれば一年のそこにて是水に取るなり水は北を司つて冬に旺す金生水の道理にて何れは必水あり東に流れて木を養ふなり土は中央を司つて四季の土用に旺す萬物を生して又土に歸す火は土の故に夏の末に長ずるなり故に四季の中にこの土用は別して人の痛む時なり是火生土なり已上五行の所生なり



一木も朽ぬれば土となる故に春の末に十八日土を主て土用なり火も消て灰に成灰は土と成故に夏の末に十八日土を主て土用なり金もくさりて土と成故に秋の果に十八日土を司て土用なり水もかわきぬれば跡は土なり故に冬の果に十八日土を司て土用なり木火金水の四つ皆土より生じて火も土にあり富士淺間何れも大山の焼るは土の内に火ある故なり土用合して七十二日なり萬物皆是に准じて知るべし

一陰極て陽となり陽極て陰と成時陽は天なり陰は地なり此陰陽分るゝ時の形は如意寶珠となりて二つに分るゝなり寶珠の象は○是也大極無極といふ時の形は一圓相なり一圓相の象は○是なり此一圓相の形より陽氣昇る時陰に形を成す其陰の形は∧此陰なり又陰氣下る時は陽に形を成す其陽の形は∪斯の如し此二形和合すれば寶珠なり陰陽和合の形にて上の角形は陽の芽下の圓形は陰の芽なり此形より乾坤と二つに分れしなり萬物皆天地陰陽の氣を感じて生ずる故に上人間を始め鳥獸草木に至る迄皆此寶珠の形を受けざれば生を得事決してなし

一人も始め母の胎内にやどる時の形は寶珠なり夫より陰陽の芽ありて女子は父を愛する故背きて外を向き男子は母を愛する故に内に向なり是陰陽の芽なり鳥類畜類虫類魚類に至るまで皆寶珠にてやどるなり眼前に玉子の形を見るべし是即寶珠なり虫類魚類等皆寶珠なり故に玉子といふ此玉の字は寶珠形より出たるなり是に準じて知るべし

一草木も亦如斯果實の類皆寶珠なり尤其品にて寶珠の見立に口傳あり實の内に仁といふあり割て見るべし仁は悉く寶珠なり又仁の内に早二葉を具せり此二葉も又寶珠形にして合體す是皆陰中にて陽の芽なり寶珠は陰陽和合の形なり菓實皆陰陽合體の形なり故に芽を出し年々生長して大木と成其始めは寶珠なり扱未生より年々生長は陰生して陽を生し又陽生して陰を生し幹莖は陰葉は陽花は五行なり萬物皆陽陰五行〳〵と年々歳々相續す如此出生して五輪五大と象りて是を五體の出生といふ人間の五體も草木の五體も形に替りなし明惠上人の五體の生方も此五體の生方なり如斯五體と生して又總體の形は寶珠なり其品にて寶珠の定め様に甚祕傳あり

一禪家の祖庭事苑第四卷摩尼珠注曰此云無垢光又云離垢云々是則如意寶珠の事なり

一佛經の中にも法性眞理の喩に至ては必ず摩尼珠の如しと説給へり

一增長論云摩尼珠多在籠腦中一有福衆生得之又名如意珠一常出一切寶物衣服飲食一隨意皆得此珠一者毒不能害火不能燒或是帝釋所執金剛也與脩羅鬪時碎落一閻浮提一變成珠云云如斯經釋に説ありといへども譬喩の説にして凡慮の及ぶ所にあらず今云ふ所の寶珠は眼前の理を明く寶珠を成さざるもの生を得事決して協はざるの儀を正し萬物一にして二つなき事を知らしむ寶珠に重々祕傳あり筆紙の及ぶ所にあらず門に入て知るべし

陰陽相剋

一陰陽〳〵と和合して其陰陽又相剋す剋はかつの訓にて水は火にかち金は木にかつの類なり強きものは弱きものにかつの道理なれば木の根か土に入是木剋土なり

一堅きものは柔かなるものにかつ故堤は水をせき止る是土剋水なり

一陰は陽を消すゆゑに水は火にかつ是れ剋火なり

一火の多くもゆるは至て堅きものにかつ故に金をとかす是火剋金也

一至て堅きものは又堅きものを制て金は木にかつ是金剋木なり已上五行の相剋なり

五輪圓成

一陰陽五行具足して萬物夫々の形を成其形質に又五行あり地水火風空の五大なり識を加へる時は六大とす然れども今は草木の陰陽五行は天地の陰陽五行なり萬物一にして五大ともに備る儀を演るに付て草木には識なきゆゑに爰に略す此五大象體して生を保つ死する時は五大離散す五大即五輪なり地は□四角なり水は○圓形なり火は△三角なり風は☾半月なり空は⊖圓形なり此五輪萬物の象體なり故に人の體を五體といふ草木の形容も五體なり生花は諸流皆出

生を生るといひ野生の其まゝといふは是等の陰陽五行五輪五大の歴然と備りたる出生の其まゝを生成して是を生花といふ然れば天地の間に生を得るものは人も鳥獸も草木生は一つなり聊も替りなき所を生成す故に出生の其まゝといふなり他流は口に出生といへども形容のみにして如此の出生有事を知らず此草木の出生を知る事は先地の歩行陰陽の交形内外に交經して長短出生の實は晝夜を分つ陰陽の正氣なり性是を成すにあらざる是を陰陽の道なり亦陰陽晝夜を成すにあらざる順逆昇降の形象なり長短出生は陰陽の長短晝夜の長短出生なり長短出生なくば萬物不生なり此陰陽をしらざるものは己が出生もしらず先己が出生を知らずして草木の出生を知るべき也他流の生花に出生なき事是にて推知せよ花道の故實ある事の深意是に准して知るべし

陰陽五行花體の差別

- 一 利休の生方陰陽の二體は此陰陽の二體の生方なり今の世迄も此花形残りて二體の生方を利休流といふ然ながら唯淋しき事のみ残りて規矩は失せり
- 一 當流にても奥義は陰陽の二體なり然れども初心の及ぶ所にあらず花道の意味深くなる所は此陰陽二體の花體にあり累年の功積されば識得しがたし
- 一 遠州公石州公の生方は陰陽五行の三體の生方なり然れども其流儀を立る人の花を見るに陰陽の

二體と心得て皮肉の花を生け只形容のみにして故實ある事を知らず

- 一 陰陽五行の三體に象る事は我邦の生花の根元なり諸流一統の規矩にして此外に生方決してなし
- 一 陰陽五行の三體は前に委しく記するが如し又天地人の三才も陰陽五行の事なり人も此三體備りて方圓三角の三つなり人の頭は丸し腰は四角鳩尾は三角に具るなり鳥獸草木まで此三つは皆具足せり

一 護命僧正の生方も此陰陽五行の三體を兼備して四體なり

一 當流の生方も陰陽五行の三體にして陰中の陽陽中の陰顯はれ兼備して五體なり是則水火木金土の五行を具して地水火風空の五大と象りて五輪具成の體なり

一 立花は天笠にも唐土にも是なし生花の書は數々に渡りて我邦に流布すといへども立花の書の渡りたる事を未だ聞かず日本のみにして異國になし我邦にても甚近きものなり花體は生花に異ならずといへども形七體に顯れて圓備の體なり生花の趣意とは雲泥の相違なり生花は草木一本の本體なり立花は野山岡水を一瓶に取組事故論に及ばず

插花故實集 下

陰陽者諸道の根元

一陰陽は諸道の源にして其理分明なれば是道の達人なり何れの道に寄るとも陰陽に疎くして其功を成す事なし尤諸道ともに陰陽の理を明らむる事は極意にして初心の及ぶ所にあらず勿論何れの道にても陰陽の理のみにして空なり依て諸道を學ぶに付て陰陽の理を明らめんと思はゞ先此花道を學ぶべし花道の陰陽は廣大にして而も知る事易し非情の草木に自然の陰陽全備したるを知る時は萬物の陰陽を知る事至て安し萬物の陰陽分さる時は草木の陰陽猶分らず然りといへども當流の花道は初心より陰陽の理を正し又形質を以て是を備へ始中終の稽古は唯陰陽の理を探るのみにして生物を以て陰陽を學ぶゆゑ是を知る事花道に過たるはなし

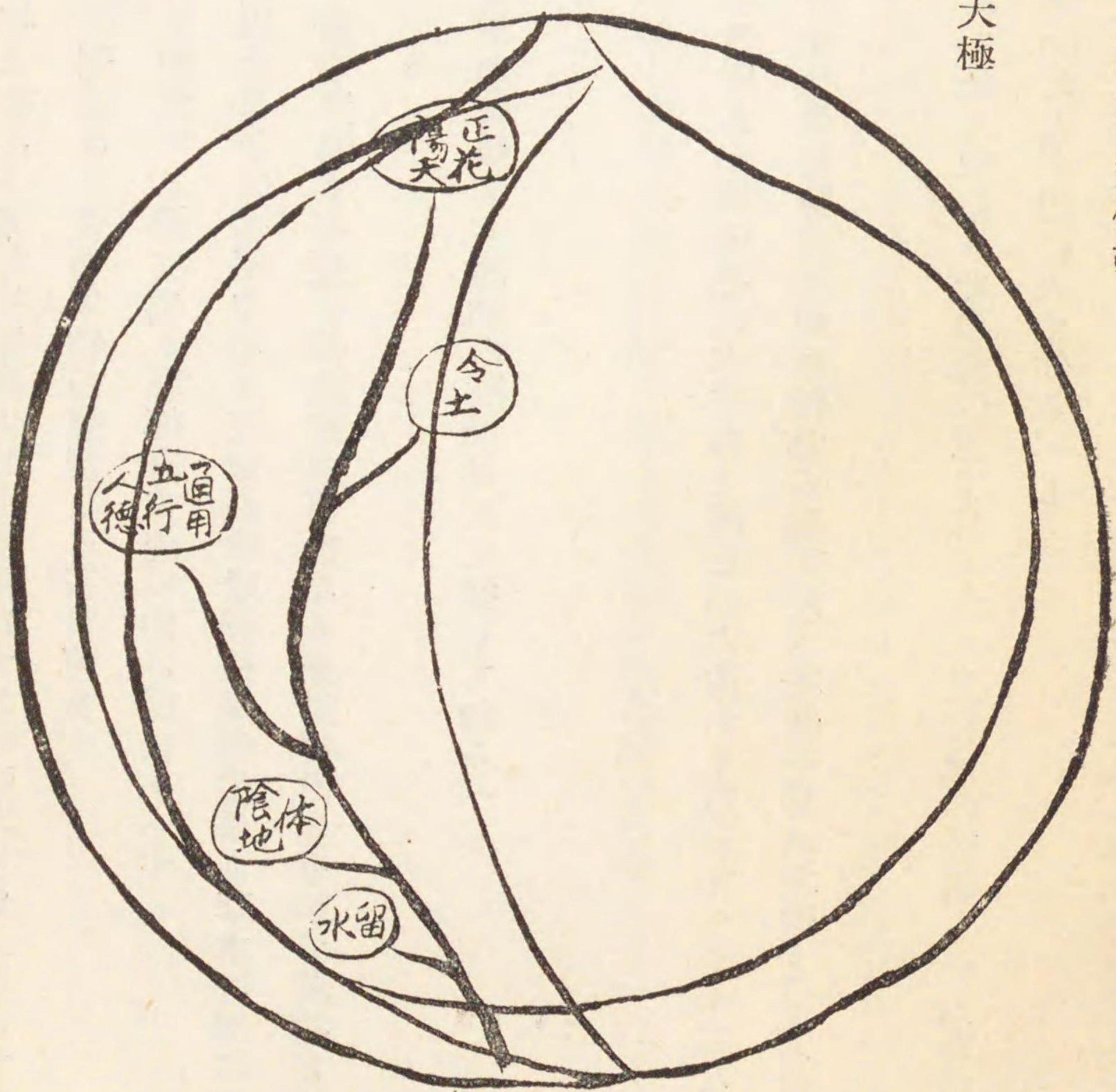
花體五體の假名

- 一正花 陽天 相令 陽中の陰中央の土 通用 五行人徳 體 陰地 性留 陰中の陽水
- 一五體の假名並象りは甲陽百瓶に圖を以て記すといへども猶其落たるを拾ひ一圓相の圖を以て草

の花體を委しむ然れども直行の花體は秘傳故筆談に及びがたし

- 一一圓相は乾坤未分の體なり是大極なり圓形は陽の體方形は陰の體なり花體に象る半月は方にして陰寶珠は陽に象るなり大圍圓相は陽半月の花體は陰是を合して陰陽不二なり

一圓相の圖



- 一如意寶珠は財寶にして福なり圖相は智なり是福智圓備にして皆具足するの體なり此二種は世の第一の財寶なり如意寶珠は花體の惣體なり是則萬物の惣體なり甚口傳あり
- 一五大形を片體に象ると横に五行を配當する等は悉く秘傳有末流の知る所にあらず
- 一長短出生等肝要なり萬物皆長短出生なき時は不生なり天地の陰陽皆長短出生なり草木は別に動く事なし長短ある時は是草木の動く形なり長短の形陰陽の形則なり此長短出生を以て萬物ともに年々成長するなり
- 一日月は則陰陽なり則晝夜なり晝夜則長短なり萬物の陰陽是にて推して知るべし

皮肉の花躰

- 一皮の花體とは人に十三の屈伸する所あり兩の手に六所あり兩足に六所あり頸を加へて十三なり萬物みな如斯の屈伸あり草木にも又此屈伸あり此屈伸悉く備りたる花體を皮の花體といふ甚秘傳あり
- 一肉の花體は人に九穴あり草木にも此九穴あり此の九穴悉く具りたる是を肉の花體といふ草木の九穴大に口傳あり他家の知る所にあらず門に入て知るべし
- 一如此草木の出生と人間の出生は有情と非情の相違のみにして聊も違ふ所なし草木の出生の有の

まゝといふは此出生の事をいふなるべし

佛草木の誓

- 一涅槃經に云草木國土悉皆成佛と説給へり草木は非情といへども佛は一切衆生悉有佛性云々或は一切衆生皆有佛性との給ひて佛の平等心より慈悲を垂れ給ふ時は有情も非情も隔てなく皆佛性を備へたる義を示して憐愍し給ふなり
- 一往昔禁中にあるて叡山の元三大師と南都の仲算法師と草木成佛の問答の時彌草木までも成佛に相違なければ庭前の牛是を聞て
- 草も木も佛になると聞くからに
- 心ある身のたのもしきかな
- と誕にて一首の歌を詠ぜし事は世俗皆知る所なり草も木もとあるは非情をいふ心ある身とは有情の牛の事なりかく聞く時は人間も草木も聊變る所なし故に佛も成佛を許し給ふ

生花者草木隨心の事

一生花は正直の根元悪人も善人にひるがへるは花道の徳なり草木の正直に我心を任せて一瓶の花

を生る時は正直を習ふ故に悪人にあらず是善人なり又一瓶の花を生るに我心に任せて生る時は其花甚見苦しくして見所なし多人皆正直を惡み我意に任せて花を生る故に人前にて僅に一本の枝を折り一輪の花を落し大に恥辱を得るなり是は己が曲れる心を草木より恥しむるなり恥辱是に過たるはなし人の中にて人に恥しめらるゝは至て恥辱と心得非情の草木に恥しめられても夫は恥辱と思はず人に恥しめらるゝを恥辱と心得は尋常の習ひなり先一瓶を生る時草木の正直の徳を尊み敬ひ又非情にて正直なる所を憐愍し慈悲を施して生る時は我心も終に正直になるものなり古歌に

植て見よ花の育たぬ里もなし心からこそ身はいやしけれ

と詠る歌の如く性は善なるものにして氣は悪人なり性は動かす氣は動くに従ひ善にも惡にもなる是氣質の性にして靈覺なり其性に従ひ淺深厚薄縁にふれて善とも惡ともなるなり然れば花道に性氣を寄る時は草木の正直に従ひ終に惡心も善心にひるがへるべし草木に心を任せ草木のいふ事を能用る人なれば人の言ふ事は善惡ともに用ひずといふ事なし人の言ふ事を正直に用る人は善人なり己が心に合はぬは能をも惡ししといひ惡しきをも善といひ我意に任せて告るゆへ誤り多し生花は心を正直に持て生る時は即花體も正花なり是非善惡の姿顯れずといふ事なし其質に従ひて感應あるを生花の徳とす是正直の本源なり

一毎朝一瓶の花を生る時は即其日の能祈禱なり人の身の上に善日惡日あり日に惡日といふはなけれど陰陽片く寄る故に惡日となりて成す事する事皆惡しく商ひに損をし勝利を失ひ望事叶はずして惡日なり陰陽當分の日を善日といふたとひ惡日にも己が心を改め草木の正直に任せ陰陽五行と備りたる自然の理に背かずして一瓶の花を生る時は天理に協ふ故に陰陽等分の行ひなれば是則正直なり、是又佛神の尊慮にも叶ふ然る是は惡日も善日となる故其日くの祈禱是に過たるはなし毎日の行ひと心得一瓶の花を生べきなり

生花賓主の禮

一來客の節床に花を生る事饗應の第一なり花もの言はねとも賓主等に禮を盡す故に花を生て客を待是を無言の禮といふ惣して客饗應の爲なれば先客を書院に通じ席を設けて後生くべきに饗應第一の花を客前に生けて待事にも生る大に故實有事なり筆の及ぶに所にあらず然は客を設るにも必ず花を生べき事なり人心は面に顯れずといへども内心に邪氣有て人を討る事第一なり故に客饗應には先花を生けて邪氣無事を知らしめ無言の禮を盡して志の違はざる事を顯はすなり依て幾度も念入て枯葉枯枝は勿論損したる花折たる枝など生る事は至て失禮なり然るに當時花生る人の花體を見るに只投入れにて草木の枝を伐りて其まゝ花器に折入置事客饗應の正意を失ひ

無禮の第一なりかゝる人々の花は唯花器のみ撰びて花に志はなく花を憐む心もなし古への花を翫ふ人とは雲泥の違ひなり生花は一體に念を入れ規矩を守り崩れざる様に生けてこそ其實も顯るべし

生花者不有他の樂事

一生花は無言の禮を盡して饗應すと雖も他の樂みにあらず自己の心品を改る具なれば花に性氣を寄せ心を移して心を正直に持べき爲なり然れば人前は格別獨り生る時も愈志しを正して禮を盡し不行儀なき様に心掛べきなり先懸物に禮を盡し花に禮を成し花盆飭り道具の取扱ひ等亂れざる様肝要なり花の取扱も隨分柔かに花を憐みて一花を伐るとも猥りに切るべからずうつろひたるより伐りて苔を残すべし一枝一莖を切り捨るとも陋きを伐りて美しさを残す心持第一なり折たる枝落たる花とても仇に捨てからず水に入て咲べき花の志しを遂げさす可し當流を古流と稱して神佛の跡を嗣ぎ護命僧正より世々に傳へて明惠上人松月堂の翫ひ玉ひしは生花は段々生長して技葉花榮へ花咲實を結ぶ姿を顯はすなり然れば自己の樂にして他の樂にあらず甚慎しむべき事なり

五體の名目

一圓相は未分の體にして大極なり花體に象る半月は半にも満たざる形にして年々歳々時々刻々に生長するの義なり是則陰陽五行の三體悉備りて天地人の三才に結び天の湯は豊かにして限りなく優美なる梢へを遣ひ地の陰は尖とに動きなく天の氣を受けて共に久しき體なれば直なる枝を用ひ五行の用は陽に片寄らず陰に片寄らず働きの肝要なれば陰陽兼備なる品を用ひ自由を働くなり此天の梢を生花の一體と定め是を正花と號けて正は一に止るの義なり此正花の内に令と號するものあり中央の土にして陽中の陰を立るの體也梢を後ろの方に向けて目立ぬ様に居るなり地の枝を體と號する事は地は都ての一體にして動きなく侍れば是正花につきて一瓶の體なり故に體と號するなり此體の内に留と號するものあり是水に表して陰中の陽を主るの體なり水は地中をくぐるゆへ前の方は定座なく前隅三方を働く事を許す五行の枝を通用と號する事は五行は木火土金水の五つのもの各備りて天地の間に生するものは人を始め鳥獸草木の類まで皆時候の勤あり此中に人は萬物の靈長なりとはいへ此人徳に表して人の勤めの義味なり用は人の働さにて人總なり働さを要用とするゆゑに格より長さをも短さをも許すなり令は陽中の陰にして相令と號するなり正花に則陰陽具足するの體なり留は一體の留といふ義にして陰中の陽なれば

前に形を成して陰中の陽を顯す定則體に陰陽具足するなり通用則陰陽通用なれば是則陰陽具足の體なり如此一體く陰陽くと備る事萬物皆如此花體の半月にも滿れば缺るの義味なり此五體の形一體くの出生は手を以て分つべし筆談の及ぶ所にあらず悉く口傳あり

仁義禮智信象體

一仁義禮智信の五つを象るに仁は豊かにしてもものを憐むゆゑに正花に象り儀は上にあつて正花と同しく下を恵み下にあつては上みを尊み敬ふ故に令に象り仁を離れずして是を守る上下とも其ものの對して行ふの道にて缺る事なし故に中央の土を主つて定る座なし後ろにあつて三方を許す又正花の身木と通用の枝と體の梢と三角の形を備へて胸の火を象る智は爰にあつて彼しこを知り動かずして其事をなし全體尖にして豊かならざるゆゑ體に象るなり此枝の居様に至て大事あり信は人の志にして働く肝要なり是人徳にて少しにても違ふ時は一體崩るなり依て通用に象るなり留は此うちに籠りて定りたる事なし是則正花と同體なる故なり意味深長筆の及ぶ所にあらず大に口傳あり

神儒佛象體

一正花は豊にして神の如し萬物榮るの義味なり令は此うちに籠りて祇の如し天神地祇と分つて陰陽一體なり體は陰を主りて佛の如し動かざるの義なり留は此うちに籠りて佛に生を守の義あるが如し是陰中の陽なり通は人の徳にて儒の如し五常五倫を守る人徳なり此通の枝に深き義味あり秘傳ゆへ委しく記さず

三種神寶象體

一一圓相は陽にして君の位寶珠は五行半月は陰なり是左右の大臣の位にて君を補佐するの義なり君の位は博くして萬物を恵みて中央にあり左の臣の位は寬にして文を主り右の臣の位は強にして武を主り君の左右を離れず補佐するの義なりこれに依て一圓相は内待所の御鏡になぞらへ寶珠は神爾にたとへ半月は寶劍にひとしく光りありて智なり寶劍は征伐を守りて勇なり此三徳を以て天下を治む故に生花にても是を象りて花咲實を結ぶの義味を生成なり甚深意あり大に口傳

神體象體

一生花は五體各能備らざれば一體崩れて見所うすかるべし去れば五體何れも神を象りて其違はざる象を顯すなり先天地分れて國常立尊成出給ふ木火土金水の徳まします是神人の始なり生花の

五體も此御神に比して一體に象るなり五體の枝々に各神を象りて第二の國挾槌尊を留になぞらへ此御神は水徳にして地より先生するの義なり次に第三豊肆諄尊を胸の火三角になぞらへ此御神は火徳にして水の陰成て火の陽は地方形より生ずるの象なり次に第四泥土煮の尊沙土煮の尊を正花になぞらへ此御神より男女分れ給ふといへども交會の儀なし木の徳にして陽を主り給ふ則地と分れて生ずるの象なり次に五大戸道尊大戸逸尊此二神を令になぞらへ今徳の御神にして風と同體なり半月は水の圓形より生ずるの義なり風は陰にして中央より吹故天の中央の火と一體なり次に第六面足尊惶根尊此二御神は體になぞらへ土徳の御神にて地の陰を主るなり次に第七伊弉諾尊伊弉册尊を通用となすらへ此二御神に至りて交會して諸神をはじめ山河海國をことごとく産玉ひて人徳備り木火土金水の五つの物成て五體の内何れもとはいひながら通用は至つて働さある枝なれば皮肉骨陰陽を備へて用を爲すべし枝の長短を許すなり是通用にて一瓶の働さをなし生長の意味を顯はし體の枝にて三角の火を備へ花のしまりを考へし留は一瓶の留なれば治りよく崩れざるよう肝要なり令はさしたることなけれども後しろに出たる枝ゆへ花葉の居様に大事あり工夫あるべし正花は一瓶の本體なれば一入大事なり此陽の枝を陰にも五行にも生る事あり然れども工夫ある事にて夫より陰陽五行雜亂して働く事を許す此働さは皮肉骨を以て働くなり皮肉骨の働さは體相用の三大にあり是を自由に働くを以て名人といひ上手ともいふ

甚口傳あり

神徳陰陽和合

一夫陰陽は天地自然の象にして何れか陰陽なからざらん此陰陽和合して萬物を生するなり和合せざれば生ずる事なし前にいふ如く五體悉く神になぞらへ奉るに伊勢兩皇太神宮の御神徳に象り奉らば正花は内宮天照皇太神宮になぞらへ奉り女體にましますも陽徳の御神にてまします令は相殿にまします萬幡豊秋津姫の命になぞらへ奉りて陽中の陰を主る女體に座して補佐し玉ふなり是則陰陽和合の義なり體は外宮豊受皇太神宮になぞらへ奉る男體にましますも陰徳の御神なり留は相殿に居ます瓊々杵尊になすらへ奉りて陰中の陽を主る男體に居して補佐し給ふなり是則陰陽和合の義なり通用は内宮の相殿にまします三神の徳を以て通を成すの義なり此三神の内天兒屋根命天太玉命は相殿手力雄命は内宮の相殿に座ます御神なり則此三神の徳五行を兼備するなり大に口傳あり

一外宮一宮にて言は正花は豊受皇太神宮に表し奉りて陽なり男體ながら陰徳にましますば陽中の陰籠りて一體おのづから陰陽和合なり體は相殿に居ます天兒屋根命天太玉命に表し奉りて陰なり此二御神は外宮補佐の御神にして武を専らにし給ふ故に陰にして陽を助るの義なり其内に天

兒屋根命は文を兼備し玉ふ故陽徳籠りて則陰陽和合なり通用は相殿にまします瓊々杵尊に表し奉りて五行なり此御神は豊葦原の中國の御主として天下をしろしめす徳備りて又外宮補佐の御神にてましますれば殊更に其神徳高く尊み敬ひ奉るべき御神なりされば陰陽兼備して是則陰陽和合なり

一内宮一宮にて言は天照皇太神宮に表し奉りて陽なり陽徳ながら女體にましますれば則陽中の陰はこもりて一體おのづから陰陽和合なり體は相殿にまします天手力雄命に表し奉りて陰なり御神は武を専らにし給ふ故に陰にして陽を助るの義なり然れども男體に居しませば陰中の陽は籠りて則陰陽和合なり通用は相殿にまします萬幡豊秋津姫命に表し奉りて其御神徳殊更に尊く瓊々杵尊の御母にて居ませば尤用あり則陰陽和合なり此御神に付ては意味深長あり

一内外の御宮造りを以て言は外宮は智木魚木は陽にして飭は陰なり内宮は智木勝魚木は陰にして御飭は陽なり是則陰陽和合の義なり其秘事ある事なり是に依て生花にも陰陽和合を専らにして枝葉生長の義をあらはす事の肝要甚しきなり

一兩宮の次第を以て言は外宮の御神は天神七代最初の御神なり内宮の御神は地神五代の始めの御神にして後外宮は雄略天皇の御宇御鎮座にて後内宮は垂仁天皇御宇御鎮座にて前諸祭禮は外宮を前とし内宮は後とす御造宮は内宮を前とし外宮を後とす是皆陰陽和合の義味なり

一枝葉花の三つ則陰陽五行なり枝は陰葉は陽花五行なり花葉の二つにては花は陽葉は陰是則陰陽和合なり枝葉の二つにては枝は陰葉は陽是則陰陽和合あり花にては満開は陽中開は五行苔み陰なり又一枝の内に陰陽五行あり一葉の内に陰陽五行あり一花の内に陰陽五行あり又一枝の居方に陰陽五行あり一葉の居方に陰陽あり花の居方に陰陽五行あり此居方に甚口傳あり又枝は骨なり葉は皮なり花は肉なり一花の内に又皮肉骨あり一葉の内に皮肉骨あり一花の内に皮肉骨あり是又口傳なり尤枝數葉數花數の遣ひ分けあり葉に大葉中葉小葉あり是に又初盛殘の働さあり陰草あり陽草あり上段木あり中段木あり下段木あり又草に上段草中段草下段草の三段あり或は山草野草水草の差別あり是等の遣ひ分け陰陽五行の働さ等口傳なり何れにても陰陽和合の花體の働さ肝要なり

花翫人無病長壽の論

一人にも性情の二つある中に性は常住不變にして精は増減するものなり精心衰へざる時は無病なり尤無病なれば長壽を得るものなり其精減ぜざるは良藥は花に過たるはなし其謂は花の盛を見て喜ぶ心は十人も百人も替る所なしやんことなき雲の上人の花を見玉ふも非人乞食の空腹にても花の盛を見ればさも美しと見る眼も同じ詠にて聊替りなし是花の徳なり亦花を見て喜ぶ心の

起るといふは精心に悦ぶ故なり精の減じたる時は眼に艶色を見て美しと思は是則保養なり眼に美しと見て眼根を悦ばしむる時は減じたる精を増し眼識に通して精心を保ふなり然れば常に花を翫ひとする人は精心衰る事なし精減ぜざる時は無病なり無病なれば極めて長壽なり是に依て男女老若の差別なく虚弱なる人老人等はおして花を翫ふべし是第一の補養なり

花實の論

一生花といふは花に限ると知るべし三國とも花の始りは花のみにして紅葉實物常盤物を用ひたる證據なし吾邦におゐては櫻を瓶にうつして二神を祭り玉ひしより始りて花の時は亦花を以て祭り神代の卷にも出たり又紅葉實物は陽精つきて陰に歸したるものなれば花道の忌みものなり花は眼根の樂みにして精心を養ふ實物は舌根の樂しみにして脾胃を養ふものなれば生花に用るものにあらず尤實物は口にあきんすといへども梅ともき南天等は人の食するものにあらずされども鳥類は好みて喰ふ是舌根の樂みなり人も五味の味あるものは葉實も捨すして食へども澁き味は人決して喰はず然れば花實の相違六根六識に渡りて正すべし雲泥の違ひなり勿論生花は陰陽和合と生け成す故陽精盡たる満花を生す中開きを好むは陰陽の中間にして満開にあらず苔にあらず陰陽ともに和合の形なり仍て中開を好むなり然るに陽精盡て陰に歸るものを用る事決して

なし紅葉も亦又同じ實物紅葉とも五大離散の色を顯し紅葉は喩へば燈し火の油のなくなりて既に消えんとする時はつと光を來すの如く實も熟して今落んとする時紅葉は將に散んとする時の紅色なり是を用るは甚失禮なり惣して禁花は失禮の品を禁ずるなれば先一番に紅葉實物を禁ずべし此故實を知らずして猥りに用る事甚遇迷の至りなり

禁花の類

一生花に用ひざる草木數多ありといへども其數あげて算へかたし荒増を記るさば先惡香とて草木ともに惡き香のある品を用ひず梅ヶ香などの十人が十人百人が百人ともに好むは隨分用てよろし毒草毒木を用はず又針のある品を用ひず尤身木莖にあるは針といひ葉と花にあるは針にあらず身木莖にあるは決して用ひず又毒も大毒あるは用ひず小毒は許すといへり扱雜草雜木を用ひず是皆失禮の品ゆへ遣ふ事を禁ず其外禁花數多あれども筆談に及びがたし

四季水際水の事

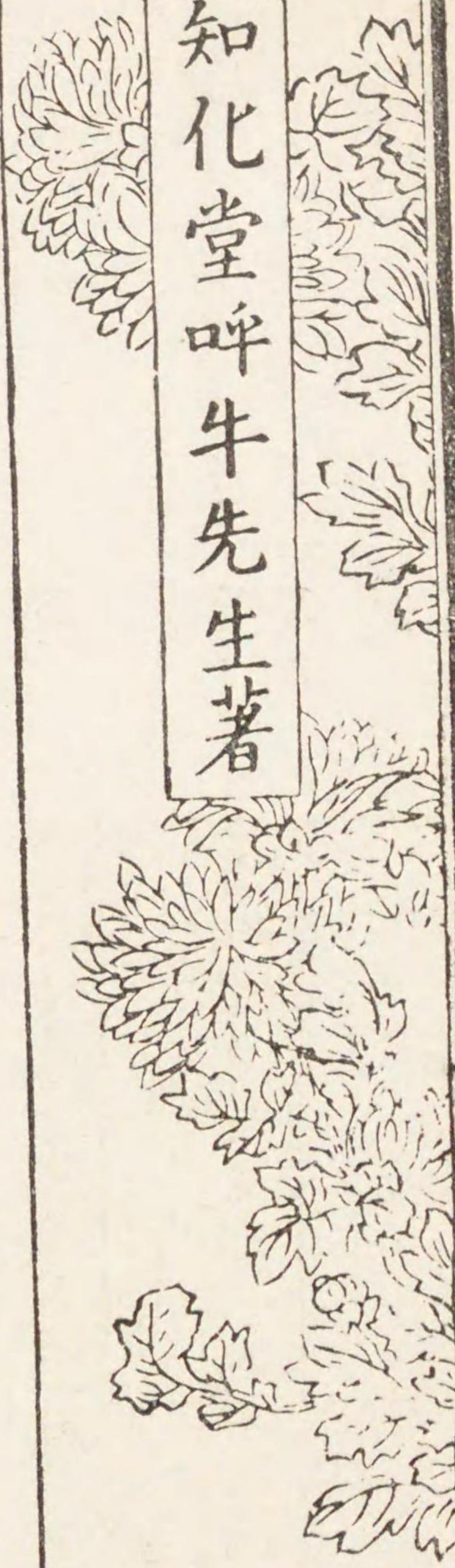
一他流にも花器の水を四季に高下して是を四季あしらいといへり甚誤りなり惣して花器の水は一杯に入る事器の差別なく四季同様なり竹の花器を鋸のまゝといふも此故實なり夫四季の水あし

らひといふは前にいふ花體の留の花腰迄水除あしらいの事なり尤四季に高下あり夏は高く冬は
卑く是夏は陽氣盛なる時ゆへ陽中の陰を顯して高くするなり冬は陰氣盛ん成時故陰中の陽を顯
はして卑し利休も花窓より出ざる器は生ぬべしといへるは此水際あしらいの事なり他流に是を
誤て四季に水を高下する事甚愚昧の至りなり大に口傳あり

龜齡軒秘藏



知化堂呼牛先生著



庸軒流

插花四季枝折

浪速書肆

積玉圃

傳系

藤村庸軒

土山出雲守

多田義雄

富田呼牛

庸軒流

插花四季枝折



插花四季枝折

插花四季枝折

秋後始信陽龍河。携此圖。至。且修。曰。吾鄉。曰。呼牛。游。此。技。者。年。蓋。有。山。水。之。癖。也。刀。圭。之。臨。深。山。大。澤。長。爾。放。行。山。花。水。草。遇。則。採。之。乃。挿。而。說。焉。大。樂。其。致。矣。吾。輩。二。子。結。社。從。游。於。茲。手。與。衆。借。學。之。自。以。為。樂。莫。大。焉。余。曰。善。台。人。寄。懷。於。山。水。固。以。為。哉。呼。步。氏。之。法。其。將。為。極。花。源。上。人。耶。袁。中。良。所。謂。欲。歛。竺。高。巖。濯。纓。流。水。而。

為物所絆。不得已以。朕。執。貯。花。隨時。挿。換。人家。以。有。名。卉。一旦。遂。為。案。頭。物。矣。是。僅。足。以。當。山。水。之。遊。耳。今。也。無。有。之。其。何。不。樂。之。有。天。下。之。至。樂。哉。無。有。哉。是。幽。人。韻。士。皆。烈。丈。丈。之。所。為。也。其。他。若。快。意。折。辱。名。存。其人。固。無。論。已。獨。疑。歲。菊。都。下。所。有。初。春。之。時。其。大。者。僅。不。過。數。寸。今。觀。圖。中。所。載。雖。插。瓶。中。如。非。借。鑄。採。之。力。則。詎。不。知。者。似。損。其。真。也。龍。河。云。凡。秋。冬。之。

交。採。之。於。深。山。幽。谷。栽。養。之。於。家。園。中。則。采。之。之。際。實。至。尺。餘。此。自。以。出。所。使。然。師。也。幸。莫。訝。焉。余。曰。嗟。夫。然。乎。是。亦。名。山。大。澤。之。靈。使。造。物。其。然。乎。愈。奇。愈。可。樂。乎。呼。步。氏。之。好。此。技。良。有。以。矣。龍。珂。因。清。次。此。語。以。為。序。遂。書。以。贈。云。

歲壬寅冬十月

墨隱道人祐山侯書



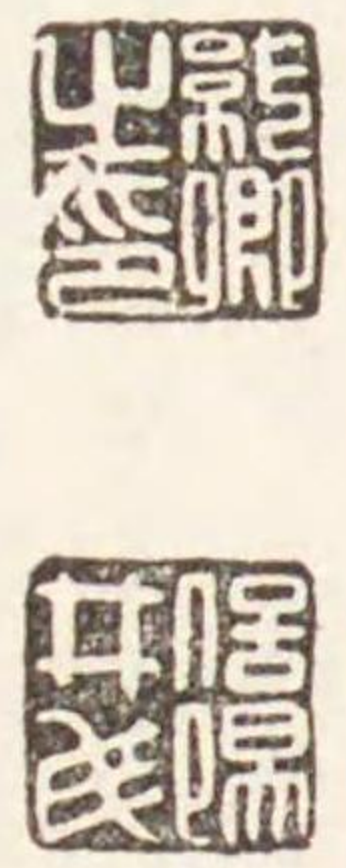
題

親手採之。是初人
事。其意插養又
存化。由画乃花源。
唯分信。通得善語
採中。佳春耳。是日

人傳回。...	先皇賜一...	考至切...	乞身先...	是國不...	飢墨...
乞之。...	之格。...	以...	回傳...	之...	之...

天の壬寅十月十一日

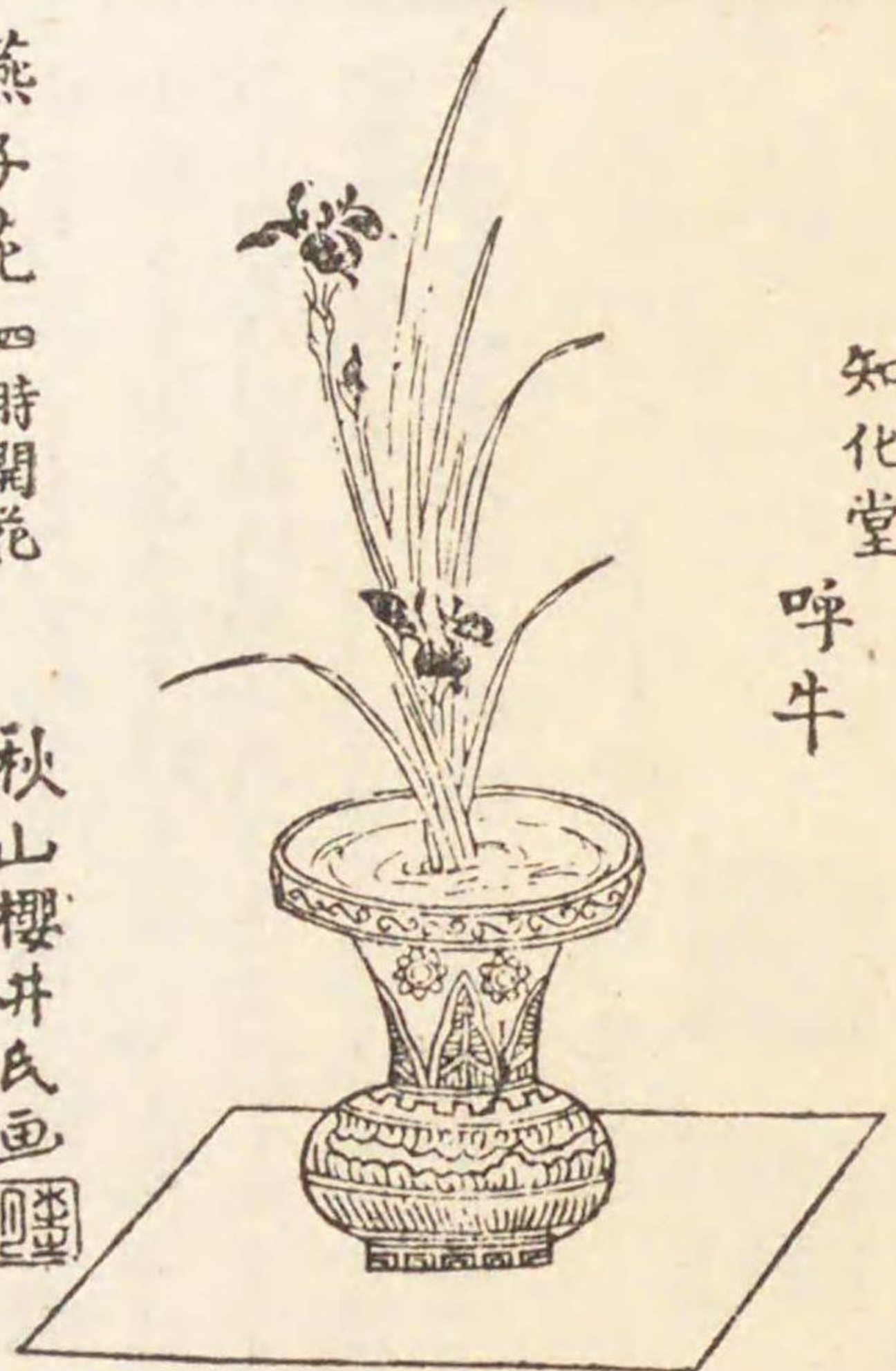
氣味井純卿



任陽居士 平川馬禪也



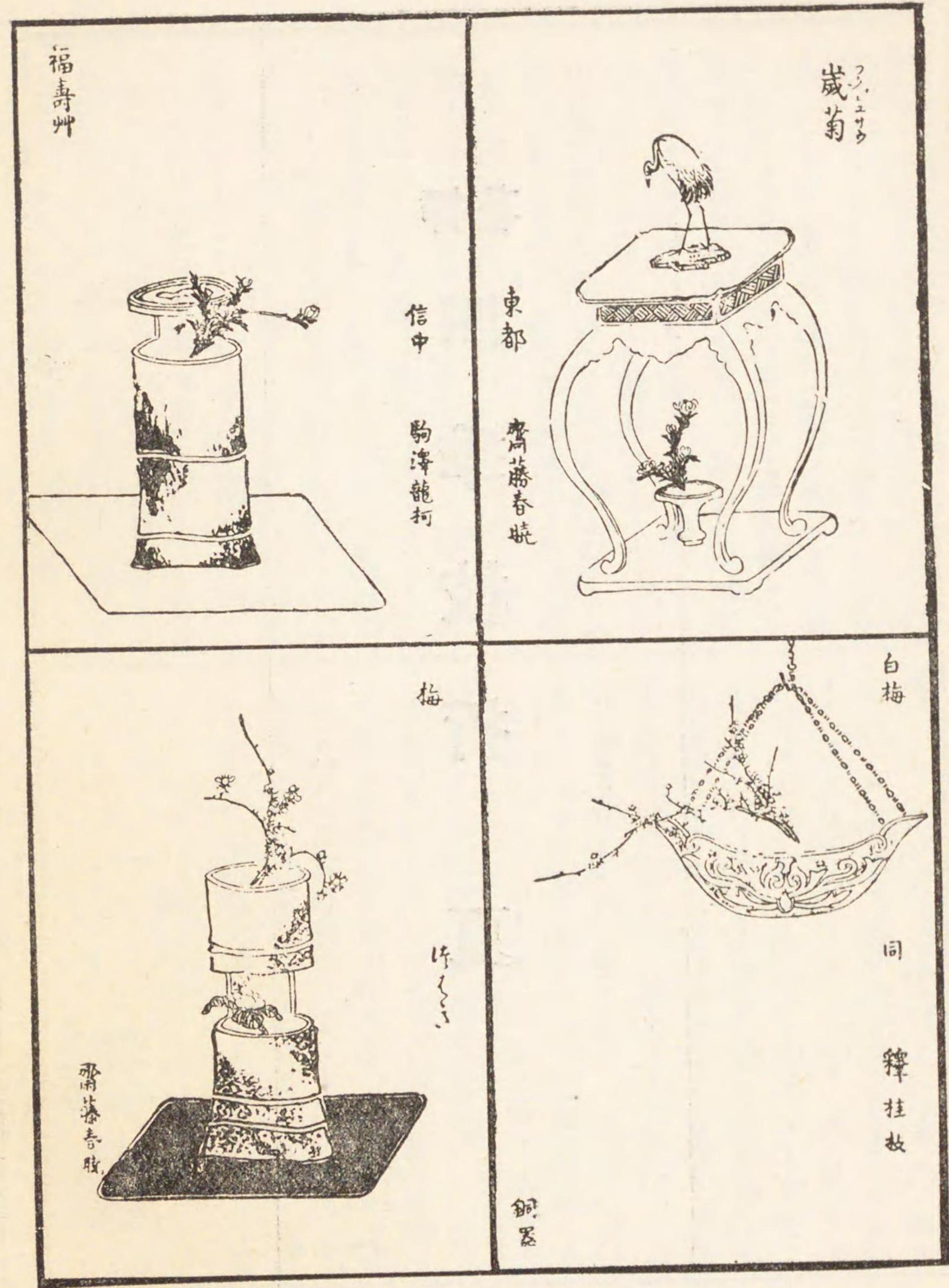
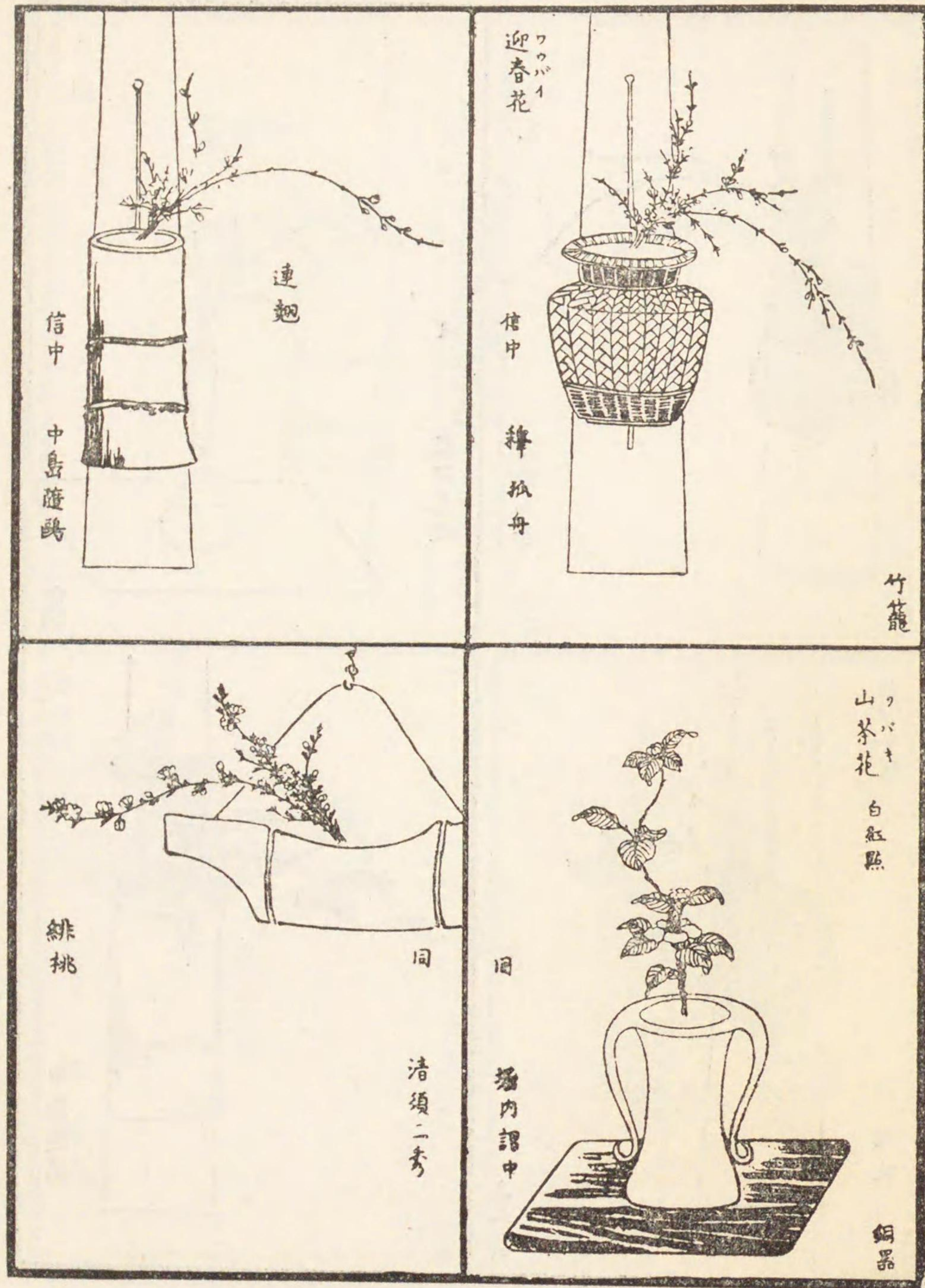
知化堂 呼牛



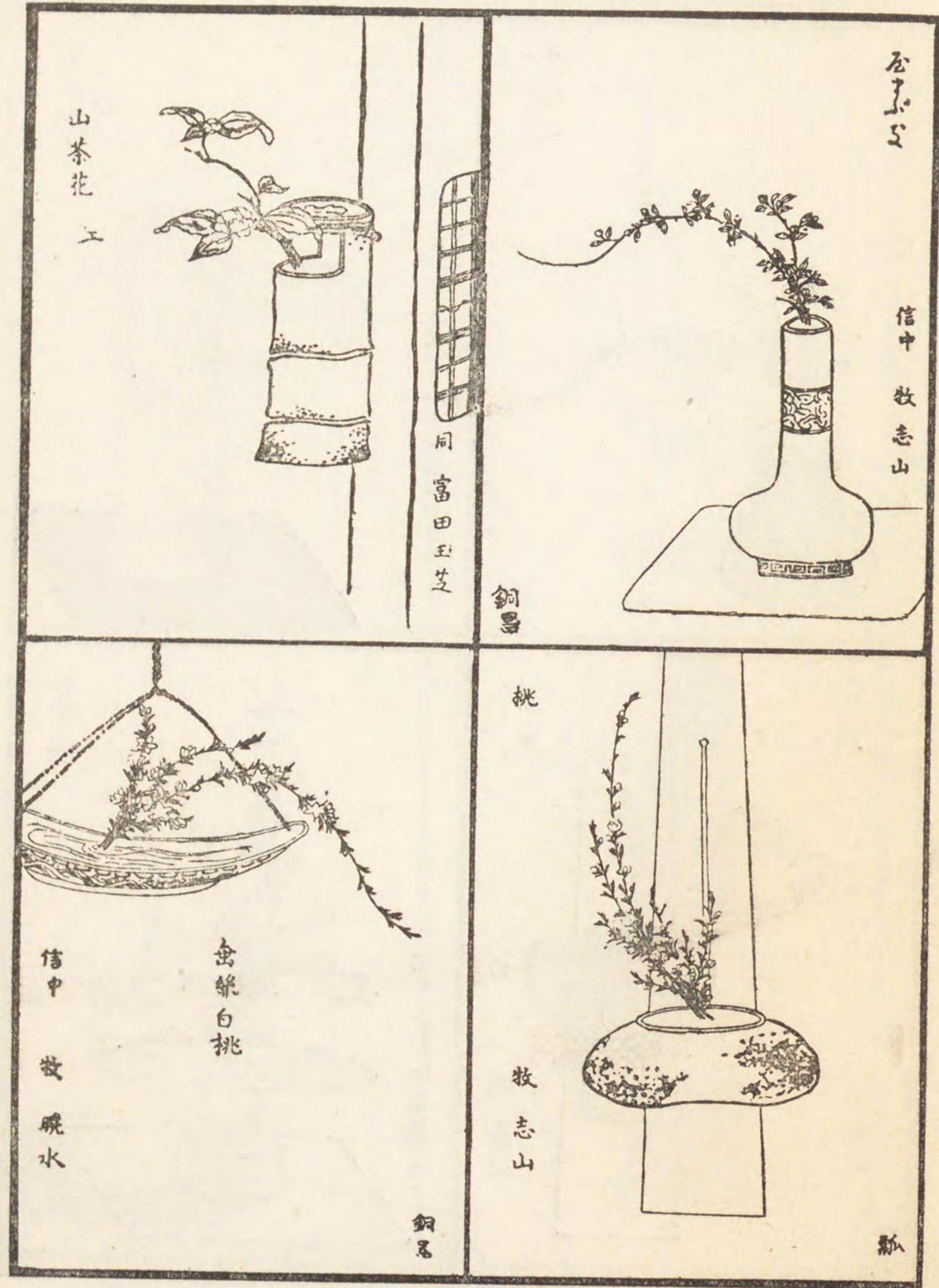
燕子花 四時開花 秋山櫻井氏画

插花小引

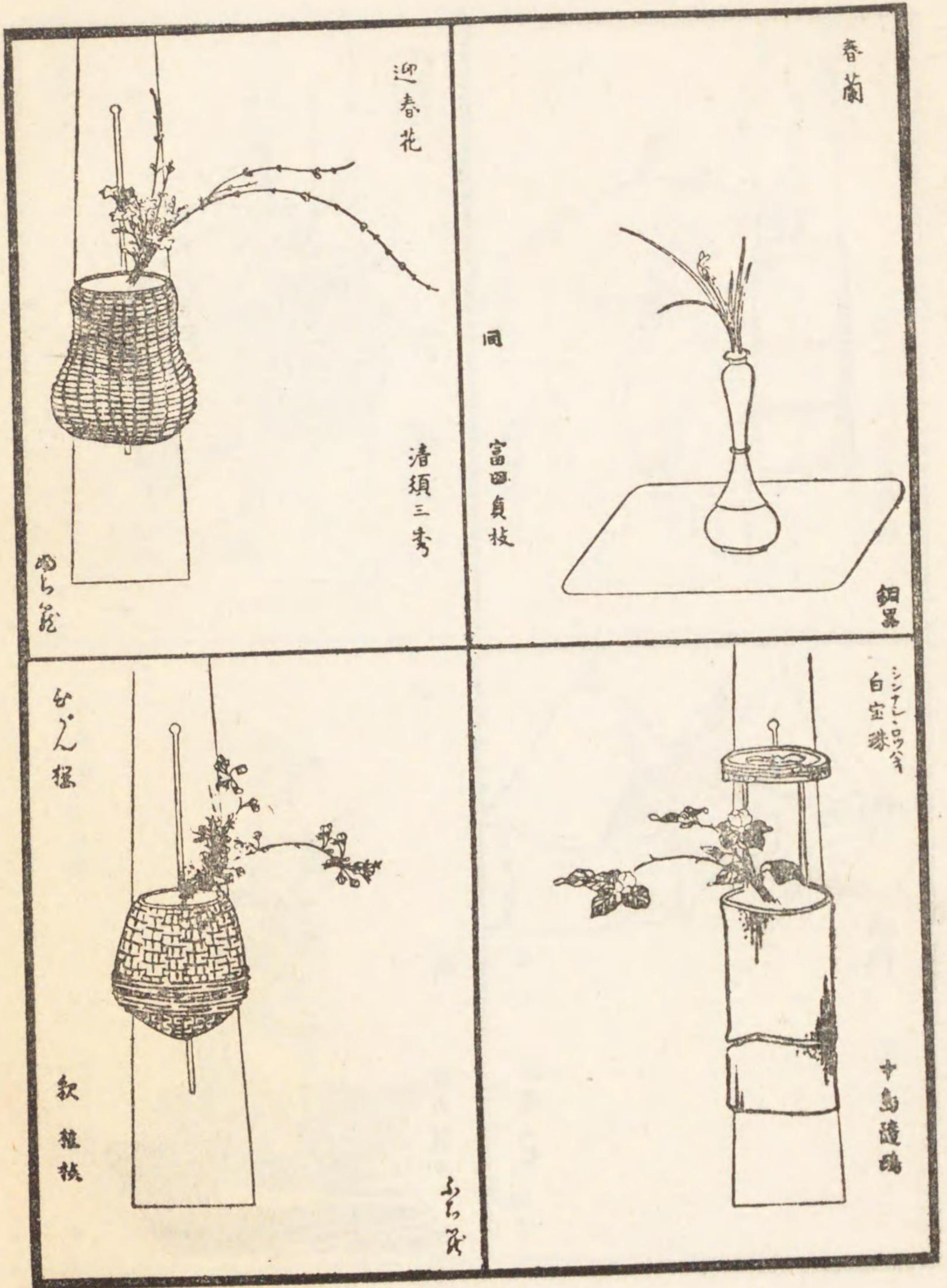
插花の師多田義雄翁無底堂より歸りて
 讃州高松侯の家士の勝臣にて清華乃
 御家へ候はれ其れ一の方のこころし
 といひ京都の泥途にて喚ひ洗小古稀に
 仍とて和歌の醉露堂に文臺を傳へ炷香の
 志節流の眞儀と極々茶事、庸軒の教奇
 文徳其外武小文りみむら極々
 中小の挿花の道と土山出雲も
 庸軒乃一流 永師よ名らて予嘗て山列



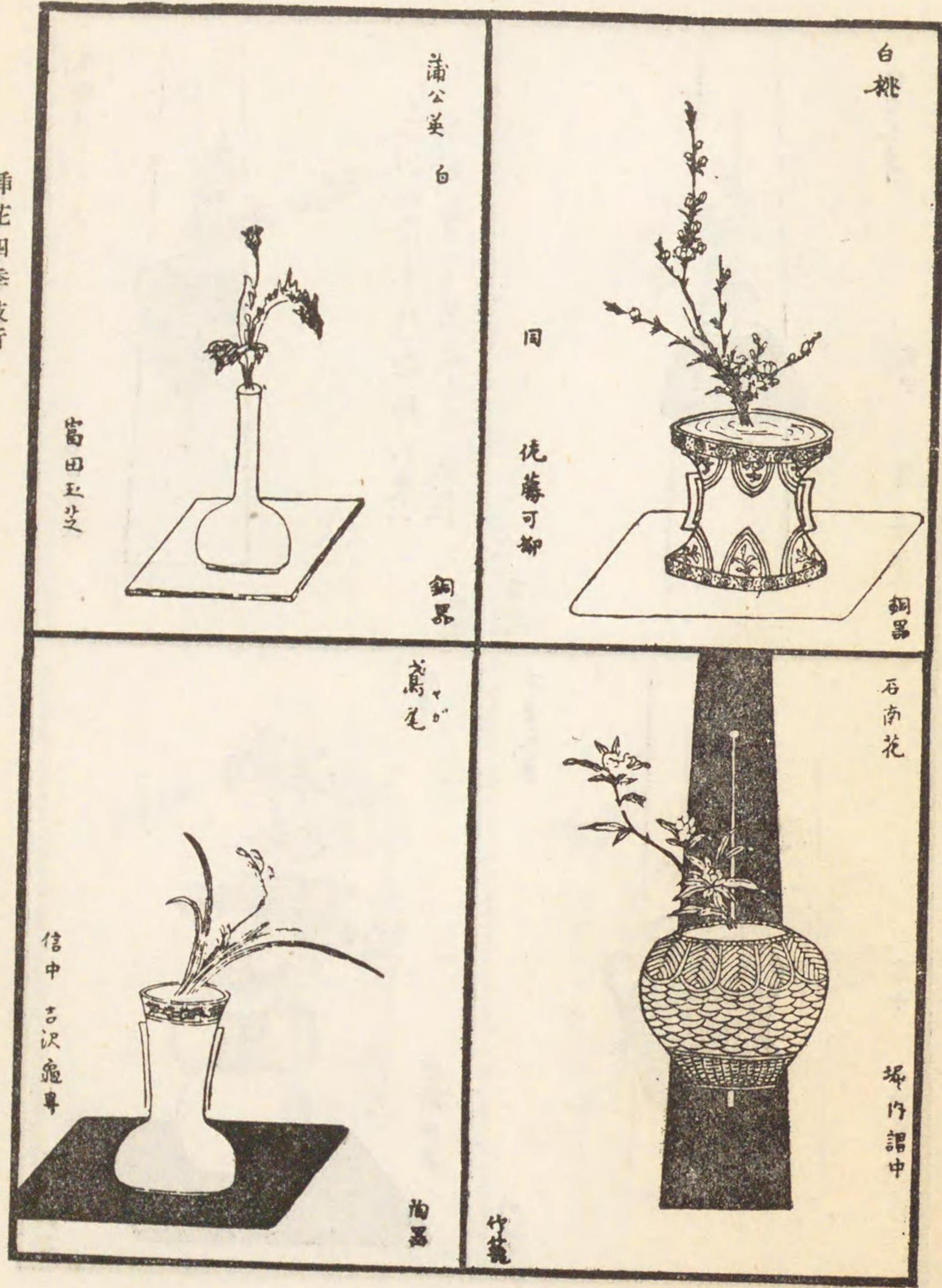
插花四季枝折



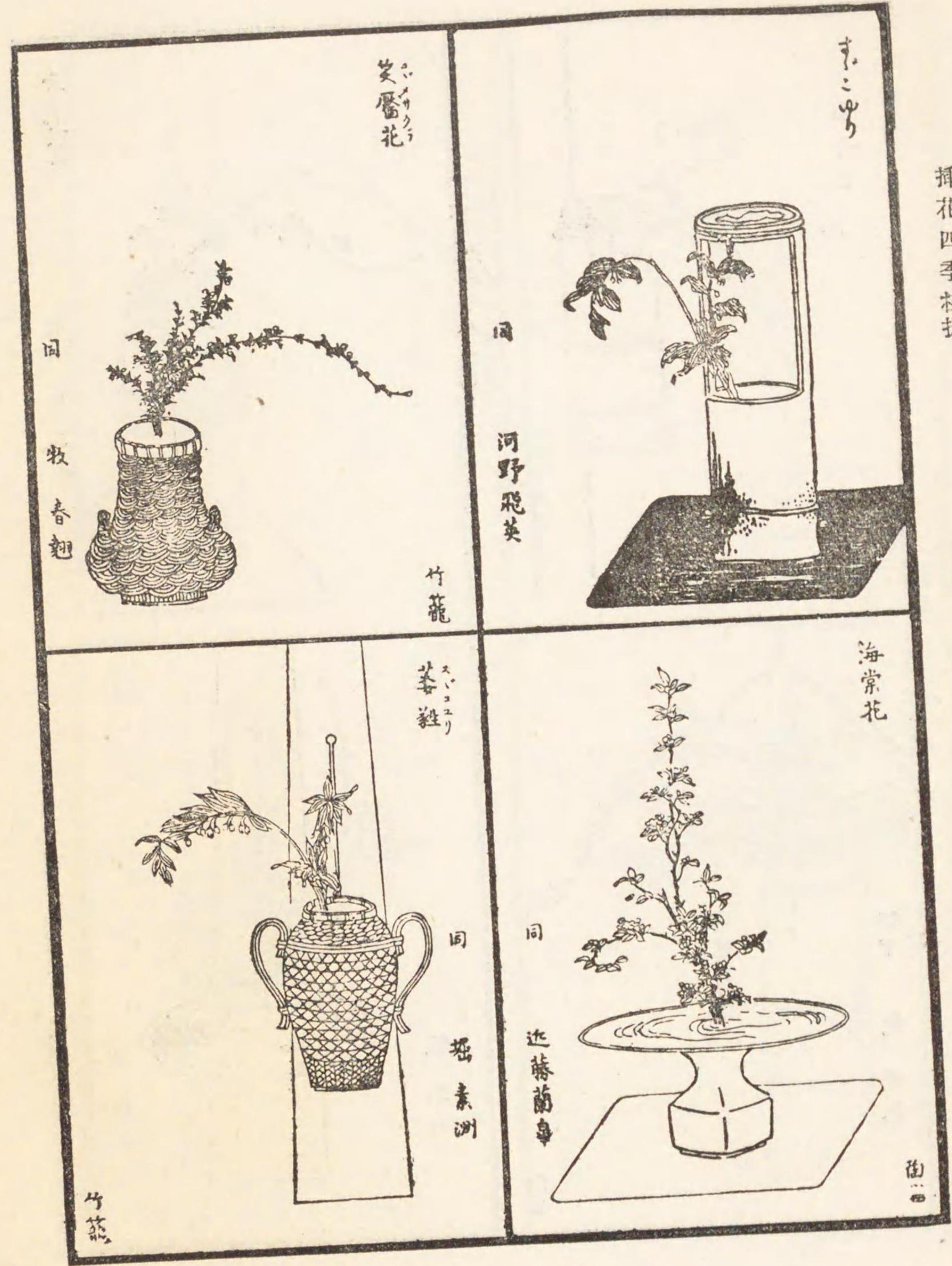
插花四季枝折

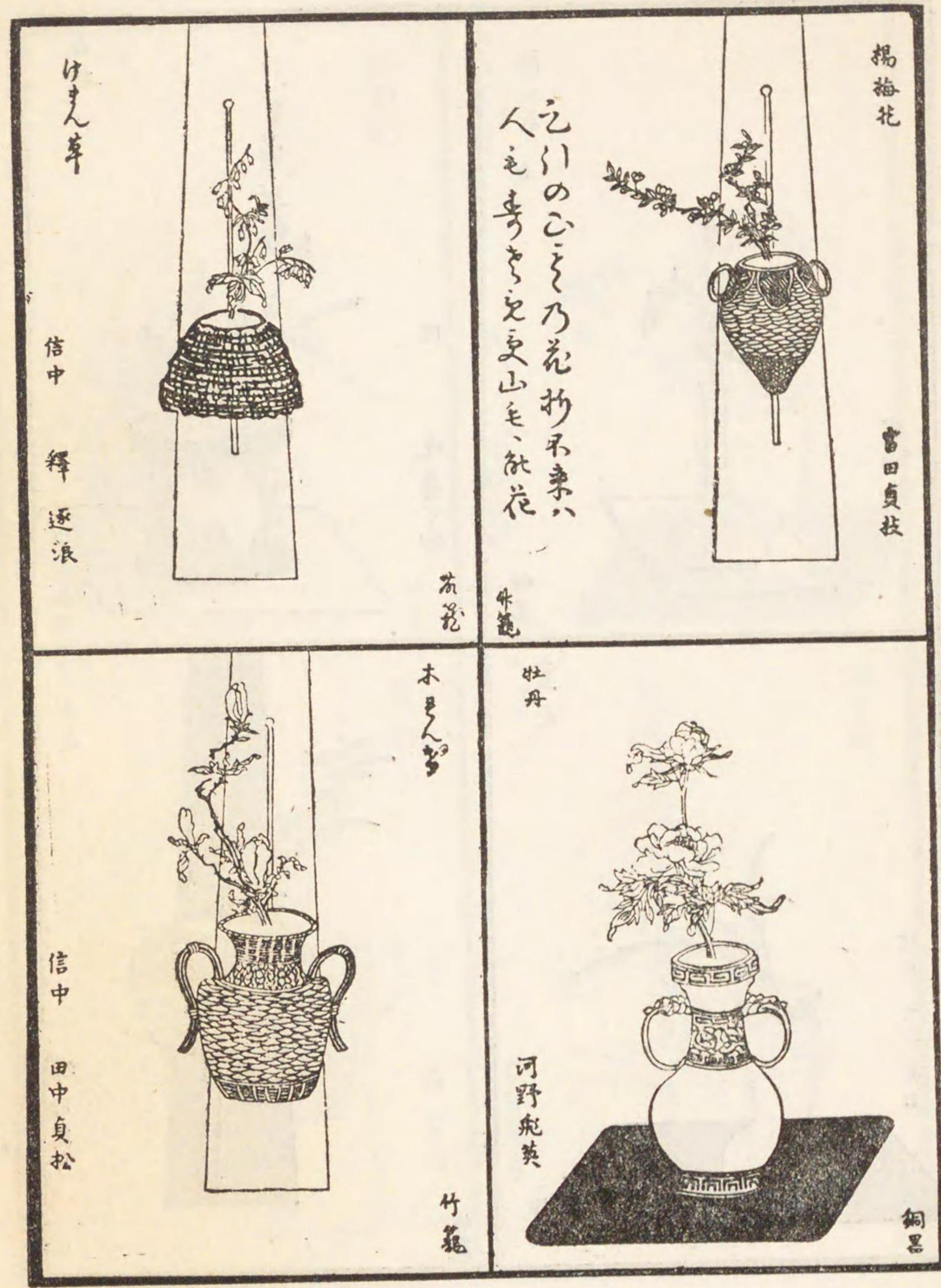
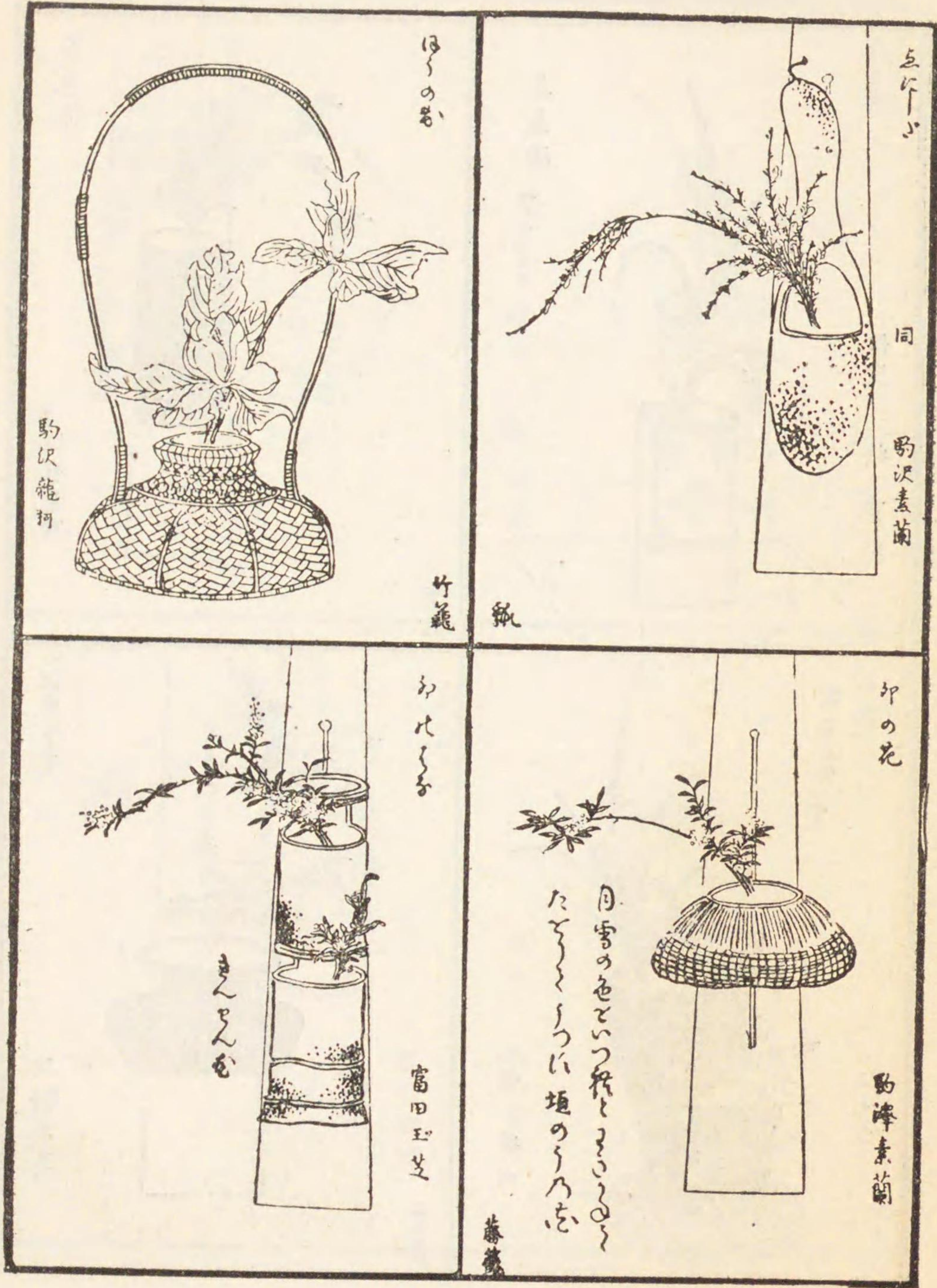


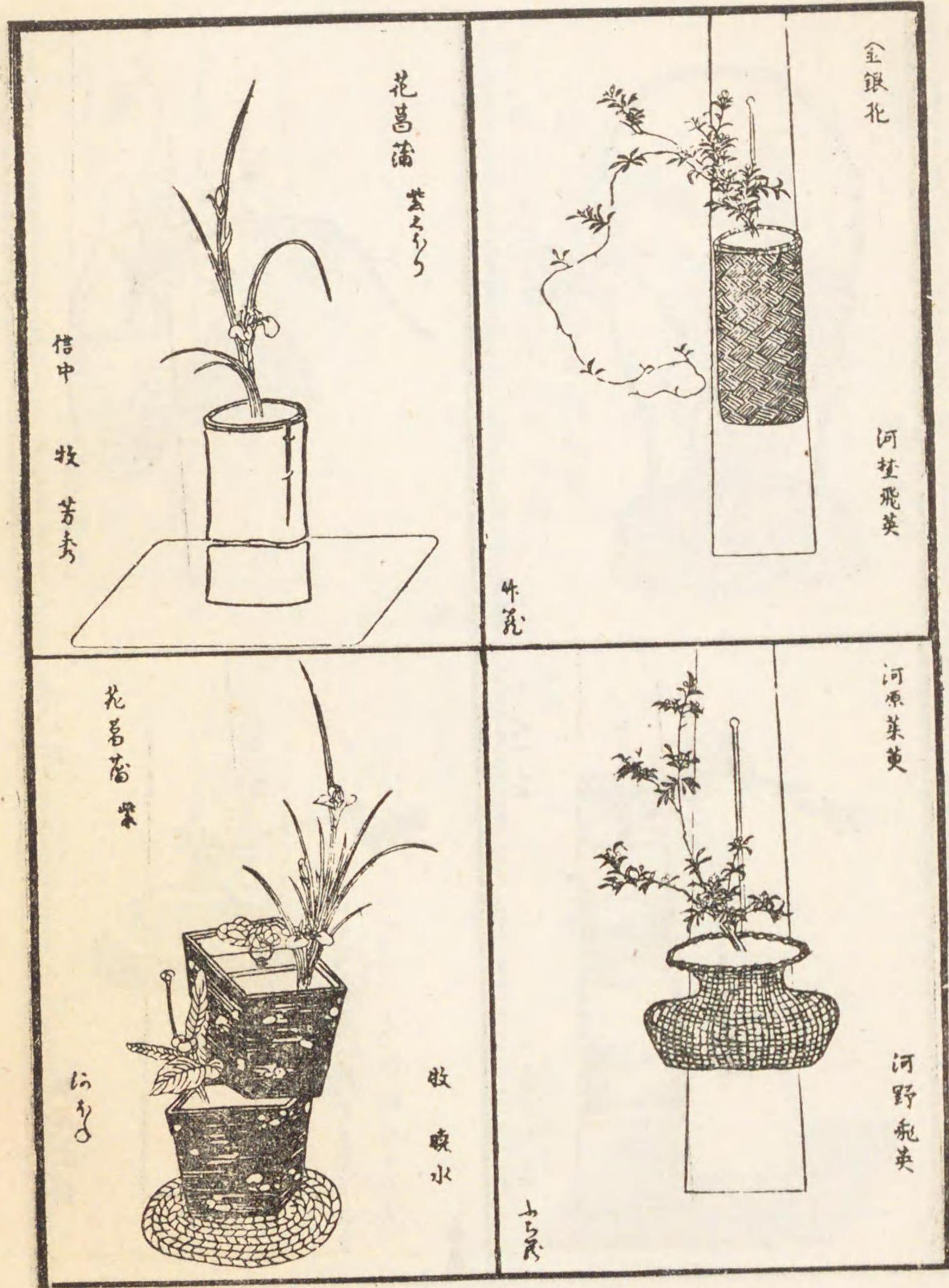
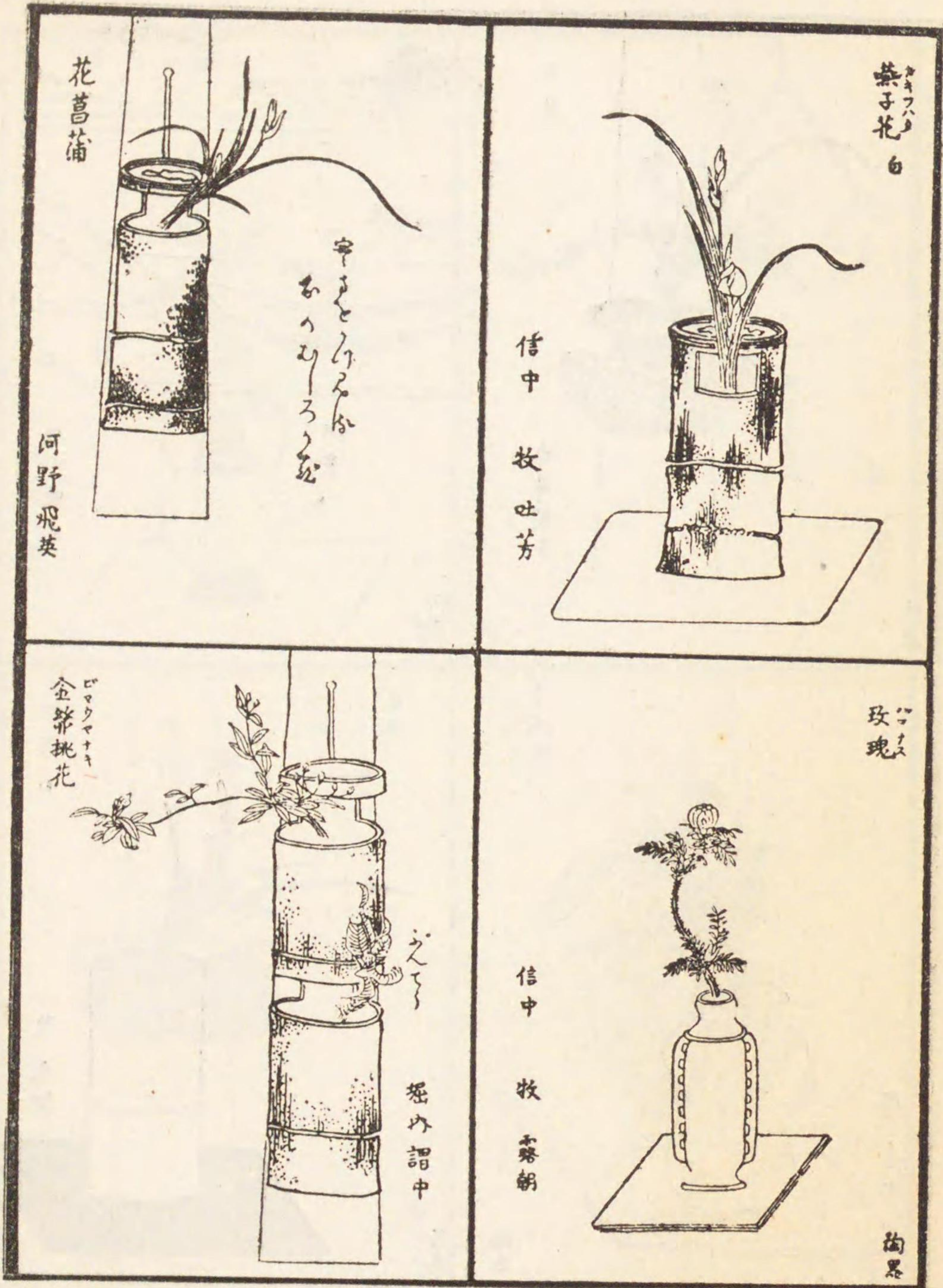
插花四季枝折

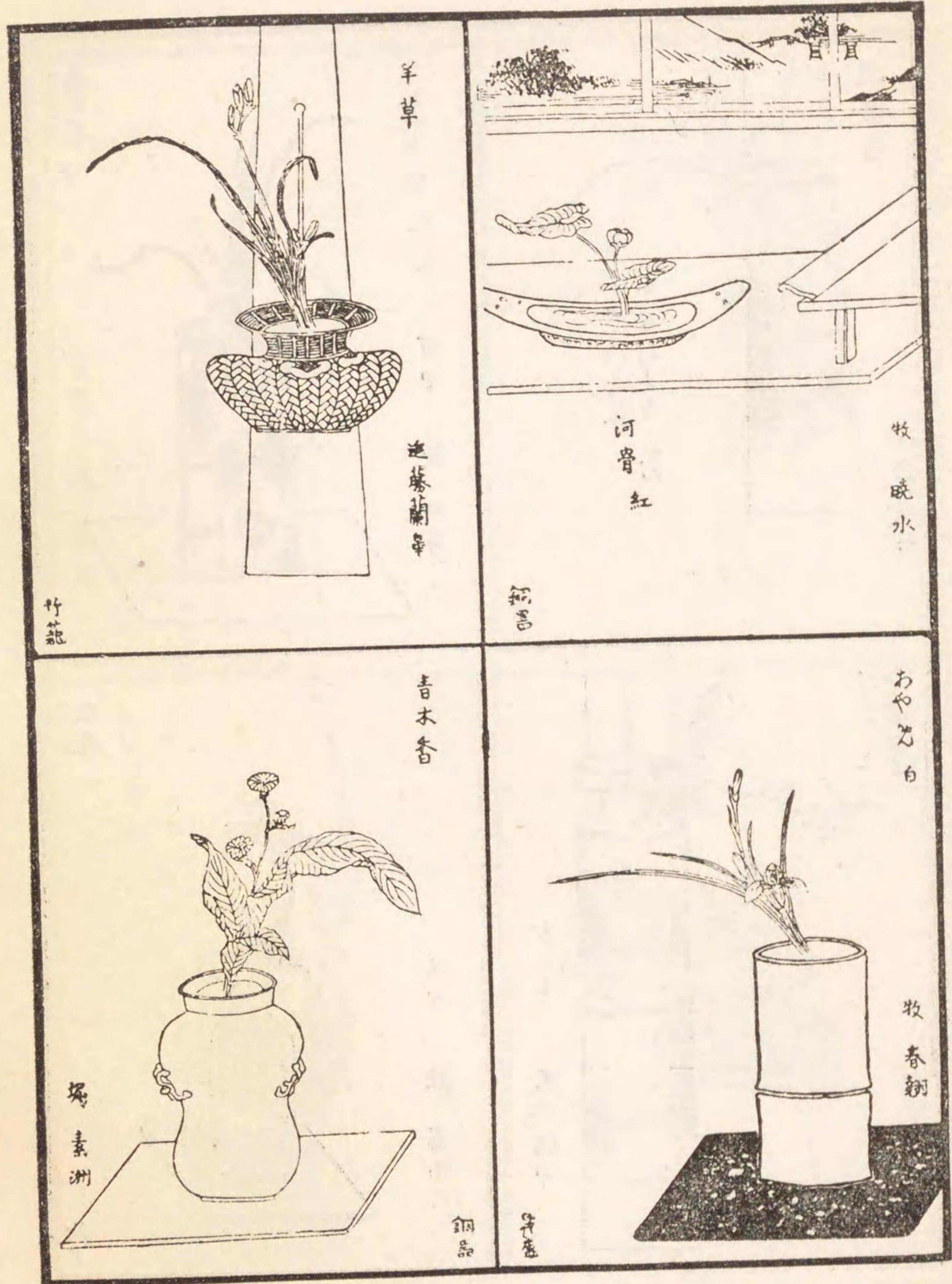
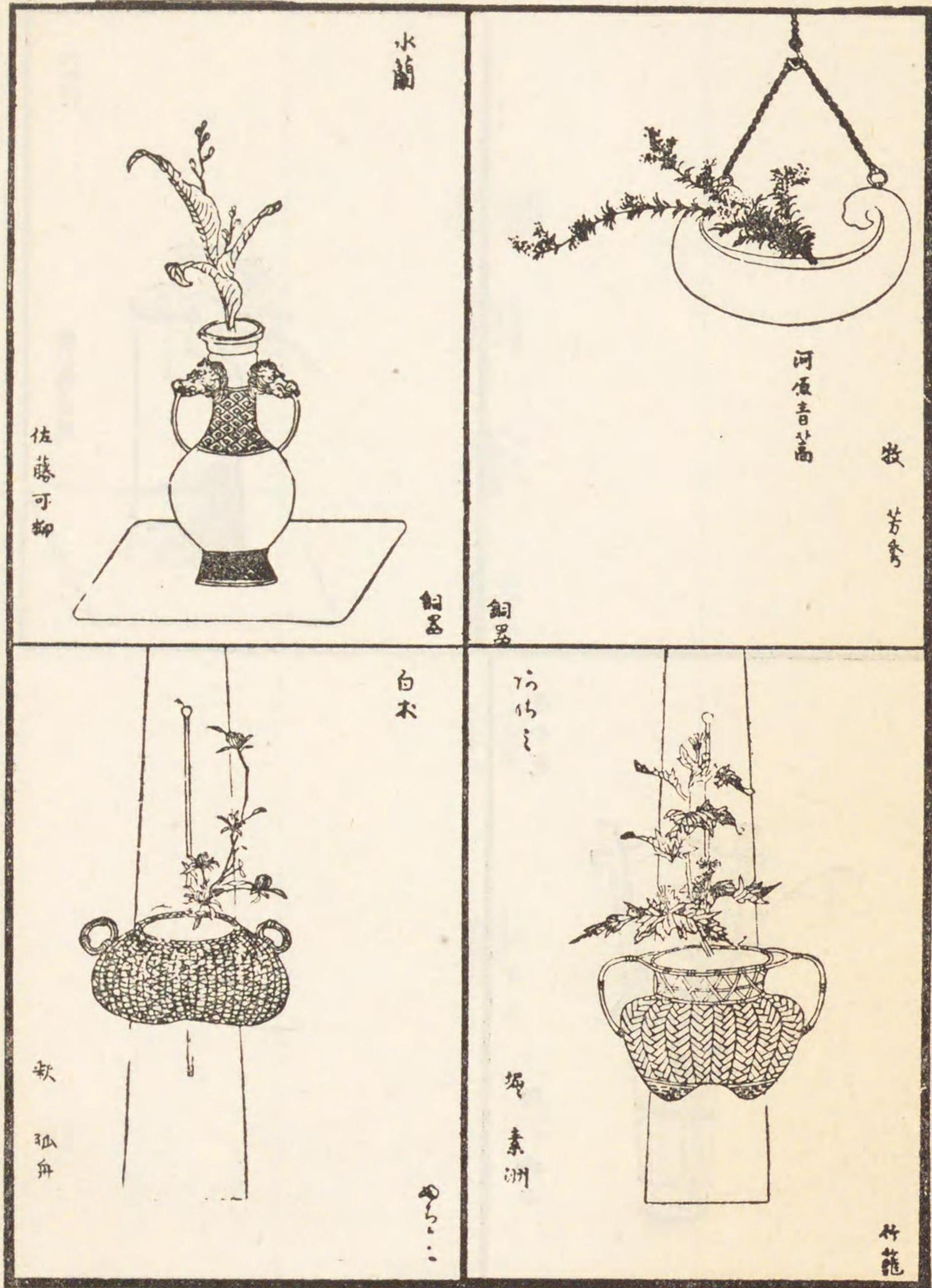


插花四季枝折









花插
四季
枝折
秋

插花四季枝折

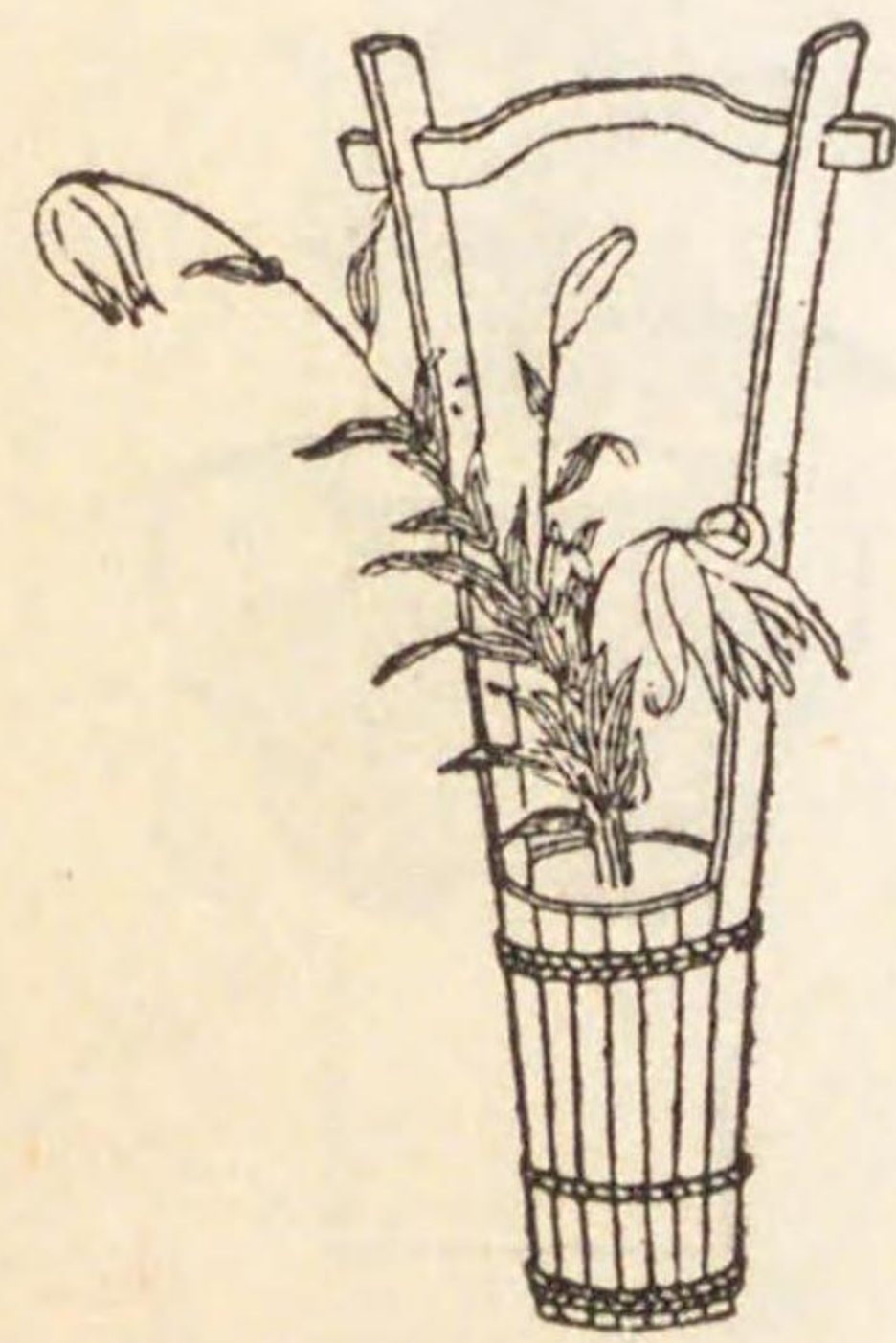
萱草

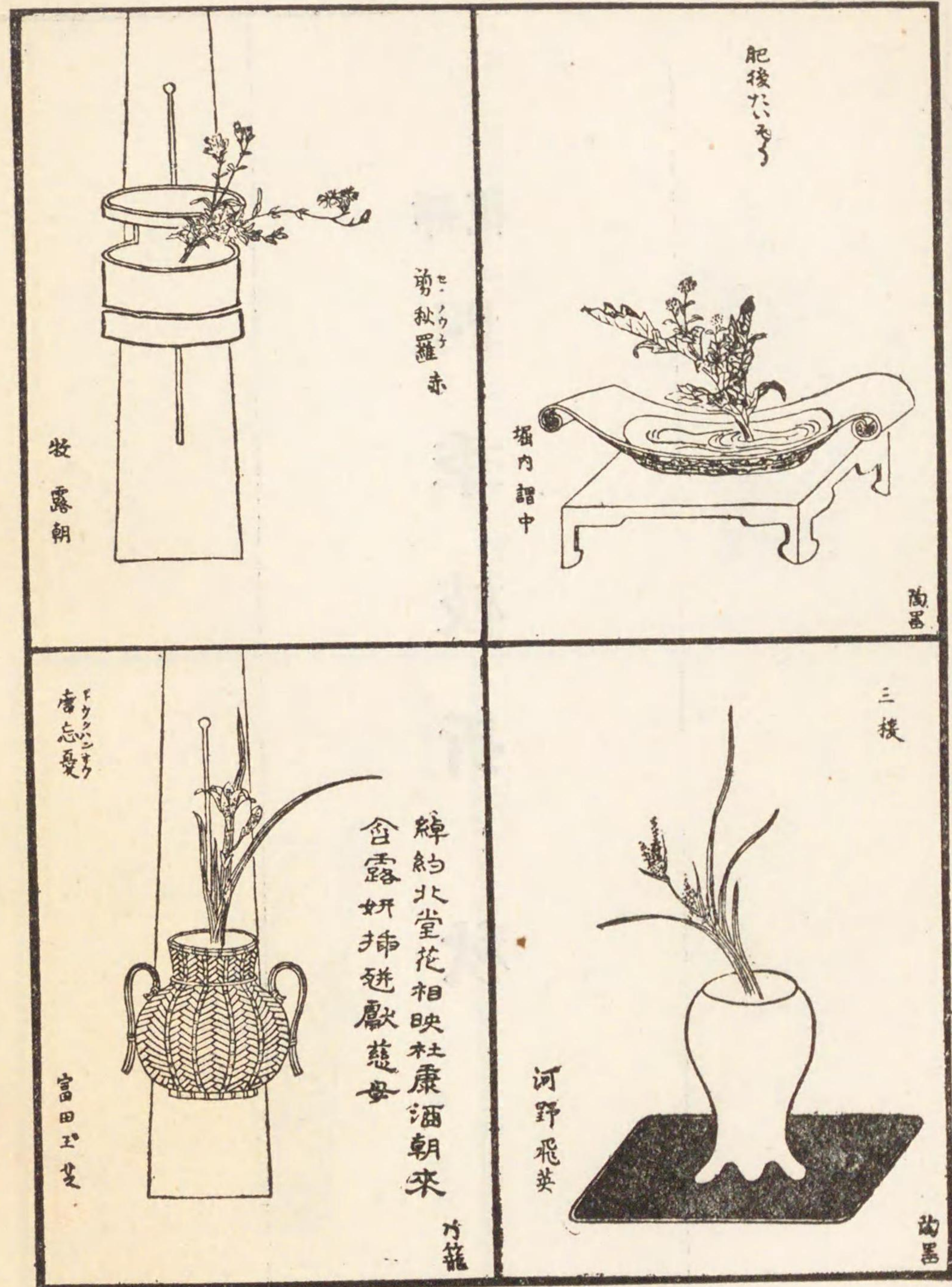
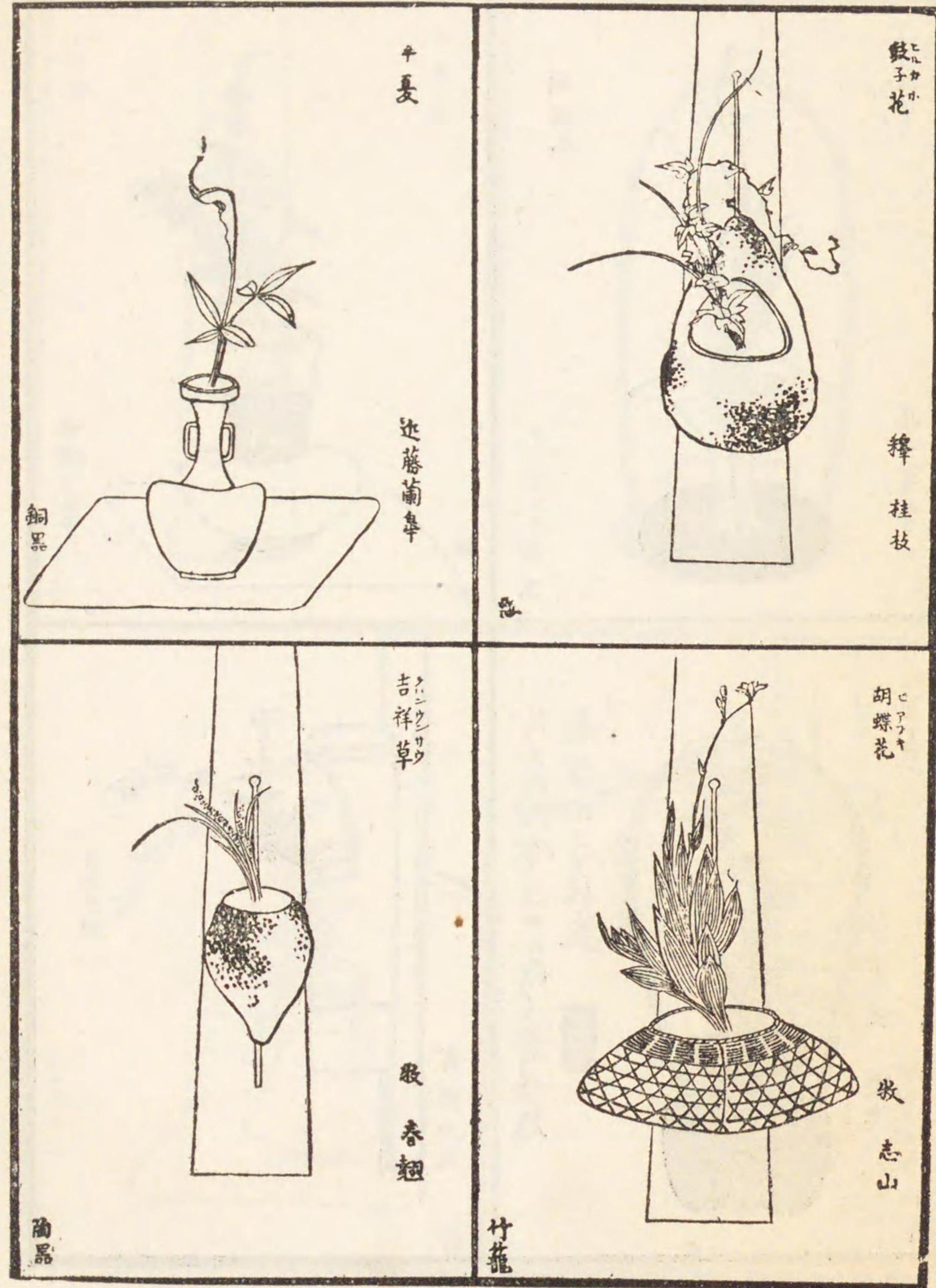
齊藤香晚

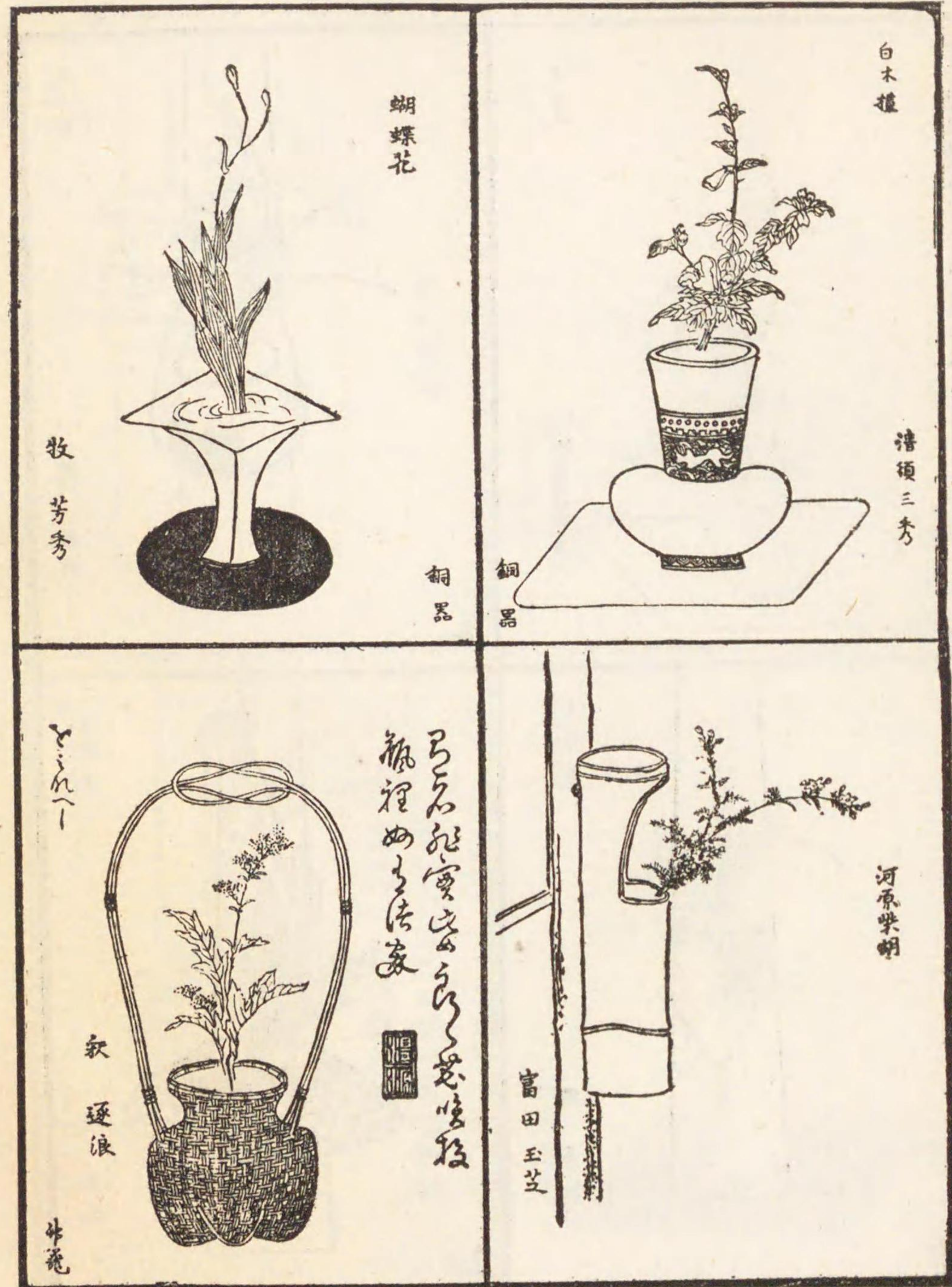
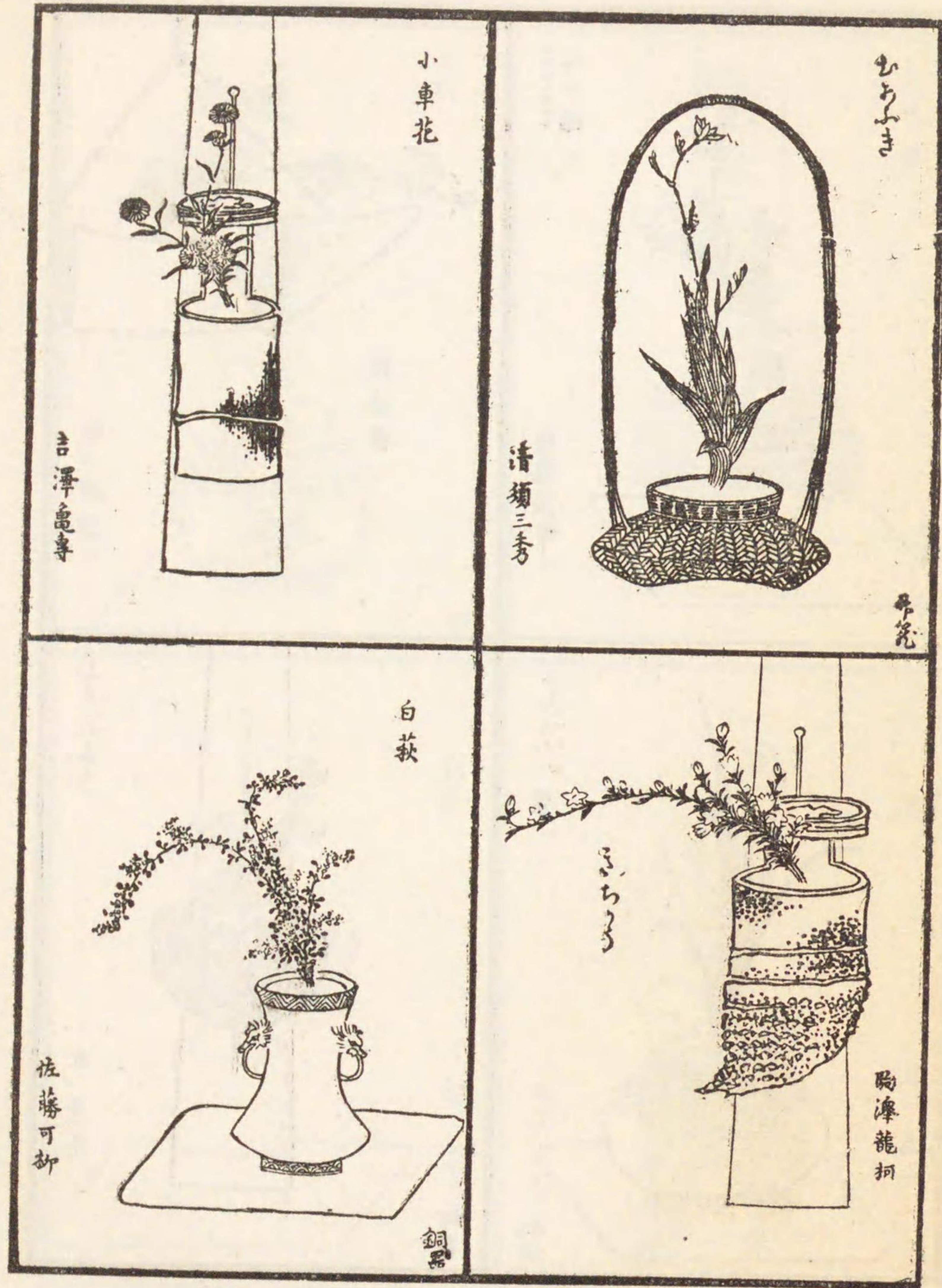


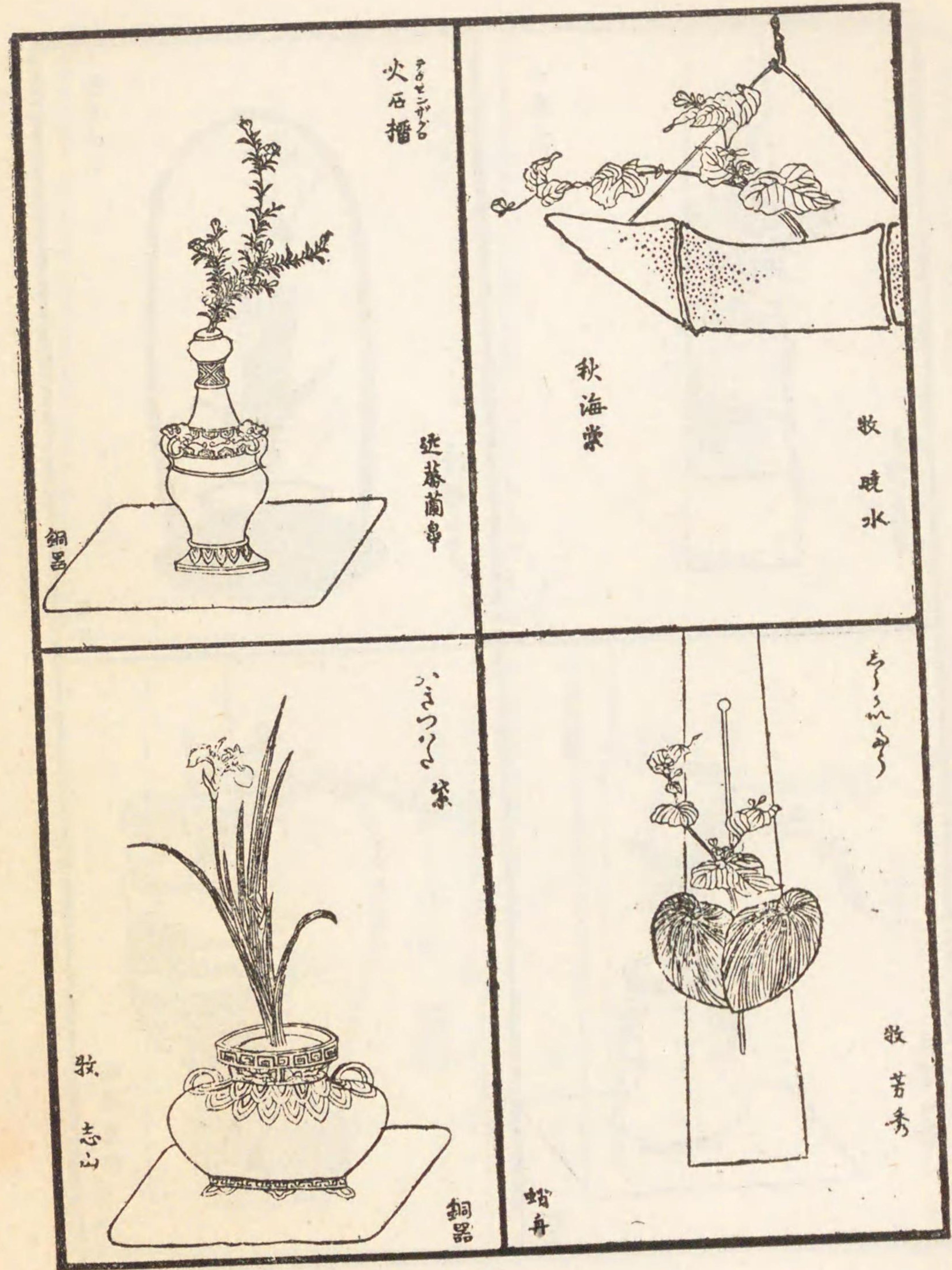
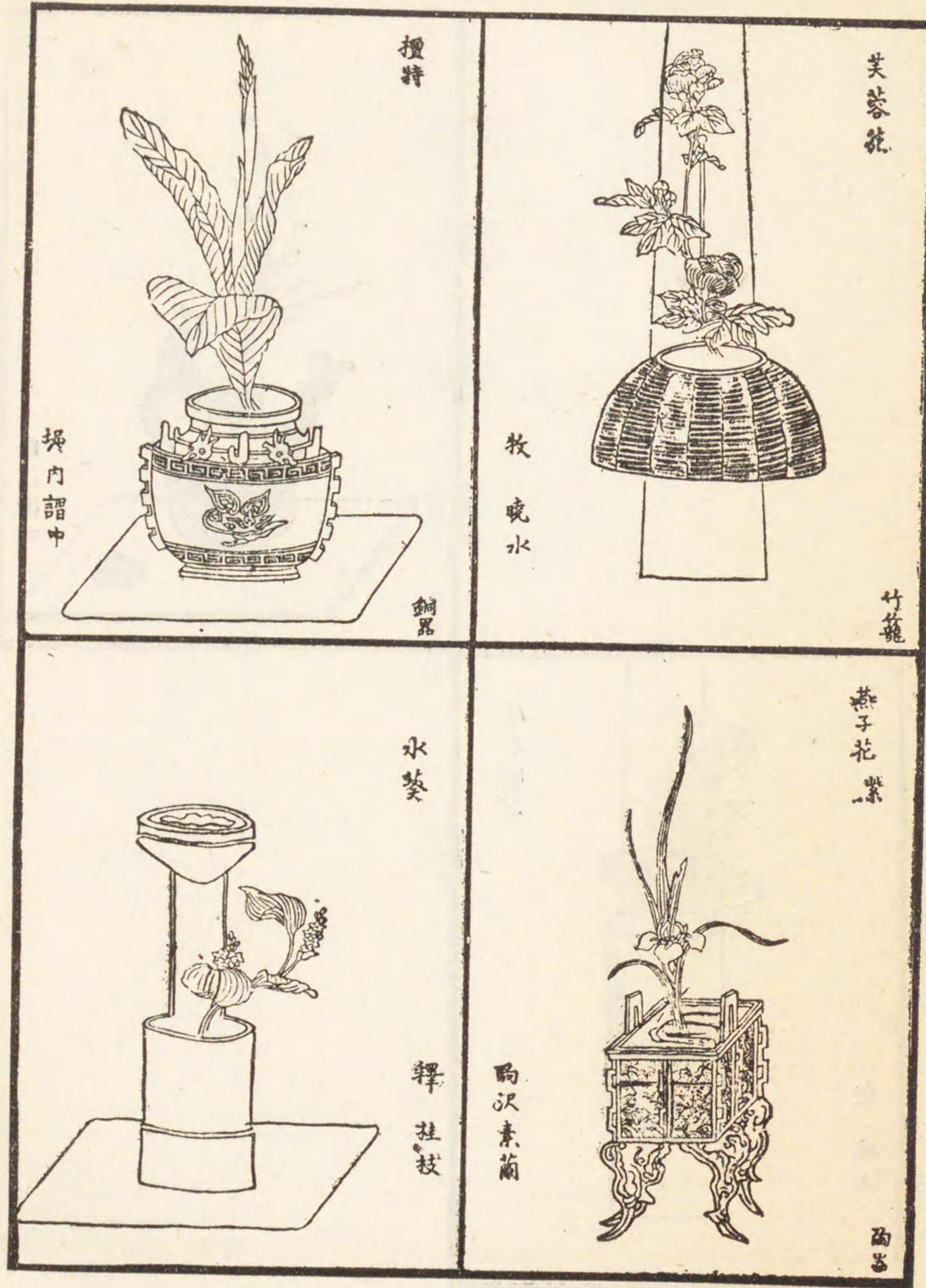
夜合花

牧
晚水

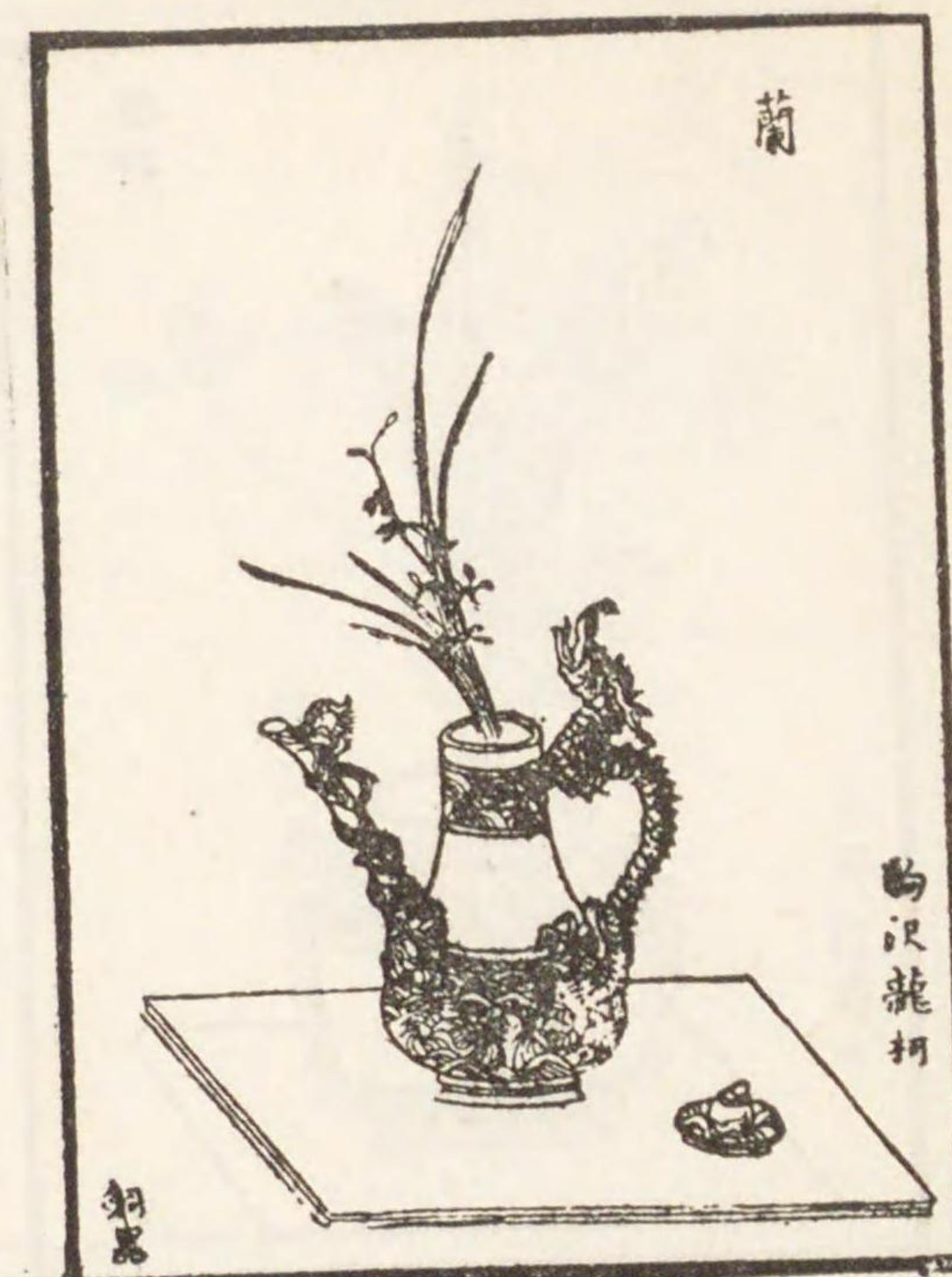




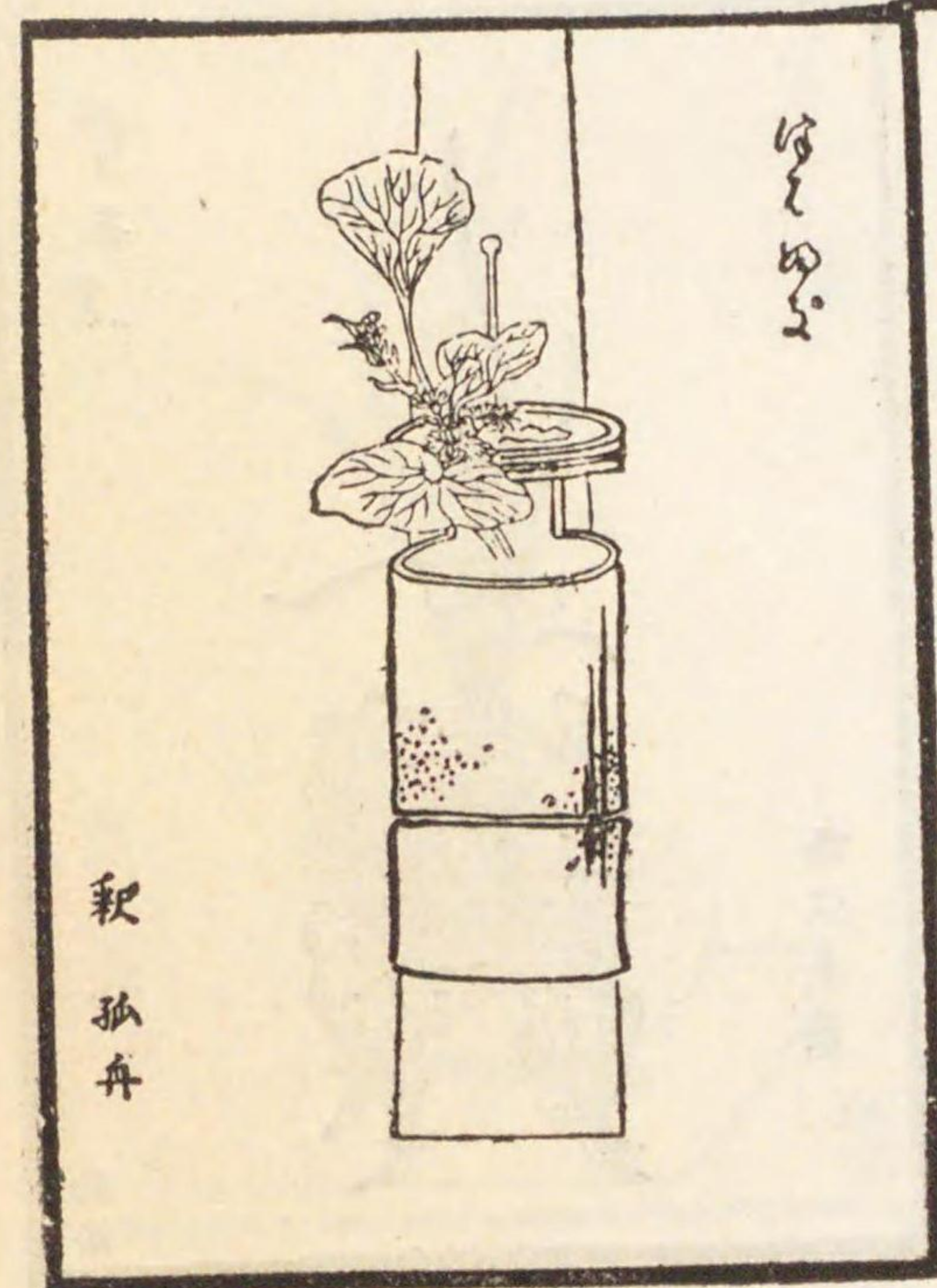




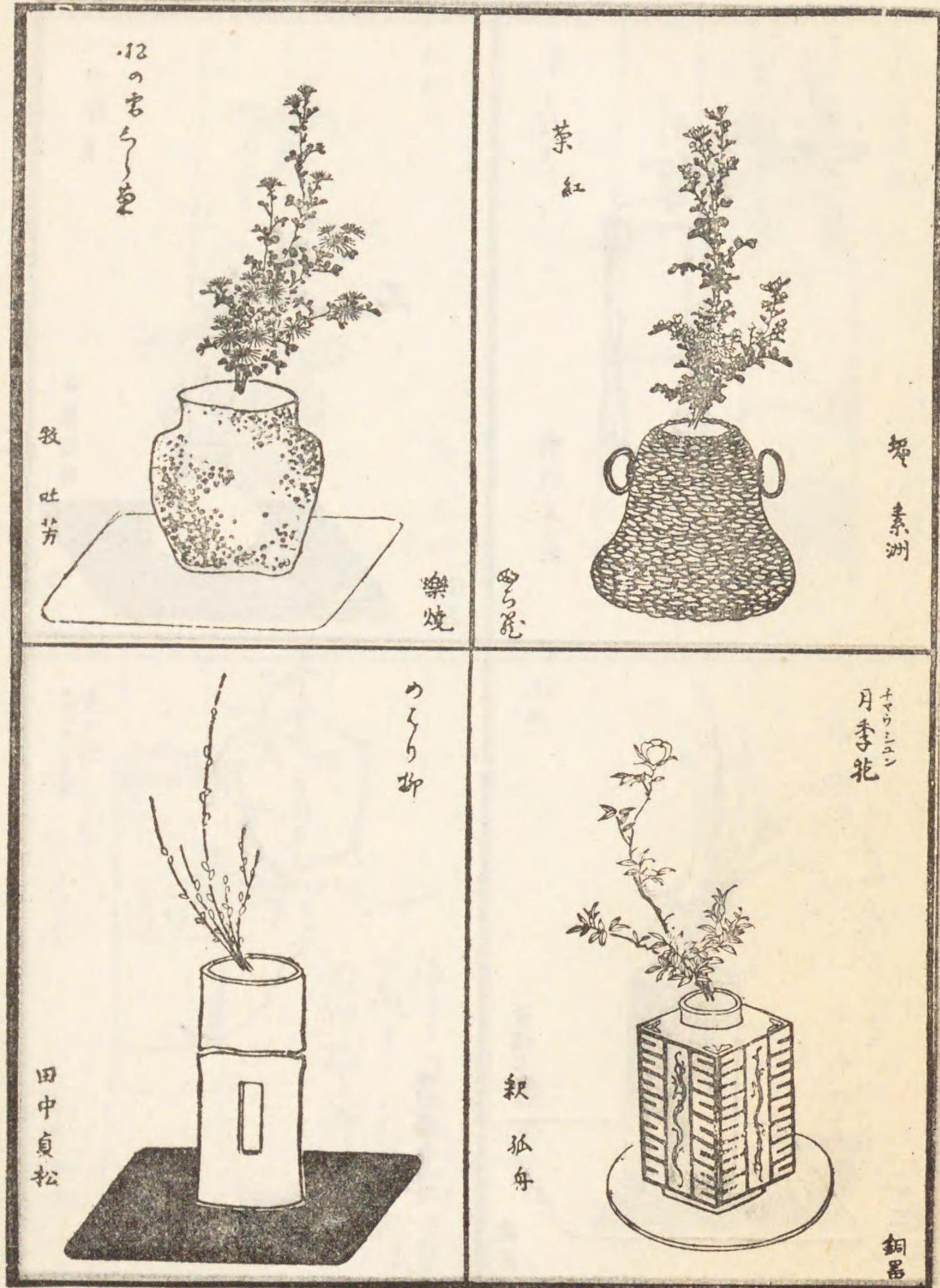
花插
四季
枝折
冬



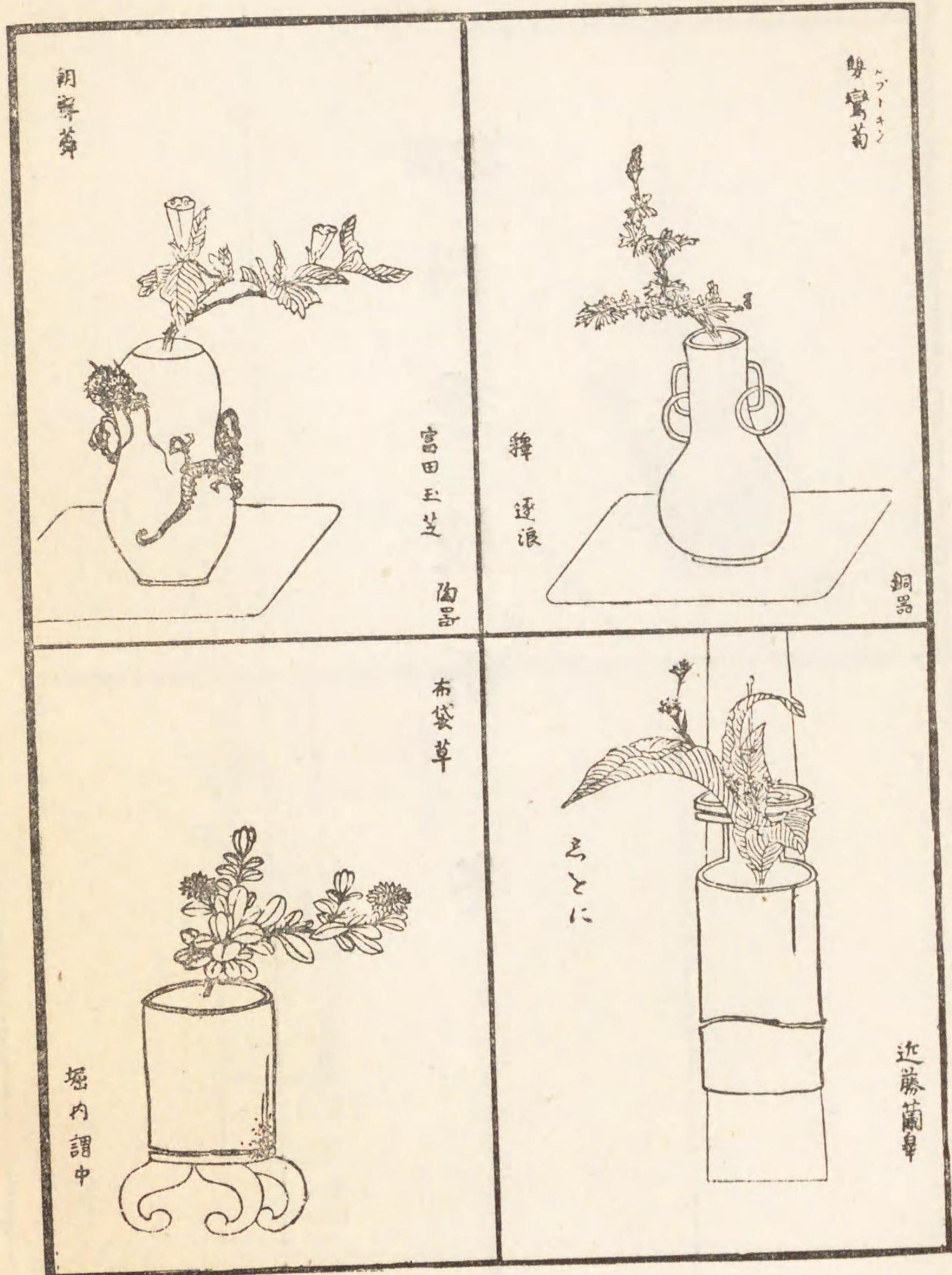
插花四季枝折



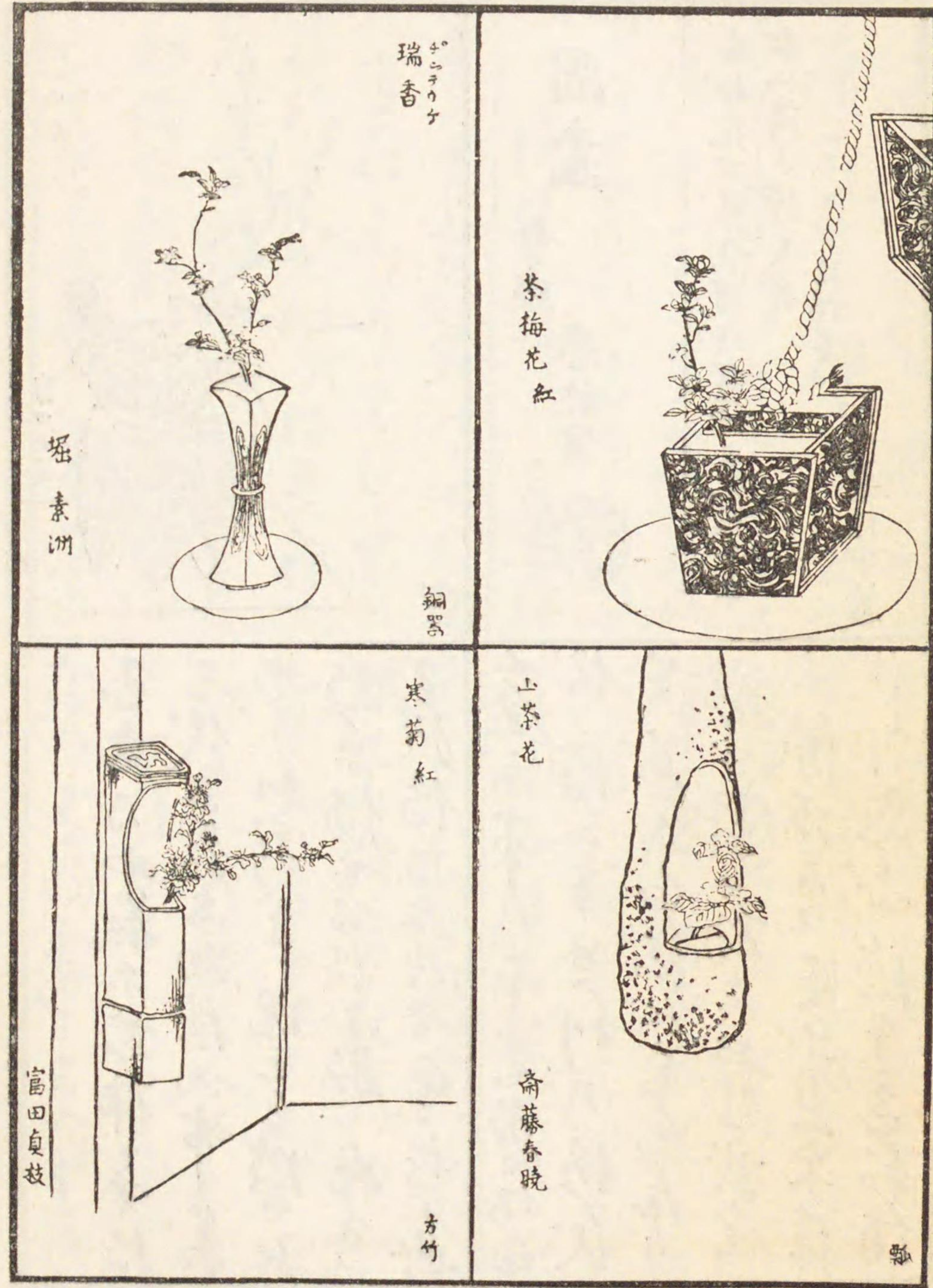
插花四季枝折



插花四季枝折



插花四季枝折



插花四季枝折

